

塔之原遺跡

— 広島市安芸区上瀬野町所在 —

2015

公益財団法人広島市文化財団

は し が き

広島市安芸区瀬野川地区は、中央を瀬野川が広島湾へと流れ、その両岸には山並みが連なる自然に恵まれた場所です。古くは山陽道、現在では一般国道2号やJ R山陽本線といった幹線が通り、交通の要衝として栄えてきた場所でもあります。

近年、一般国道2号の交通渋滞の解消などを目的とする東広島・安芸バイパス道路の建設に伴い発掘調査が進められ、瀬野川流域沿いの弥生時代から古墳時代にかけての様子が、少しずつ明らかになってきました。今回の塔之原遺跡の発掘調査も、その一環として行われたものです。

調査では、古墳時代初頭の集落跡と、近世の寺院に関する遺構と、これに伴う遺物を確認しました。とくに、近世の遺構の発掘調査はこの地域で初めてのことで、貴重な資料を得ることができました。

この報告書が一人でも多くの方に活用され、広島市域の歴史を理解する一助となれば幸いです。最後になりましたが、この調査を行うにあたりご指導、ご助言をいただきました諸先生方、ご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様、ならびに調査に従事していただいた皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成27年（2015年）3月

公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

例 言

1. 本書は、広島市安芸区上瀬野町字塔之原における一般国道2号（安芸バイパス）建設事業に伴い、平成26年度に実施した塔之原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省中国地方整備局広島国道事務所から委託を受け、公益財団法人広島市文化財団が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅰ～Ⅲ－3を牛黄著豊が、Ⅲ－4を楳木敬太が、Ⅳを荒川正己・牛黄著・楳木が行い、編集は牛黄著・楳木が実施した。
4. 遺構の実測・写真撮影、遺物の実測、図面の製図は荒川・牛黄著・楳木が実施した。遺物の写真撮影は楳木が実施した。
5. 発掘調査に係る基準点の設置は、株式会社四航コンサルタントに委託した。
6. 本書に掲載した航空写真撮影及び石垣・集石遺構写真測量は株式会社イビソクに委託した。
7. 遺物の科学分析は、株式会社古環境研究所に委託した。
8. 第1図は、国土地理院による平成6年発行の50,000分の1の地形図（海田市）を複製して使用した。
9. 第2図における基準点のデータは下記のとおりである。
基準杭1：X = -175270.058 Y = 41533.282
基準杭2：X = -175295.049 Y = 41610.643
基準点1から基準点2の方向角は107° 54' 8.8"である。
10. 本書に掲載した挿図の方位は、第1図は真北、その他は全て方眼北である。
11. 本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。
SH：竪穴住居跡 SD：溝状遺構 SK：土坑・集石遺構 P：柱穴等 SX：性格不明遺構
12. 土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行）に拠った。
13. 本書での弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年は、若島一則氏の編年（若島編年）

に基づく。

若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌 I』財団法人広島市文化財団 2002 年（ひろしま WEB 博物館 <http://www.mogurin.or.jp/>にて閲覧可）

14. 本発掘調査で得られた資料は，広島市教育委員会から委託を受けて，公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 遺構と遺物	9
IV まとめ	62
附編 塔之原遺跡発掘調査に係る遺物科学分析報告	83

挿 図 目 次

第 1 図 塔之原遺跡周辺主要遺跡分布図	6
第 2 図 塔之原遺跡周辺地形図	8
第 3 図 基本層序	10
第 4 図 集落遺構配置図	11
第 5 図 近世遺構配置図	12
第 6 図 SH1 P3 実測図	13
第 7 図 SH1 実測図	14
第 8 図 SH2 P3 実測図	15
第 9 図 SH2 実測図	16
第 10 図 SH3 実測図	17
第 11 図 SH4 実測図	18
第 12 図 SH5 実測図	19
第 13 図 SK1 実測図	20
第 14 図 出土遺物実測図 (1)	27
第 15 図 出土遺物実測図 (2)	28
第 16 図 出土遺物実測図 (3)	29
第 17 図 石垣周辺平面図	31
第 18 図 石垣実測図	32
第 19 図 石垣下層東側土器群実測図	33
第 20 図 石垣下層西側土器群実測図	33
第 21 図 柱穴群実測図	34
第 22 図 各柱穴実測図	36
第 23 図 SK1 実測図	38
第 24 図 SK2 実測図	39
第 25 図 SK3 実測図	39
第 26 図 SK4 実測図	40
第 27 図 SK5 実測図	41

第 28 図	SK6 実測図	41
第 29 図	SK7 実測図	42
第 30 図	SK8 実測図	42
第 31 図	SK9 実測図	43
第 32 図	SK10 実測図	44
第 33 図	SK11 実測図	45
第 34 図	SK12 実測図	45
第 35 図	SK13・SD1 実測図	46
第 36 図	SK14 実測図	47
第 37 図	SK15・SK16・SX1 実測図	48
第 38 図	SK17・SK18 実測図	49
第 39 図	SK19 実測図	50
第 40 図	SK20・SK21 実測図	51
第 41 図	SK22 実測図	52
第 42 図	SK23 実測図	52
第 43 図	SK24 実測図	53
第 44 図	SK25 実測図	54
第 45 図	出土遺物実測図 (4)	58
第 46 図	出土遺物実測図 (5)	59
第 47 図	出土遺物実測図 (6)	60
第 48 図	出土遺物実測図 (7)	61
第 49 図	集落遺構配置図	63
第 50 図	集落遺構変遷図	65

付 表 目 次

第 1 表	出土土器観察表	23
第 2 表	出土石器観察表	25
第 3 表	出土鉄器観察表	26
第 4 表	出土陶磁器観察表	56
第 5 表	出土土師質土器観察表	57
第 6 表	出土石製品観察表	57
第 7 表	塔之原遺跡竪穴住居跡の時期	64
第 8 表	塔之原遺跡第 1 次調査中央土坑を持つ竪穴住居跡観察表	68
第 9 表	広島県内弥生時代～古墳時代二重土坑一覧表	69
第 10 表	広島県内弥生時代～古墳時代 2 本柱竪穴住居跡集成表	71

図版目次

- | | | | | |
|-------|---|-------------------|-------|-----------------|
| 図版 1 | a | 塔之原遺跡（航空写真） | 図版 19 | 出土遺物（3） |
| | b | 塔之原遺跡（航空写真） | 図版 20 | 出土遺物（4） |
| 図版 2 | a | 塔之原遺跡（航空写真） | 図版 21 | a 近世面検出状況（航空写真） |
| | b | 塔之原遺跡（航空写真） | | b 石垣検出状況（航空写真） |
| 図版 3 | a | 塔之原遺跡（調査前） | 図版 22 | a 石垣検出状況 |
| | b | 塔之原遺跡（調査前） | | b 石垣土層断面 |
| 図版 4 | a | 集落跡検出状況（航空写真） | 図版 23 | a 石垣面土器・炭化物出土状況 |
| | b | SH1・SH2・SH5（航空写真） | | b 石垣面土器・炭化物出土状況 |
| 図版 5 | a | SH3・SH4（航空写真） | 図版 24 | a 石垣下層東側土器群 |
| | b | SH1 遺物出土状況 | | b 石垣下層東側土器群 |
| 図版 6 | a | SH1 遺物出土状況 | 図版 25 | a 石垣西端部 |
| | b | SH1 遺物出土状況 | | b 石垣下層西側土器群 |
| 図版 7 | a | SH1 P3 断面 | 図版 26 | a 石垣下層西側土器群 |
| | b | SH1 P3 | | b 石垣下層西側土器群 |
| 図版 8 | a | SH1 | 図版 27 | a 柱穴群 |
| | b | SH2 遺物出土状況 | | b 柱穴群 |
| 図版 9 | a | SH2 P3 断面 | 図版 28 | a P6 上層石材検出状況 |
| | b | SH2 P3 | | b P6 下層石材検出状況 |
| 図版 10 | a | SH2 P1 断面 | 図版 29 | a P16 石材検出状況 |
| | b | SH2 | | b P19 石材検出状況 |
| 図版 11 | a | SH3 焼土面検出状況 | 図版 30 | a SK1 石材検出状況 |
| | b | SH3 焼土面検出状況 | | b SK1 南東部断面 |
| 図版 12 | a | SH3 P1 断面 | 図版 31 | a SK1 完掘 |
| | b | SH3 | | b SK2 |
| 図版 13 | a | SH4 炭化材出土状況 | 図版 32 | a SK3 石材検出状況 |
| | b | SH4 炭化材出土状況 | | b SK3 断面 |
| 図版 14 | a | SH4 P3 | 図版 33 | a SK3 完掘 |
| | b | SH4 | | b SK4 石材検出状況 |
| 図版 15 | a | SH5 P1 | 図版 34 | a SK4 完掘 |
| | b | SH5 | | b SK5・SK6 完掘 |
| 図版 16 | a | SK1 断面 | 図版 35 | a SK6 石材検出状況 |
| | b | SK1 | | b SK6 断面 |
| 図版 17 | | 出土遺物（1） | 図版 36 | a SK7 石材検出状況 |
| 図版 18 | | 出土遺物（2） | | b SK7 断面 |

- | | | | | | |
|-------|---|----------------------|-------|---|----------------|
| 図版 37 | a | SK7 完掘 | 図版 47 | a | SK19 完掘 |
| | b | SK8 | | b | SK20・SK21 |
| 図版 38 | a | SK9 石材検出状況 | 図版 48 | a | SK22 石材検出状況 |
| | b | SK9 断面 | | b | SK22 断面 |
| 図版 39 | a | SK9 完掘 | 図版 49 | a | SK22・SK23 完掘 |
| | b | SK10・SK11・P16 | | b | SK24 遺物出土状況 |
| 図版 40 | a | SK10 | 図版 50 | a | SK24 完掘 |
| | b | SK11 | | b | SK25 |
| 図版 41 | a | SK11 桶痕跡検出状況 | 図版 51 | | 近世出土遺物 (1) |
| | b | SK11 完掘 | 図版 52 | | 近世出土遺物 (2) |
| 図版 42 | a | SK12 | 図版 53 | | 近世出土遺物 (3) |
| | b | SK13・SD1 | 図版 54 | | 近世出土遺物 (4) |
| 図版 43 | a | SK14・SK17・SK18 | 図版 55 | | 近世出土遺物 (5) |
| | b | SK14 底面拡大 | 図版 56 | | 近世出土遺物 (6) |
| 図版 44 | a | SK15・SK16・SX1 炭面検出状況 | 図版 57 | | 塔之原遺跡の木材 I |
| | b | SK15・SK16・SX1 完掘 | 図版 58 | | 塔之原遺跡の木材 II |
| 図版 45 | a | SK19 石材検出状況 | 図版 59 | | 遺跡周辺の地質図 |
| | b | SK19 断面 | 図版 60 | | 粘土中の粒子の偏光顕微鏡写真 |
| 図版 46 | a | SK19 桶痕跡検出状況 | | | |
| | b | SK19 桶痕跡検出状況 | | | |

I はじめに

広島県教育委員会は平成25年度に、国土交通省中国地方整備局広島国道事務所(以下「広島国道」)の依頼を受け、一般国道2号(安芸バイパス)建設事業地内において試掘調査を実施し、安芸区上瀬野町において遺跡の存在を確認した。当該地は、平成15年度に財団法人広島県教育事業団により第1次調査が行われた塔之原遺跡の遺構が継続する場所にあたり、この遺跡の取り扱いについて両者で協議が行われたが、計画の変更は困難であり、記録保存の措置を講ずることとなった。

そこで、広島国道は平成26年5月7日に、公益財団法人広島市文化財団(以下「文化財団」)に発掘調査及び報告書作成の実施を依頼した。これを受け、文化財団文化科学部文化財課では、現地調査を平成26年6月9日から平成26年10月23日にかけて実施した。報告書作成は平成26年11月から平成27年3月にかけて実施した。

発掘調査の関係者は以下のとおりである。

調査委託者 国土交通省中国地方整備局広島国道事務所

調査主体 公益財団法人広島市文化財団

調査担当課 公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

調査関係者 渡田春男 理事長

藤岡賢司 常務理事

福永 治 常務理事

浜中典明 常務理事

中田英樹 常務理事

高野和彦 文化科学部長

沼田有史 文化財課長

河村直明 文化財課主任指導主事

高下洋一 文化財課主任

調査担当者 牛黄著豊 文化財課指導主事

荒川正己 文化財課主任学芸員

楯木敬太 文化財課学芸員

調査補助員(50音順)

植田照三 植田敏則 内田勝義 内田孝 大嶋忠久 大野克彦 奥文雄 五石喜満

古寺正次 佐々木敏 高橋正信 高橋美穂子 田中実 谷村幸信 谷村美代子

寺田誠 土井博之 西田英明 原みゆき 宮下洋昭 宮地美穂 吉川直樹

整理作業員(50音順)

菅原彰子 住川香代子 橋本礼子

なお、発掘調査を進めるにあたっては、国土交通省中国地方整備局広島国道事務所、広島市市民局文化スポーツ部文化振興課文化財担当、瀬野公民館、広島市瀬野福祉センター、ならびに地元町内会・自治会をはじめ多くの方々に多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに調査にあたっては広島大学大学院教授古瀬清秀氏に、陶磁器については東広島市教育委員会石垣敏之氏に、石材鑑定については広島市こども文化科学館長幾田擁明氏から貴重なご助言、ご指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

1 自然的・地理的環境

塔之原遺跡は、広島湾の北東、広島市安芸区上瀬野町字塔之原に所在し、旧瀬野川町域に位置する。旧町域の大部分は山地に囲まれ、町の中央を瀬野川が北東から南西へほぼ直線的に貫流し、安芸郡海田町を経て広島湾に注いでいる。現在の集落及び耕地は、この瀬野川沿いの、特に小河川との合流域を中心に営まれている。即ち、熊野川が合流する上瀬野地区、榎ノ山川が合流する下瀬野地区、畑賀川が合流する中野地区及び畑賀川中下流域の畑賀地区の4地区に大別することができる¹⁾。

今回調査した塔之原遺跡は、上瀬野地区の平野を望む緩斜面上にある。上瀬野地区は、瀬野川が東広島市八本松町の賀茂台地から流れを発し、狭小な谷地形を下った山地からの出口に位置し、本地区を境に下流域では流れは緩やかとなり、わずかではあるが河川の氾濫を避けることのできる可耕地を見出すことができる。また、一方で瀬野川流域は、古くは古代山陽道（西国街道）が通り、広島湾岸から東広島市、さらには遠く岡山や近畿とを結び、多くの人々に利用されてきた²⁾。上瀬野地区は、瀬野川流域において貴重な可耕地に恵まれた平野としての重要性に加え、交通の要衝としても利便性の高い地域であったと考えられる。

遺跡の位置は、旧町域南部に位置する鉾取山（標高711.5m）から北東にのびる尾根の先端付近北側に広がる緩斜面上で、上瀬野地区の平野部を一望できる。標高は約90m、付近の水田との比高は約15mである。

2 歴史的環境

本遺跡の所在する瀬野川流域を中心とした地域の歴史的環境についてのべる。

旧瀬野川町域の弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の分布を見ていくと、地域的には先述した上瀬野、下瀬野、中野、畑賀の4地区にはほぼ分かれて位置している。

まず、4地区の中では最も広い平野を有し数多くの遺跡が確認されている中野地区では、近年のバイパス建設に伴う発掘調査によりその内容が明らかになってきた。天狗坊山北西の尾根筋中腹に位置する三谷遺跡³⁾は、弥生時代中期終末から後期後半にかけての、比較的長期間にわたって営まれた大規模集落であり、住居跡30軒を含む集落跡が確認された。本遺跡からは直径10mを超える広島市最大級の大型住居や、50点を超える大量の鉄器も出土している。中野地区の平野部を一望できる丘陵上に位置する成岡A地点遺跡⁴⁾では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡3軒を含む集落跡が確認された。また、同じ丘陵上の南側上方には、成岡B地点遺跡⁵⁾があり、弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけて築かれた17基の土壇墓を中心とした墳墓群が確認された。その他調査によるもの以外のものとして、丘陵端部の尾根上から弥生時代中期後半頃と位置づけられる土器が出土したとされる井原遺跡⁶⁾、同じく丘陵端部に位置し弥生時代後期中頃とされる山王

貝塚⁷⁾、弥生時代後半頃と考えられる川原地貝塚⁸⁾などがある。古墳時代に入ってから遺跡としては4基の古墳からなる成岡古墳群があり、前述した成岡A地点遺跡からは古墳時代初頭に築かれた3基の古墳が確認された。このうち第3号古墳からは骨鏃形鉄鏃が出土しており、朝鮮半島とのつながりがあった可能性も考えられる。畑賀川河口を望む丘陵上には、竪穴式石室を主体部とし畿内の要素をもつ上安井古墳⁹⁾が造られている。また、蓮華寺山(標高374m)の南にのびる尾根上先端部には、箱式石棺と推定される埋葬施設を主体部にもつ円墳などからなる大師堂裏山古墳群¹⁰⁾、その西方には大師堂裏古墳¹¹⁾が存在する。

畑賀地区には、畑賀川とその支流水谷川、為角川が合流する比較的広い沖積地に臨む丘陵上に中須賀神社境内遺跡¹²⁾があり、弥生時代後期から古墳時代前期の土器、古墳の石棺内部から内行花文鏡が出土したとされる。また、水谷川の両岸には水谷貝塚¹³⁾が存在していたようである。

下瀬野地区では、瀬野川沿いの可耕地を望む丘陵上に、山王貝塚と同種の貝類が認められ、弥生時代後期中頃に形成されたと考えられる一井木貝塚¹⁴⁾や、弥生集落跡とされる桑原東遺跡¹⁵⁾がある。

塔之原遺跡の位置する上瀬野地区では、本遺跡のほかに、すぐ東の丘陵上に段之原山遺跡¹⁶⁾があり、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居跡4軒を含む集落跡と墳墓群が確認された。塔之原遺跡¹⁷⁾では、第1次調査において竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡2棟、土坑11基、陥穴3基、土坑墓14基、土器棺墓1基、溝状遺構3条、性格不明遺構7からなる集落跡が確認された。時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭で、竪穴住居跡については2本柱住居が多数検出され、その数は広島市域の他の集落跡と比較しても突出している。また、水ヶ丸山(標高660.2m)から北西に派生した上瀬野地区を一望できる尾根上に、古墳時代前半頃までには築造されたと考えられる、箱式石棺を埋葬施設とする坊山古墳群¹⁸⁾がある。

古代以降、瀬野川地域には古代山陽道が通っており、東広島市方面から広島市方面に向かって下ると、東広島市八本松に位置する大山峠をこえて瀬野川地域へと至る。大山峠付近には大山駅家が、中野地区には荒山駅家があったと推定されている¹⁹⁾。さらに、荒山駅家から畑賀地区をぬけて甲越峠を越えると、安芸国府があったと比定される安芸郡府中町へと至る。このように本地域は古くから交通の要衝として栄え、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、瀬野川上・中流域には世能荒山荘が成立している。承久3年(1221)の承久の乱後、下野国の阿曾沼氏が世能荒山荘の地頭に任命され、後に鳥籠山城を拠点として戦国時代頃まで本地域を支配した²⁰⁾。

本地域における中世の遺跡としては、鳥籠山城跡²¹⁾、三ツ城跡²²⁾などがある。鳥籠山城跡は蓮華寺山から南西へ派生した丘陵先端部、標高91.8mに位置しており、阿曾沼氏の居城とされている。三ツ城跡は高城山の北東端を南に向かって派生する丘陵上に築かれた。城跡の最高所は標高286m、眼下に瀬野川の谷を見渡すという立地状況から、本城跡は境目防備・連絡用の役割を果たしていたと考えられる。

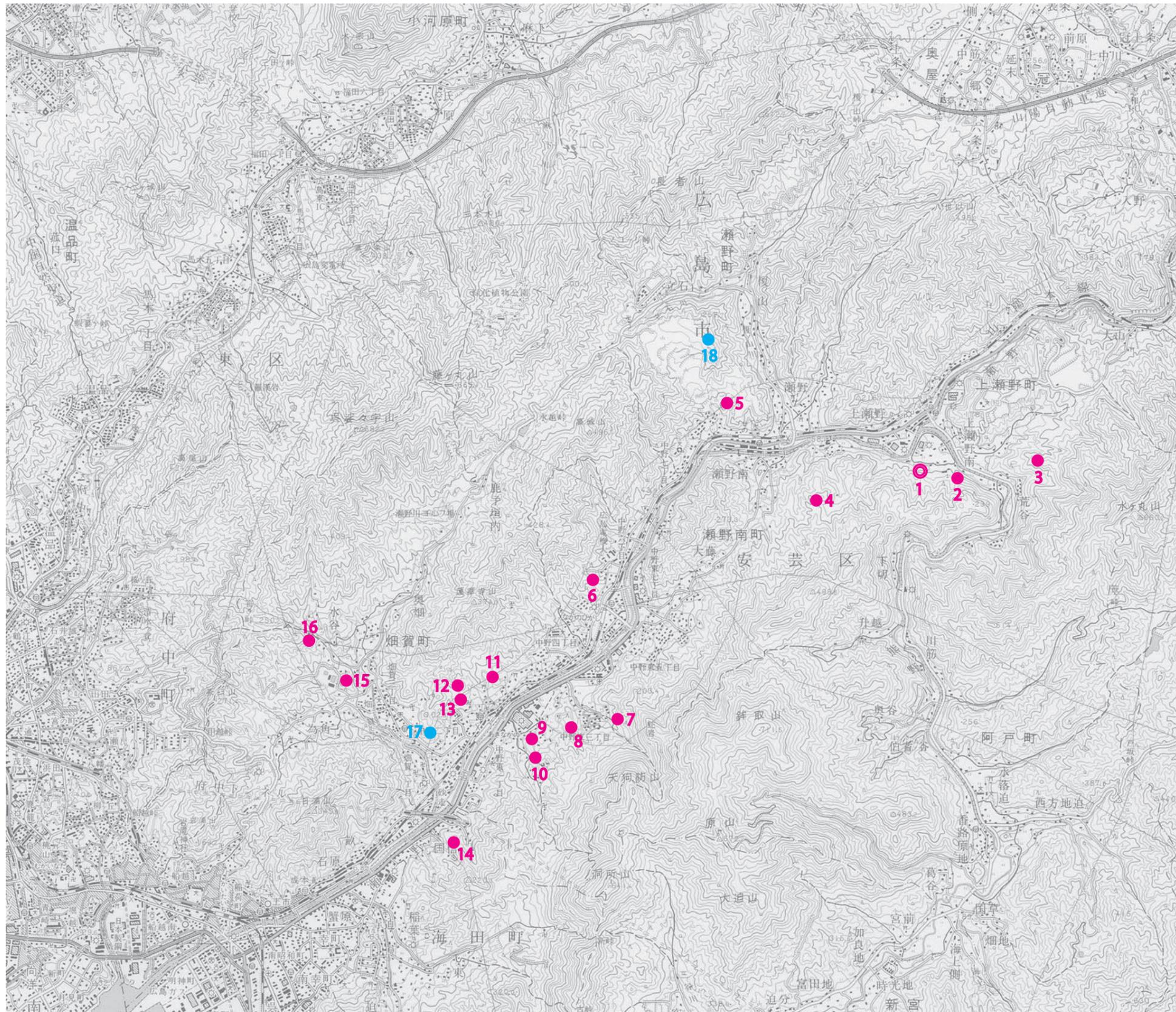
近世の瀬野川地域は畑賀村、中野村、下瀬野村、上瀬野村が成立し、米や麦のほかに綿や菜種など農業生産が盛んに行われている²³⁾。本遺跡が所在する上瀬野村についてみると、一貫田で西国街道(旧山陽道)と熊野跡村へ至る熊野跡往還とが分岐しており、『芸藩通志』には藩の御茶屋が

街道筋右手に記されている²⁴⁾。これらのことから街道筋を中心に集落が発展し、多くの人々が往来していた様子がうかがえる。

瀬野川流域では、これまでも弥生時代から古墳時代にかけての集落跡や古墳の発掘調査が行われてきた。今回の調査では、近世の民間信仰に関係する遺構が、広島市域では初めて確認されており、本地域の発展の様子を解明するうえで貴重な資料となるであろう。

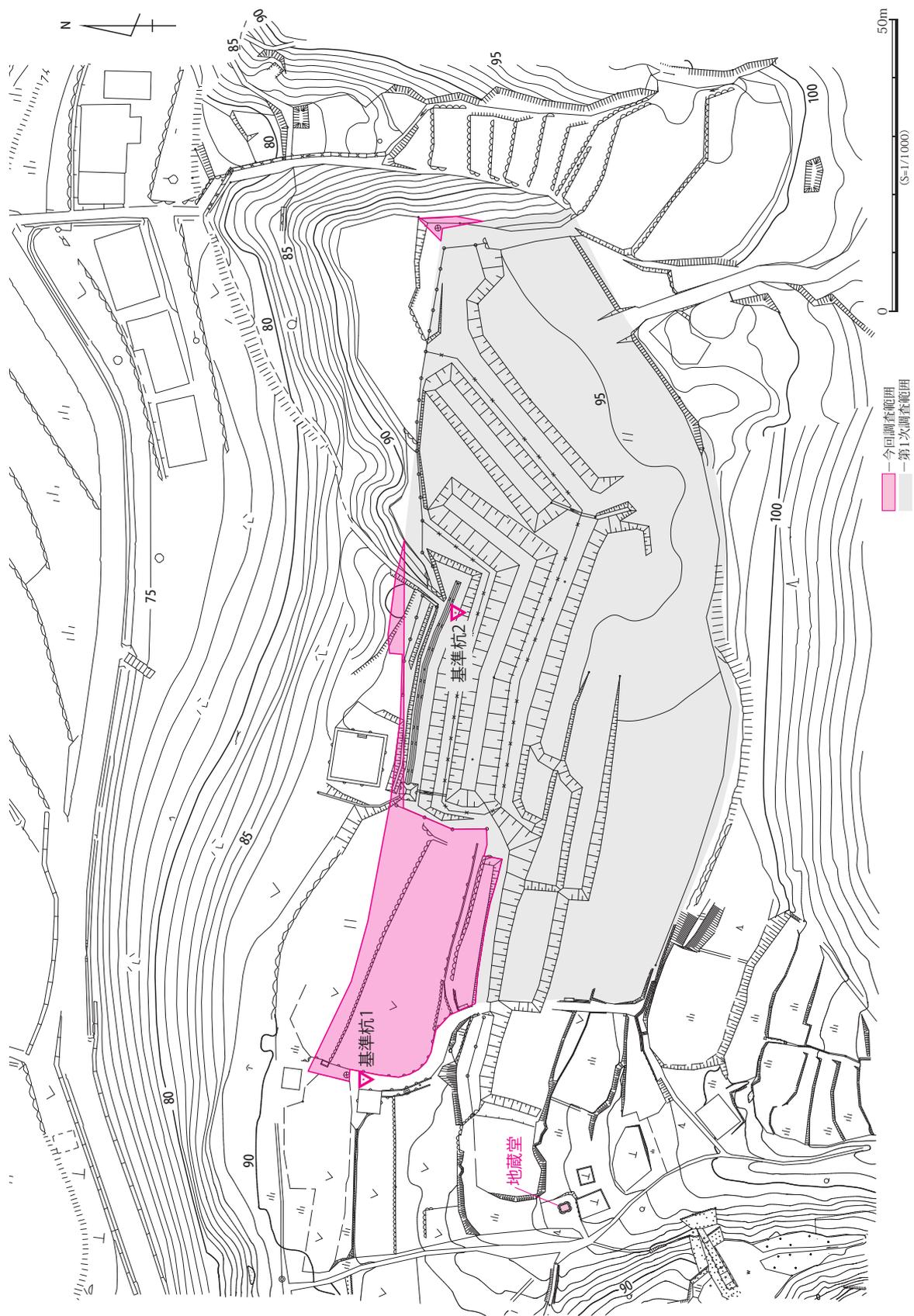
注

- 1) 広島市役所『瀬野川町史』 1980 年
- 2) 広島市教育委員会『古路・古道調査報告』 1992 年
- 3) 財団法人広島市文化財団『三谷遺跡』 2006 年
財団法人広島市文化財団『三谷遺跡第二次調査』 2010 年
- 4) 財団法人広島市文化財団『成岡 A 地点遺跡』 2001 年
- 5) 財団法人広島市文化財団『成岡 B 地点遺跡』 2001 年
- 6) 1 に同じ。
- 7) 1 に同じ。
- 8) 1 に同じ。
- 9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上安井古墳発掘調査報告書』 2001 年
- 10) 1 に同じ。
- 11) 1 に同じ。
- 12) 1 に同じ。
- 13) 1 に同じ。
- 14) 1 に同じ。
- 15) 1 に同じ。
- 16) 財団法人広島市文化財団『段之原山遺跡』 2006 年
- 17) 財団法人広島県教育事業団『塔之原遺跡』 2006 年
- 18) 1 に同じ。
- 19) 2 に同じ。
- 20) 1 に同じ。
- 21) 広島市教育委員会『山城』 1982 年
- 22) 広島市教育委員会『三ツ城跡発掘調査報告』 1987 年
- 23) 1 に同じ。
- 24) 2 に同じ。



- 1 塔之原遺跡
 - 2 段之原山遺跡
 - 3 坊山古墳群
 - 4 一井木貝塚
 - 5 桑原東遺跡
 - 6 井原遺跡
 - 7 三谷遺跡
 - 8 山王貝塚
 - 9 成岡 A 地点遺跡
 - 10 成岡 B 地点遺跡
 - 11 川原地貝塚
 - 12 大師堂裏山古墳群
 - 13 大師堂裏古墳
 - 14 上安井古墳
 - 15 中須賀神社境内遺跡
 - 16 水谷貝塚
 - 17 鳥籠山城跡
 - 18 三ツ城跡
- 弥生時代・古墳時代の遺跡
- 中世以降の遺跡

第 1 図 塔之原遺跡周辺主要遺跡分布図 (S=1/50,000)



第2図 塔之原遺跡周辺地形図 (S=1/1000)

Ⅲ 遺構と遺物

1 調査の概要

本遺跡は、平成 15 年度に第 1 次調査が実施されている。今回の調査範囲は、第 1 次調査における調査範囲の北側部分にあたる。調査区は水田として使用されていた旧耕作地であり、かなりの地形改変を受けていると想定された。

広島県教育委員会の試掘調査の結果と、調査開始時に設定した試掘溝の調査による観察から、竪穴住居と考えられる遺構や土師質土器片を確認し、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落跡と中世の集落跡として調査を開始した。

調査にあたっては、調査区の南側と北側にあった現代石垣を重機等の機械で取り壊し、除去した石は不整地運搬車で西側の旧耕作地へ運搬した。その後の耕作土除去、遺構面検出、遺構の掘り下げ等は人力で行った。

調査の結果、古墳時代初頭から前期前半にかけて営まれた竪穴住居跡 5 軒 (SH1～SH5)、土坑 1 基 (SK1)、近世に営まれた石垣遺構 1 基、柱穴群、土坑 25 基 (SK1～SK25)、溝状遺構 (SD1) 等を確認した。また、東側にのびる狭隘な範囲及び調査区東側飛び地については、遺構は確認できなかった。遺物は弥生土器・土師器・石器・鉄器・陶磁器等が出土した。

2 地形と基本層序 (第 3～5 図)

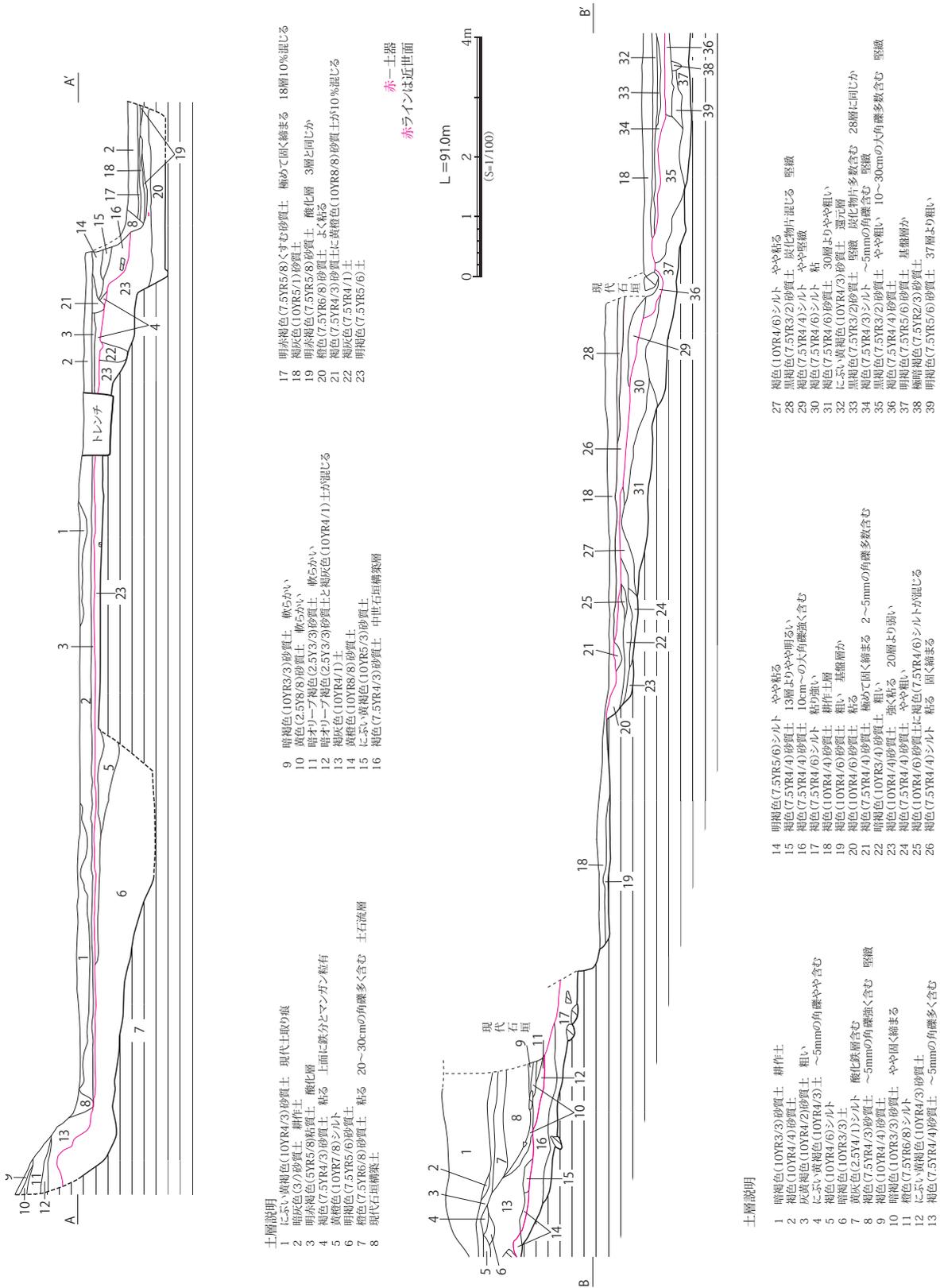
本遺跡は、鉾取山の山頂部 (標高 711.5m) から北東にのびる尾根の先端付近北側の緩斜面上に位置しており、標高約 90m を測る。遺跡は全体的に南から北に向かってゆるやかに傾斜しており、西側には小さな谷が南北方向に縦断し、幅 1m 前後の小川が流れる。東側と南側は山林が広がり、北側の急斜面下には宅地や耕作地が広がる。

調査にあたり各所にトレンチ 5 本を掘り、土層観察を行った。そのうち南北方向の A-A'・B-B' 土層を基本土層として示す。本遺跡の基盤層は花崗岩で、その上に土石流層が堆積する。堆積する土は砂質土が大半を占めるが、埋土中に流紋岩が多く混じるといった特徴がみられる。A-A' 土層の第 2・第 3・第 4 層の特徴から、かつて水田として使用されていた痕跡がうかがえる。地元の方からの聞き取りによると水田の利用期間は短く、その後畑として使用されていた期間が長かったという。

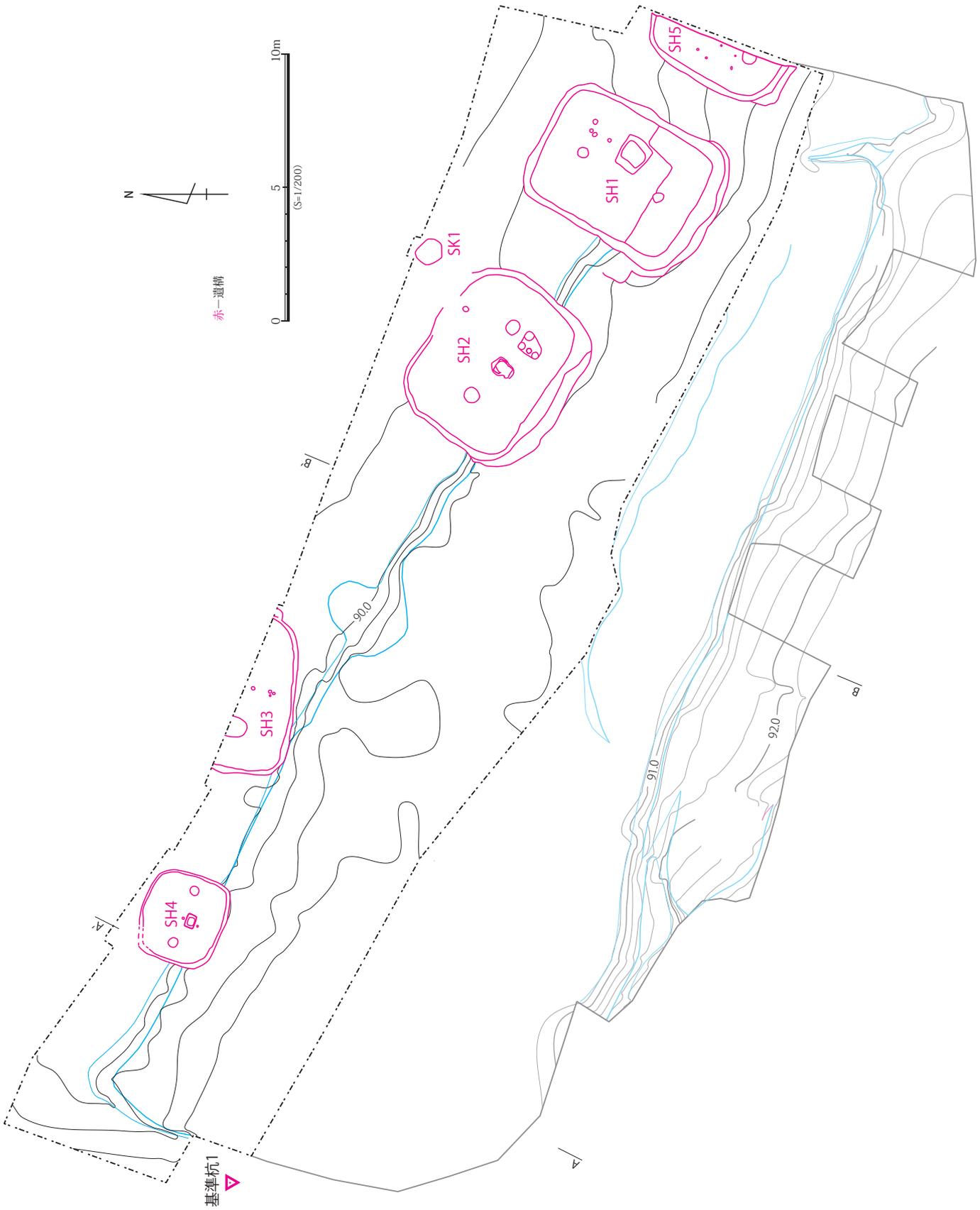
A-A' 土層の第 7 層や B-B' 土層の第 16・第 35 層は、10cm～30cm の角礫を大量に含んだ土石流層であり、これらの堆積層は、本遺跡の南側背後の斜面から流出したものである。また、B-B' 土層の現代石垣より南の土層については、石垣構築時に攪乱されていることが窺える。

近世の遺構面としては、A-A' 土層の第 23 層を掘り込んだ柱穴群や土坑を、第 23 層上面から石垣を確認した。さらに下層の第 20 層下からは、古墳時代の遺構面として住居跡を確認した。また、B-B' 土層では、中央部付近は水田によってかなり削平を受けており、古墳時代の遺構面は中央

から北側においてのみ確認できた。さらに、中央より南側第18層の耕作土層下の第19層からは基盤層が確認できたが、中央から北側は土石流層により基盤層は確認できなかった。



第3図 基本層序 (S=1/100)



第4図 集落遺構配置図 (S=1/200)



第5図 近世遺構配置図 (S=1/200)

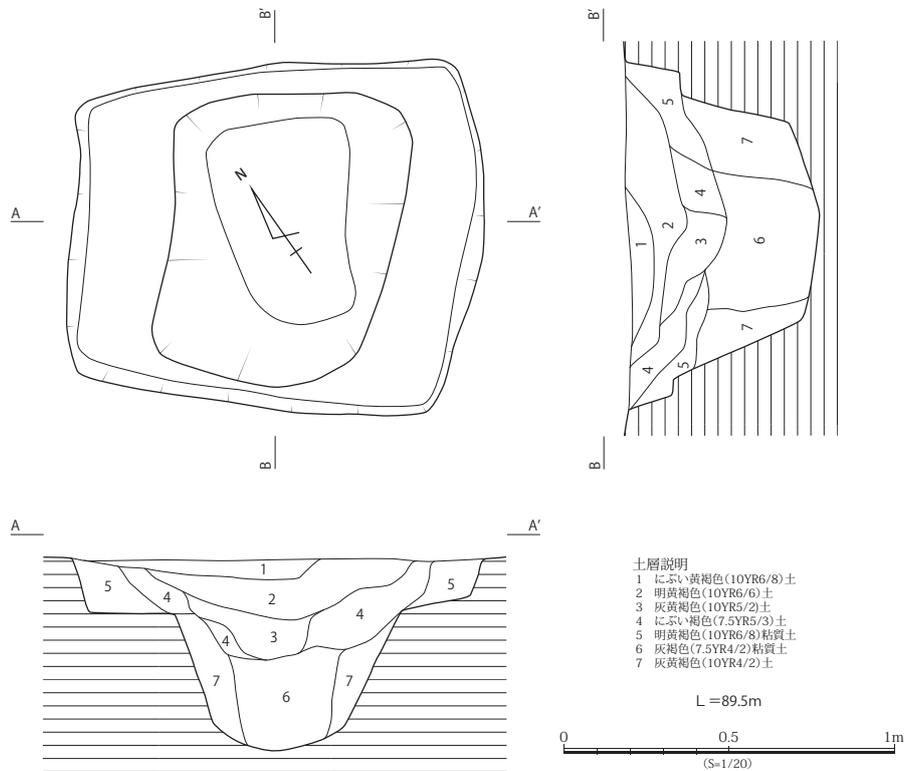
3 古墳時代

(1) 遺構

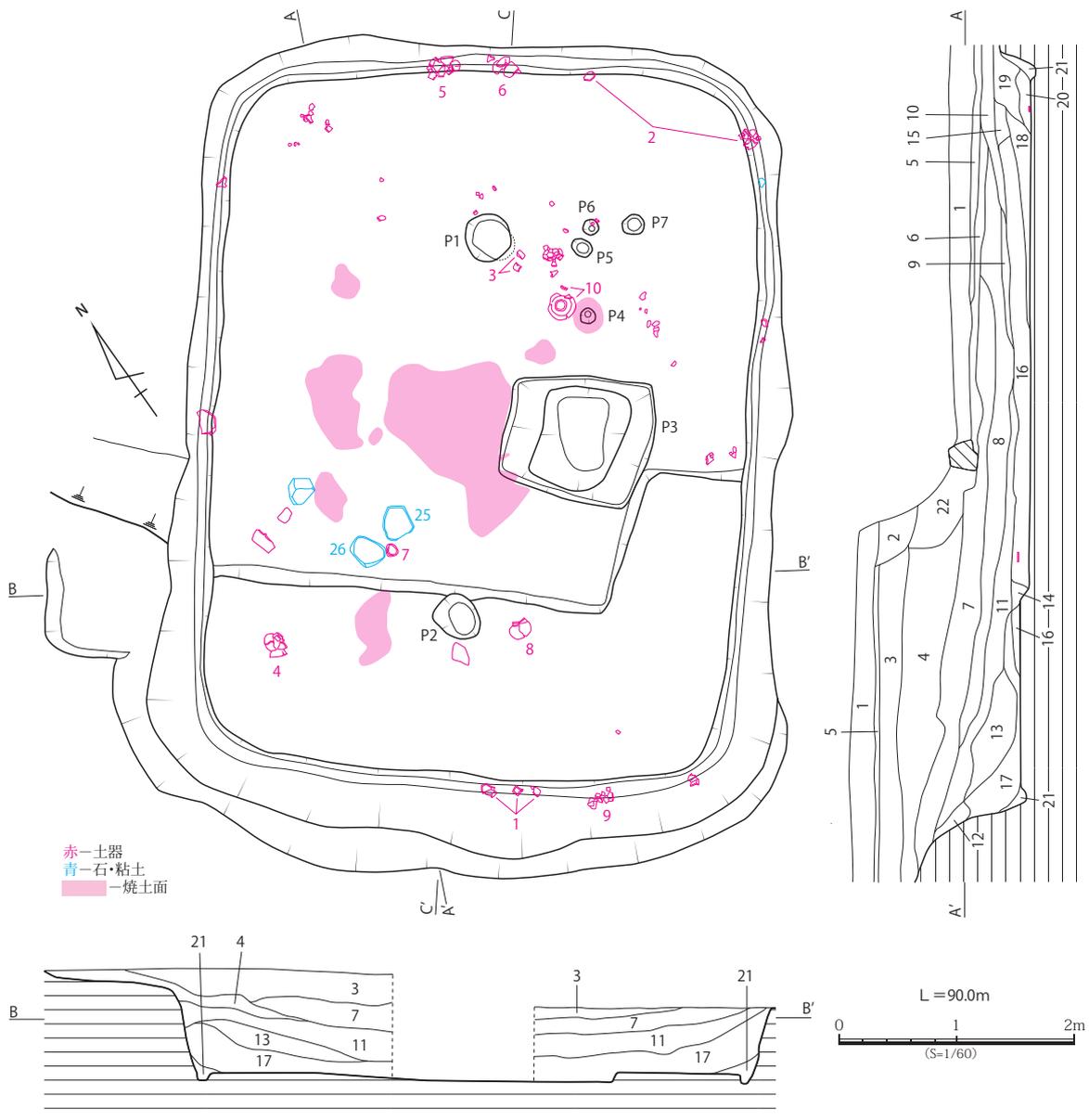
○SH1 (第6・7図)

調査区の北東部に位置する竪穴住居跡である。床面の平面形状は6m×4.5mの隅丸長方形である。床面標高は約89.42mで、残存する壁高は最大69cmである。壁溝はほぼ全周しており、幅4～12cm、深さは4～11cmである。床面は二段に分かれており、南側に位置する上段の規模は約4.4m×1.5m、床面からの高さは約10cmで、東側は一部がL字状に北に幅0.9m、長さ1.2m突出する。

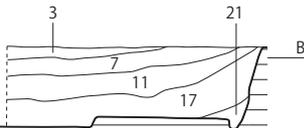
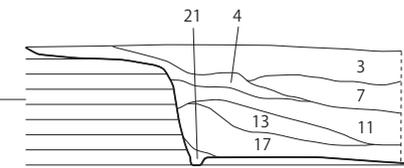
支柱穴はP1とP2の2本柱と考えられる。P1は底面形状が長径38cm短径28cmの長円形で、底面標高は88.92mである。P2は底面形状が長径28cm短径20cmの長円形で、底面標高は88.92mである。P1-P2の柱間距離は3.3mであり、P2は床面上段に位置する。P3は平面形状長方形の二重土坑である。その中心は支柱穴P1-P2を結んだ線のほぼ中間から約0.8m東側に位置する。P3の一次坑の平面形状は長方形で、南北106cm東西124cm、深さが床面から約16cm、壁面はほぼ垂直で、四隅は明確にコーナーが形成されている。二次坑は一次坑底面のほぼ中央に位置し、平面形状は長方形で、南北89cm東西68cm、一次坑底面からの深さは42cmで、壁面はやや上開きである。基盤層である土石流堆積物層を掘り込んでいるため、壁面及び底面に角礫が露出しており平滑ではない。土坑壁面もしくは埋土中に著しい被熱層や炭化物層が認められないため、炉跡とは考えられない。なおP3は床面中央部に形成された焼土面を切って造られている。



第6図 SH1 P3実測図 (S=1/20)



赤—土器
 青—石・粘土
 〇—焼土面



L = 90.0m
 0 1 2m
 (S=1/60)

土層説明

- | | | |
|--------------------------------------|------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色(10YR3/1)砂質土 耕作土層 | 9 褐色(7.5YR4/4)土 | 17 橙色(7.5YR6/8)土 |
| 2 明黄褐色(10YR6/8)粘質土 | 10 褐色(7.5YR4/3)土 | 18 明褐色(7.5YR5/6)くすむ 粘る 16層より暗 |
| 3 褐灰色(7.5YR4/1)土 下層にマンガン粒たまる | 11 褐灰色(7.5YR5/1)土 | 19 褐色(7.5YR4/3)土 黄味強い |
| 4 灰褐色(7.5YR4/2)砂質土 7層より暗 | 12 灰褐色(7.5YR4/2)砂質土 7層より明 | 20 褐色(7.5YR4/3)土 |
| 5 明褐色(7.5YR5/6)砂質土 下層にマンガン粒たまる 非常に堅緻 | 13 濃い褐色(7.5YR5/3)土 11と17の混入層 | 21 明褐色(7.5YR5/8)土 粘る |
| 6 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土 | 14 濃い黄褐色(10YR5/3)粘質土 よく粘る | 22 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土 石垣裏層 |
| 7 灰褐色(7.5YR4/2)土 ~2mmの炭片7%含む | 15 褐色(7.5YR6/8)土 とても粘る | |
| 8 灰褐色(7.5YR4/2)くすむ土 7層より暗 | 16 明褐色(7.5YR5/6)くすむ土 よく粘る | |



第7図 SH1 実測図 (S=1/60)

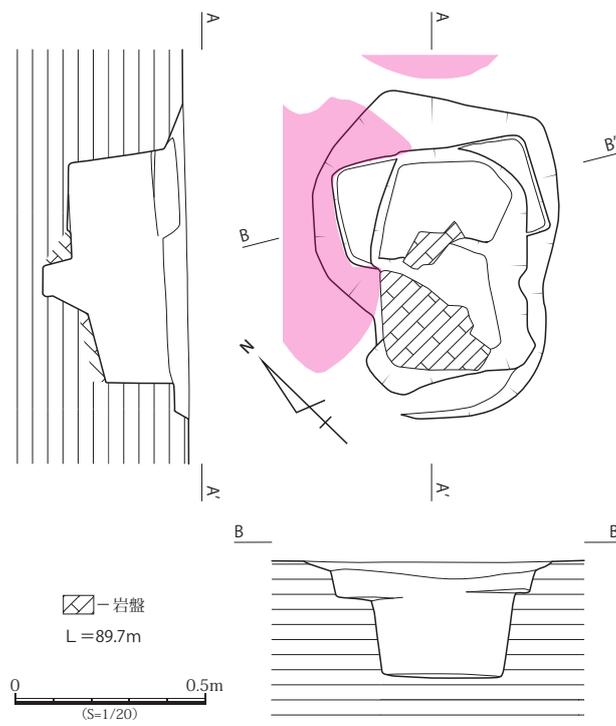
P3の北東側には直径13～20cm、深さ5～17cmの小ピット4基を確認した。なお、P4の上には焼土面を確認した。

本住居跡からは土器(1～10)、台石(25・26)が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態から若島一則氏によるⅢ-2期¹⁾に属すると考えられる。

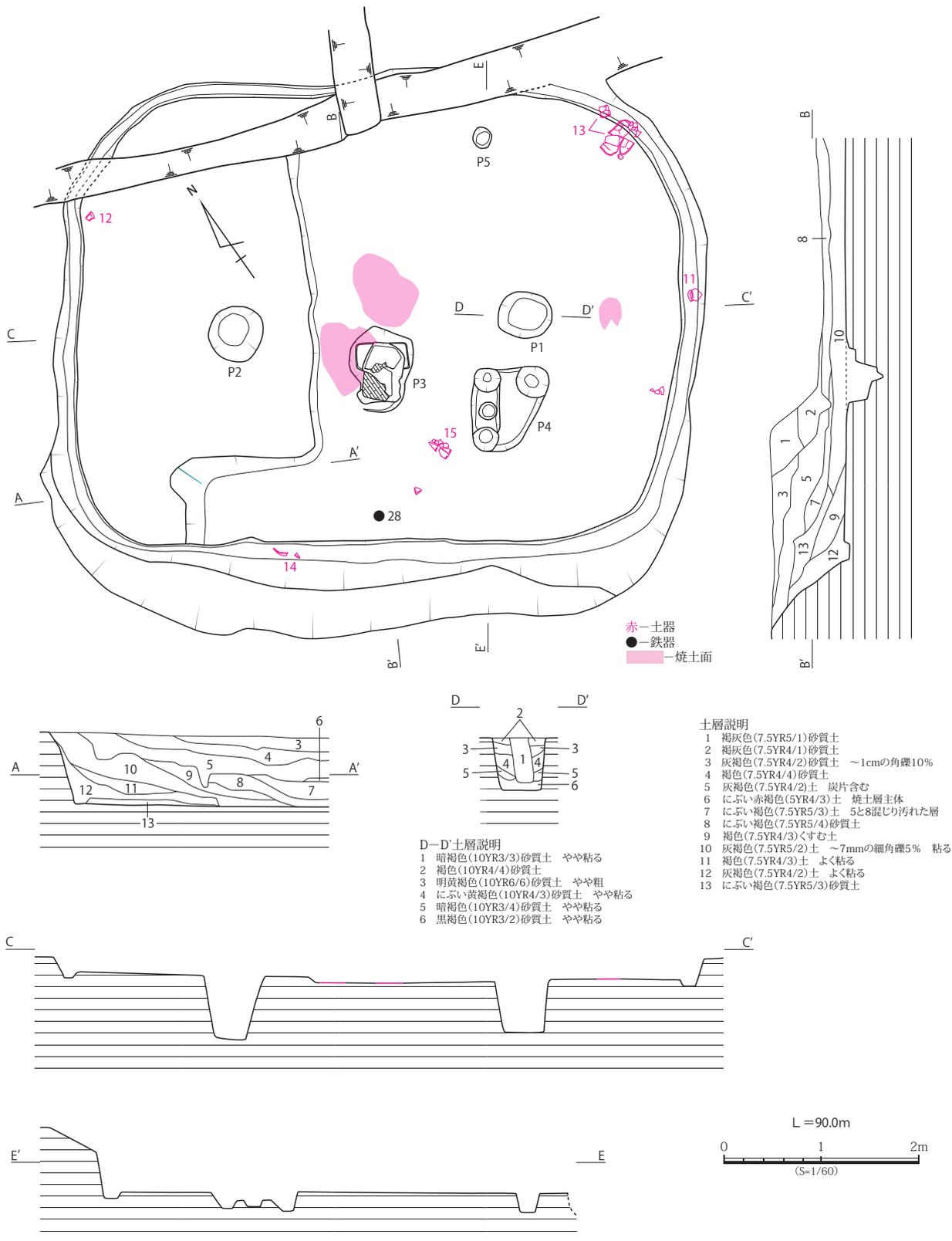
○SH2(第8・9図)

調査区の北東部、SH1の北西約2.6mに位置する竪穴住居跡である。平面形状は6.2m×4.6mの隅丸長方形である。床面標高は約89.70mで、残存する壁高は最大54cmである。壁溝はほぼ全周しており、幅6～22cm、深さは4～13cmである。床面は二段に分かれており、西側に位置する上段の規模は約3.9m×2.4m、床面からの高さは約9cmで、南側の一部約1.1m×0.7mがへこんだ形状となる。

支柱穴はP1とP2の2本柱と考えられる。P1は底面形状が長径36cm短径32cmの長円形で、底面標高は89.14mである。P2は底面形状が長径34cm短径30cmの長円形で、底面標高は89.08mである。P1-P2の柱間距離は3.0mであり、P2は床面上段に位置する。なお、P1からは柱痕跡を確認した。痕跡から推定できる柱の直径は約20cmである。P3は平面形状が長方形の二重土坑である。その中心は支柱穴P1-P2を結んだ線のほぼ中間から約0.3m南側に位置する。一次坑の平面形状は整った長方形で、東西54cm南北27cm深さ9cm、壁面はほぼ垂直で、四隅は直角に近い明確なコーナーとなっている。二次坑は一次坑底面のほぼ中央に位置し、平面形状はいびつな方形で、東西は最大40cm、南北は一次坑と共有し、深さは一次坑底面から20cm、壁面



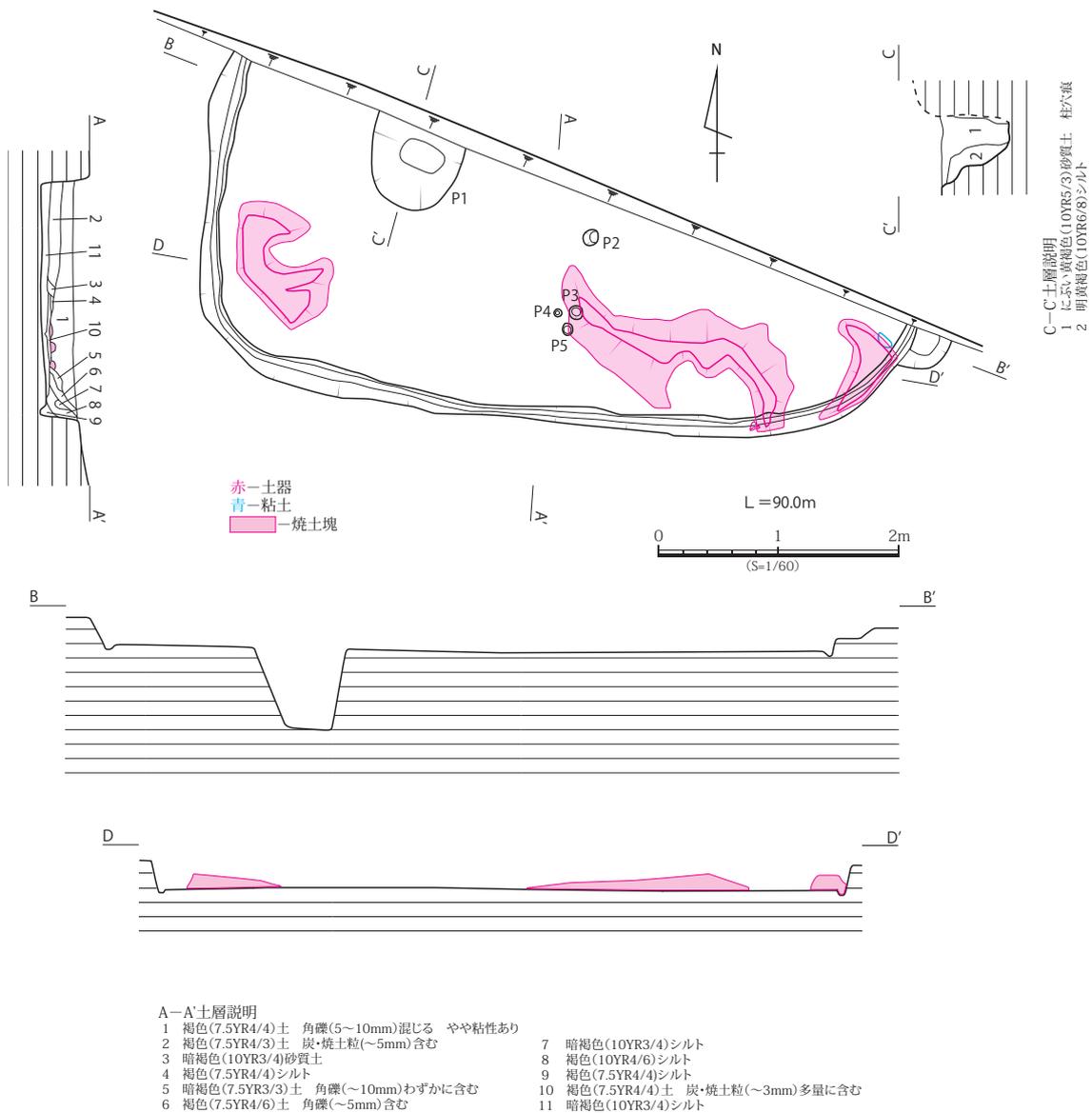
第8図 SH2 P3実測図(S=1/20)



第9図 SH2 実測図 (S=1/60)

はやや上開きである。壁面もしくは埋土中に著しい被熱層や炭化物層が認められないため、炉跡とは考えられない。なおP3は床面中央部に形成された焼土面を切って造られている。ところで、P3の南側に接して東西40cm南北30cmほどの長方形の掘り込みが存在していた。平面的には連続しているが、内部にはこぶし大の角礫が充満していたため、本土坑が埋没する以前から、当該部分はすでに埋め戻されていたと判断できる。この掘り込みは、P3一次坑底面から10cmほど掘り下げた高さで岩塊に突き当たって終了している。予定していた深さまで掘削ができないため埋め戻され、すぐ北側にP3が新たに掘りなおされたものと思われる。なお、この掘り方の中心は、支柱穴を結んだ線から約0.6m南側に位置している。P4は深さ5cmの浅い土坑であり、底面に直径19~35cm、深さ9~20cmの小ピット4基を確認した。

本住居跡からは土器(11~15)、鉄器(28)、床面直上から土器(16)が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ-1期に属すると考えられる。



第10図 SH3実測図 (S=1/60)

○SH3 (第10図)

調査区の北部、SH2の北西約9.2mの調査区境に位置する竪穴住居跡である。本住居跡は調査区の境にあるため、北側が未掘であるが、平面形状は隅丸長方形と推定できる。床面標高は約89.6mで、残存する壁高は最大27cmである。壁溝はほぼ全周しており、幅3～8cm、深さは3～5cmである。

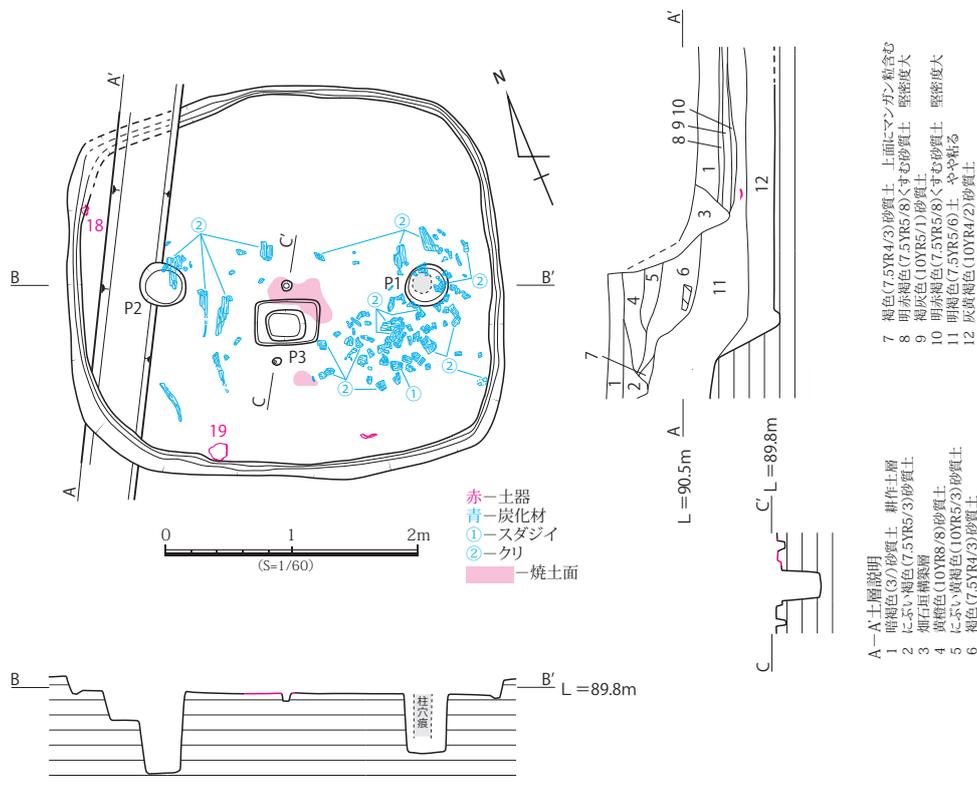
柱穴はP1のみを検出した。規模は底面形状が長径36cm短径22cmの長円形で、底面標高は88.96mである。本住居跡内の南側からは3か所の焼土塊を確認したが、遺物がほぼ出土しないことから第10図A-A'土層の第11層形成後に上屋が焼失したものと考えられる。住居内の南側中央からは直径8～15cm、深さ17～31cmの小ピット4基を確認した。

住居跡内の東南隅からは粘土塊が、また、埋土中からは土器(17)が出土している。

○SH4 (第11図)

調査区の北西部、SH3の北西約4mに位置する竪穴住居跡である。平面形状は3.2m×2.9mの隅丸長方形である。床面標高は約89.75mで、残存する壁高は最大52cmである。壁溝はほぼ全周しており、幅3～12cm、深さは2～7cmである。

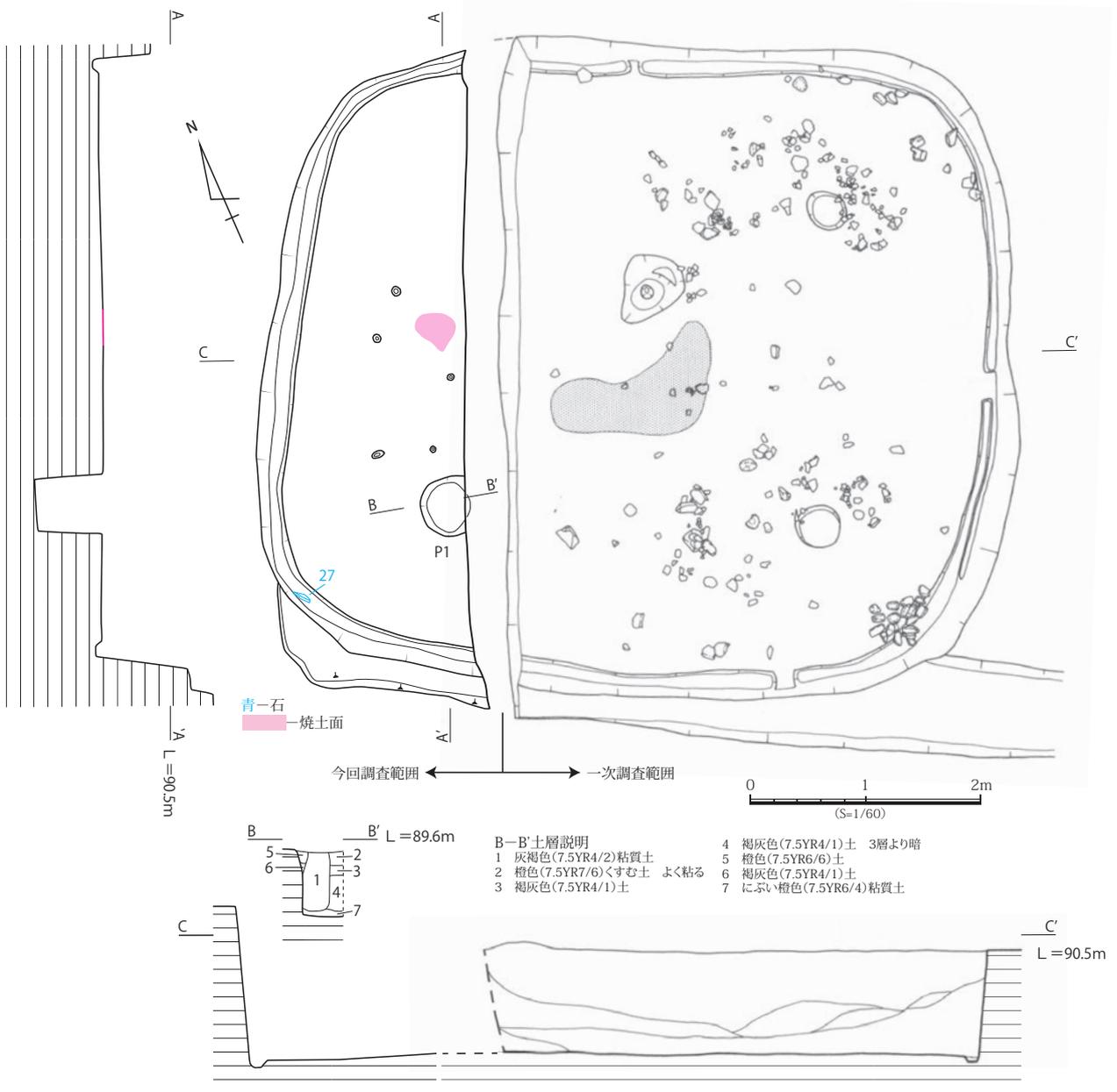
主柱穴はP1とP2の2本柱と考えられる。P1は底面形状が長径30cm短径26cmの長円形で、底面標高は89.27mである。P2は底面形状が長径29cm短径26cmの長円形で、底面標高は89.13mである。P1-P2の柱間距離は2.0mである。なお、P1からは柱痕跡を確認した。痕跡から推定できる柱の直径は約14cmである。P3は平面形状が長方形の二重土坑である。その中心



第11図 SH4 実測図 (S=1/60)

は主柱穴 P1 - P2 を結んだ線のほぼ中間から約 0.4m 南側に位置する。一次坑の平面形状は整った長方形で、東西 50cm 南北 36cm 深さ 5cm、壁面はほぼ垂直で四隅は直角に近い明確なコーナーとなっている。二次坑は一次坑底面の南辺に沿うように位置し、平面形状は長方形で、東西は 32cm、南北 24cm、深さは一次坑底面から 35cm、壁面はやや上開きである。土坑壁面もしくは埋土中に著しい被熱層や炭化物層が認められないため、炉跡とは考えられない。なお P3 は床面中央部に形成された焼土面を切って造られている。また、埋土中からは、焼失した上屋構造に由来すると思われる炭化物は確認されなかったため、住居跡焼失時には土坑は埋没していたと考えられる。

本住居跡からは多量の炭化材が出土した。これらの炭化材は床面から 10 ~ 20cm の高さに位置しており、その多くは柱穴周辺から検出された。炭化材をサンプリングしてそのうち 22 点を科学分析を行った結果、1 点のみスダジイであとはクリであったことから、主な構造材はクリであった



第 12 図 SH5 実測図 (S=1/60)

と推定される。炭化材の出土状況から、本住居跡は焼失したものと推定される。

本住居跡からは土器（18・19）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ－2期に属すると考えられる。

○SH5（第12図）

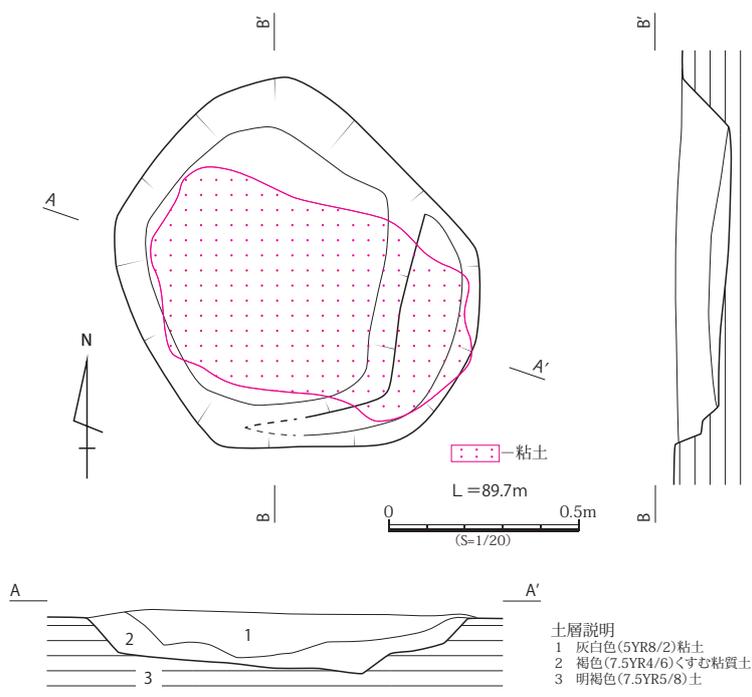
調査区の東南部、SH1の南東約1.8mの調査区境に位置する竪穴住居跡である。本住居跡は調査区の境にあり、北東側の3/4程は第1次調査で確認している²⁾。平面形状は6m×5.2mの隅丸長方形であると推定される。床面標高は約89.52mで、残存する壁高は最大79cmである。壁溝はほぼ全周しており、幅5～14cm、深さは3～7cmである。

柱穴はP1のみ検出しているが、全体的な住居の構造は4本柱と考えられる。P1の底面形状は長径44cm短径38cmの長円形で、底面標高は88.94mである。なお、P1からは柱痕跡を確認した。痕跡から推定できる柱の直径は約18cmである。また、P1の北側から直径5～11cm、深さ5～9cmの小ピット5基、P1から1.1m北東側には焼土面を確認した。

本住居跡壁溝内からは砥石（27）が、埋土中からは土器（20・21）が出土している。本遺構の時期は、第1次調査の出土土器の形態からⅢ－2期に属すると考えられる。

○SK1（第13図）

SH2の北東約1.4mに位置する土坑である。平面形状は長円形で、底面の規模は長辺約73cm、短辺約64cm、掘り方の深さは最大で15cmである。南東部には幅14cm程度の段がめぐる。土坑内から多量の粘土を検出したことから、粘土の貯蔵穴と考えられる。科学分析を行った結果、近辺で採取できる粘土であることがわかった。



(2) 遺物

本遺跡の出土遺物としては、土器・石器・鉄器などがある。遺構に伴わない遺物についても、本遺跡の存続時期以外のもも含め、特徴的なものを報告する。以下、各遺物について述べるが、個々の土器・石器等の詳細については、後掲する観察表を参照されたい。

○土器 (第 14～15 図)

本遺跡から出土した土器について、時期を追って特徴的なものについて概観してみたい。

・古墳時代初頭 (Ⅲ-1 期)

甕形土器 (1・11) の口縁部は端部に向けて厚みが減り、端部付近で外反する。胴部の器厚もほぼ均一で、薄く仕上げられている。体部の器形については、やや底のとがった倒卵形となっている。鉢形土器 (7・9) は底部がやや厚く、端部が薄く仕上げられている。複合口縁壺 (14) は、体部の器形は不明であるが、口縁端部から上方に拡張する拡張部が、口縁部内側から立ち上がっている。高坏 (17) は脚部であり、坏部との接合部から「ハ」の字状に拡がり、円形の透かし穴を持つ。これらの特徴を有するものは、古墳時代初頭のものと考えられる。

・古墳時代前期前半 (Ⅲ-2 期)

甕形土器 (5・6) は体部の器形が球形に近い長円形であり、器厚も全体的に薄く仕上げられ、口縁部接合点周辺の厚みも均一である。鉢形土器 (19) は底部まで器厚が均一で、端部が薄く仕上げられている。複合口縁壺 (10) は、体部の器形は不明であるが、口縁端部から上方に拡張する拡張部が、大きく外反している。これらの特徴を有するものは、古墳時代前期前半のものと考えられる。

・その他

土器 (15) は体部の器形は鉢形に近いが、口縁端部に一部肥厚した接合部があり、何らかの付属物が付いていた可能性がある。また、遺構には伴わないが調査区内の埋土中から甕形土器の口縁部 (23)、高坏の脚部 (24) が出土した。(23) は口縁端部の厚みが口縁部屈曲点周辺と比較して明らかに厚く仕上げられており、口縁端部は平坦に仕上げられ、2 条の凹線が施されている。(24) は器形が不明であるが、凹線文が施された高坏の脚部の一部と思われる。これらの特徴を有するものは、弥生時代中期から後期初頭にかけてのものと考えられる。

○石器 (第 16 図)

台石 (25・26) は SH1 の床面から出土したものである。いずれもすべての面で表面には強い磨耗面が観察でき、砥石や磨石としても使用された可能性がある。なお、(26) には部分的に被熱による赤変が見られる。表面の風化状況から全面的に熱を受けた可能性もあり、熱を用いたものを加工する台として使用されたと考えられる。

砥石 (27) は SH5 の壁溝から出土したもので、使用面は 3 面である。

○鉄器（第 16 図）

鉄器（28）は SH2 の床面から出土したものである。断面の形状は方形で，錐状鉄製品の一部分と思われる。

注

- 1) 若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌 I』財団法人広島市文化財団 2002 年
以下，後期土器編年は若島氏の編年による。
- 2) 平成 15 年度に財団法人広島県教育事業団によって行われた第 1 次調査の SB10 にあたる。

第1表 出土土器観察表

([] は復元値)

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
1	甕形土器	SH1	口径 12.6 器高 [10.7] 胴部最大径 12.1	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味におさめる。底部はおそらく丸底。	外面：胴部下半はナデ、ほか剥離著しく不明 内面：口縁部～上半部は剥離著しく不明、胴部下半に指頭圧痕	胎土：1mm 前後の砂粒を若干含む 焼成：やや軟調 色調：浅黄橙色 (10YR8/4) 胴部下半及び口縁部内側にスス付着。
2	甕形土器	SH1	口径 13.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：頸部ヘラ削り後ナデ、以下ヘラ削り	胎土：～3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：黄橙色 (10YR8/6) 外面胴部中央と口縁部の一部にスス付着。
3	甕形土器	SH1	口径 [17.4]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味におさめる。	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、頸部直下に指頭圧痕、以下ハケ目 内面：口縁部はヨコナデ、その他は風化・剥離著しく不明	胎土：～2mm の砂粒多く含む 焼成：軟調 色調：橙色 (5YR6/8) 口縁にスス付着。
4	甕形土器	SH1	口径 [13.8]	口縁部は「く」の字状に外反し、やや内向きに伸びる。口縁部は丸くおさめる。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ナデ、指頭圧痕、以下ヘラ削り	胎土：～3mm の石英・長石含む 焼成：普通 色調：橙色 (7.5YR6/6)
5	甕形土器	SH1	胴部最大径 [22.2]	口縁部は「く」の字に外反する。胴部はほぼ球形。	外面：頸部はヨコナデ、頸部～胴部上半ハケ目後ナデ、胴部下半ハケ目後弱ナデ 内面：頸部～胴部ヘラ削り、胴部中位に指頭圧痕	胎土：1mm 程度の砂粒含む 焼成：軟調 色調：浅黄橙色 (10YR8/3)
6	甕形土器	SH1	胴部最大径 [28.0]	胴部は中央より下半部より最大となる、ややつぶれた球形。	外面：風化著しく不明、頸部はヨコナデ 内面：ヘラ削り	胎土：～2mm の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：明黄褐色 (10YR7/6)
7	鉢形土器	SH1	口径 [11.8] 器高 8.7	底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。端部は平たくおさめる。	外面：剥離著しく不明 内面：口縁部以下ヘラ削りのちヨコナデ	胎土：2～8mm の石英・長石含む 焼成：普通 色調：橙色 (5YR6/8)
8	鉢形土器	SH1	口径 [18.2] 器高 7.3	底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外傾し丸くおさめる。	外面：剥離著しく不明 内面：胴部ヘラ削りのちナデ	胎土：～2mm の砂粒含む 焼成：普通 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面底部に被熱による赤変有り。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
9	鉢形土器	SH1	口径 [16.0]	胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	外面：胴部下半に指頭圧痕 内面：ヘラ削り後ナデ	胎土：～3mmの石英・長石含む 焼成：普通 色調：橙色 (2.5YR6/6) 外面底部に被熱による赤変有り。
10	壺形土器	SH1	口径 21.5	口縁部は外に湾曲し一段稜を成し、外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸くおさめる。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ・頸部ナデ	胎土：～2mmの砂粒含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (2.5YR5/8) 内面口縁部と外面の一部に二次被熱による網目状の黒変有り。
11	甕形土器	SH2	口径 12.6 器高 11.3 胴部最大径 11.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。胴部は倒卵形を呈する。底部はほぼ丸底。	外面：口縁部ヨコナデ、以下剥離著しく不明 内面：ヘラ削り	胎土：～2mmの石英・長石含む 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/4) 外面胴部下 1/2 スス付着。
12	甕形土器	SH2	口径 [13.8]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部に向けて器厚を減じる。端部は丸くおさめる。	外面：口縁部ヨコナデ、以下剥離著しく不明 内面：口縁部ヨコナデ、指頭圧痕、以下ヘラ削り	胎土：～3mmの石英・長石含む 焼成：普通 色調：明黄褐色 (10YR7/6)
13	甕形土器	SH2	—	胴部上半である。	外面：頸部ナデ、以下剥離著しく不明 内面：頸部ナデ、以下剥離著しく不明	胎土：～2mmの砂粒含む 焼成：普通 色調：浅黄橙色 (7.5YR8/6)
14	壺形土器	SH2	口径 [17.4]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し、外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は平たくおさめる。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：剥離顕著で不明 口縁端部に凹線を施す。	胎土：～2mmの砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR7/8) 内面に二次被熱による黒変有り。
15	鉢形土器?	SH2	—	底部から内湾気味に立ち上がり、端部は平たくおさめる。口縁部の一部に肥厚した箇所がある。	外面：口縁部ナデ、以下ヘラ削り、指頭圧痕 内面：ナデ	胎土：～3mmの石英・長石含む 焼成：普通 色調：明褐色 (7.5YR5/6)
16	甕形土器	SH2	—	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味におさめる。	外面：ナデ 内面：剥離著しく不明	胎土：～1mmの砂粒少し含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/4)
17	高坏	SH3 埋土	—	高坏の脚部。坏部との接合部から「ハ」の字に外反する。ほぼ90°ごとに配置された直径8mmのすかし2ヶ所確認。	外面：ハケ目のちナデ 内面：ハケ目のちナデ	胎土：～1mmの砂粒やや含む 焼成：やや堅緻 色調：浅黄橙色 (10YR8/4)

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
18	甕形土器	SH4	—	口縁部器厚を減しながら外反し、端部は丸くおさめる。	外面：口縁部ナデ，以下剥離著しく不明 内面：口縁部ナデ，以下剥離著しく不明	胎土：～1mmの砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/4)
19	鉢形土器	SH4	口径 [17.6] 器高 8.2	底部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部でわずかに外傾し丸くおさめる。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り，ハケ目，指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ，底部ナデ	胎土：～3mmの砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (2.5YR6/8)
20	椀形土器	SH5 埋土	口径 [13.0] 器高 6.5	口縁部は外方に延び、端部は尖り気味におさめる。底部は丸底。	外面：剥離著しく不明 内面：口縁部ナデ，以下剥離著しく不明	胎土：～3mmの石英・長石含む 焼成：普通 色調：浅黄橙色 (10YR8/4)
21	椀形土器	SH5 埋土	口径 [17.4]	底部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部でわずかに外傾し尖り気味におさめる。	外面：剥離著しく不明 内面：剥離著しく不明	胎土：～2mmの砂粒含む 焼成：普通 色調：橙色 (7.5YR6/6)
22	甕形土器	その他埋土	口径 [13.8]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部に向けて器厚を減しながら丸くおさめる。	外面：口縁部ヨコナデ，以下剥離著しく不明 内面：口縁部・頸部ナデ，以下剥離著しく不明	胎土：～3mmの砂粒含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (2.5YR5/8) 外面と内面の一部に二次被熱による黒変有り。
23	甕形土器	その他埋土	—	口縁端部は下方に肥厚し、平たくおさめる。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：剥離著しく不明 口縁端部に2条の凹線を施す。	胎土：～1mmの砂粒含む 焼成：良好 色調：浅黄橙色 (10YR8/4)
24	高坏	その他埋土	—	高坏の脚部。	外面：剥離著しく不明 内面：剥離著しく不明 外面に凹線文を施す。	胎土：～2mmの砂粒含む 焼成：普通 色調：にぶい黄褐色 (10YR5/3)

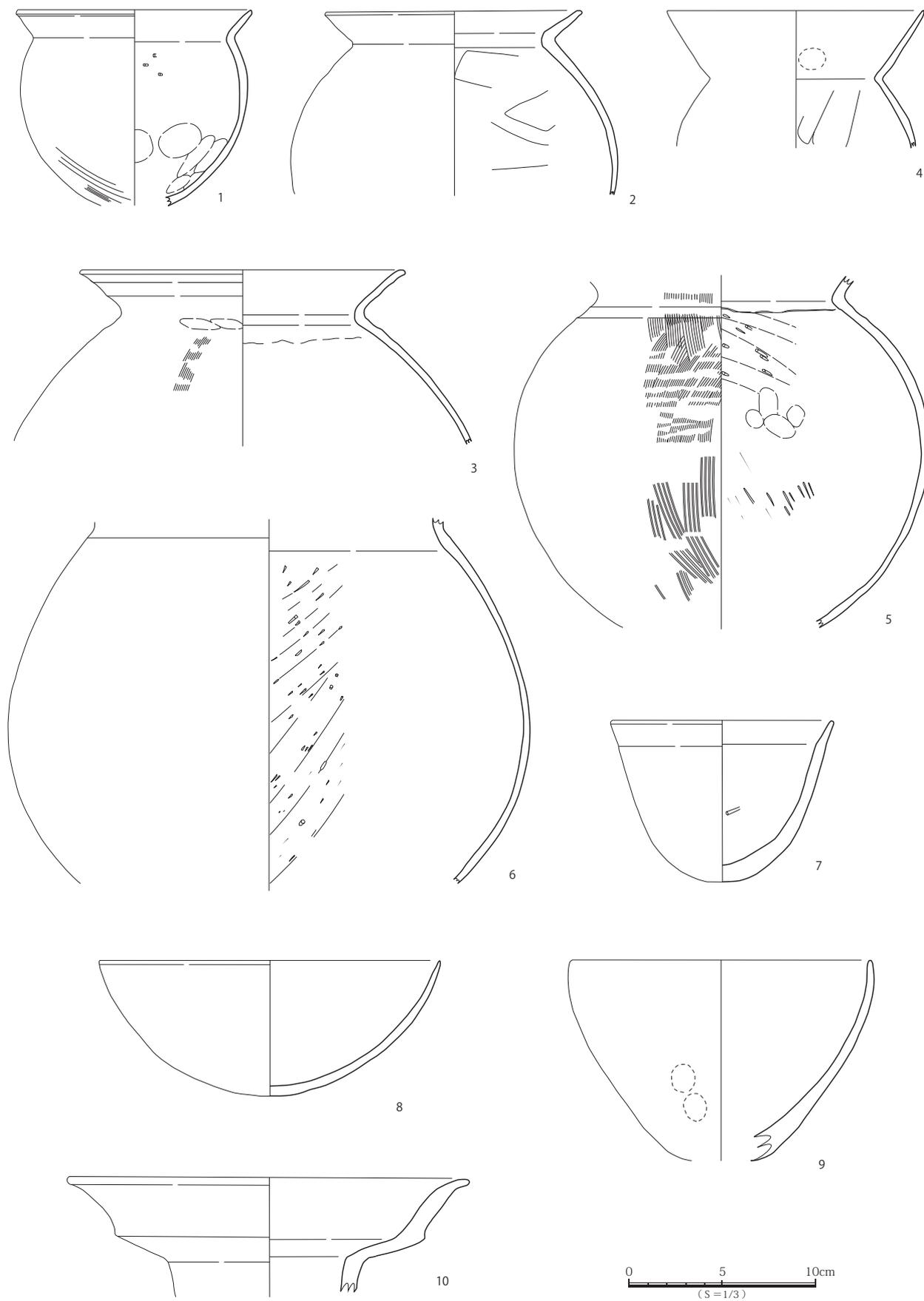
第2表 出土石器観察表

番号	種別	出土位置	計測数値				備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量	
25	台石	SH1	29.0	25.0	8.2	7.8kg	すべての面が磨耗，磨石としても使用か？材質：花崗岩
26	台石	SH1	29.0	24.5	11.6	13.8kg	すべての面や角辺が磨耗，部分的に被熱による赤変有り。材質：花崗岩
27	砥石	SH5	16.6	9.1	1.7	398g	3面を使用。材質：凝灰岩

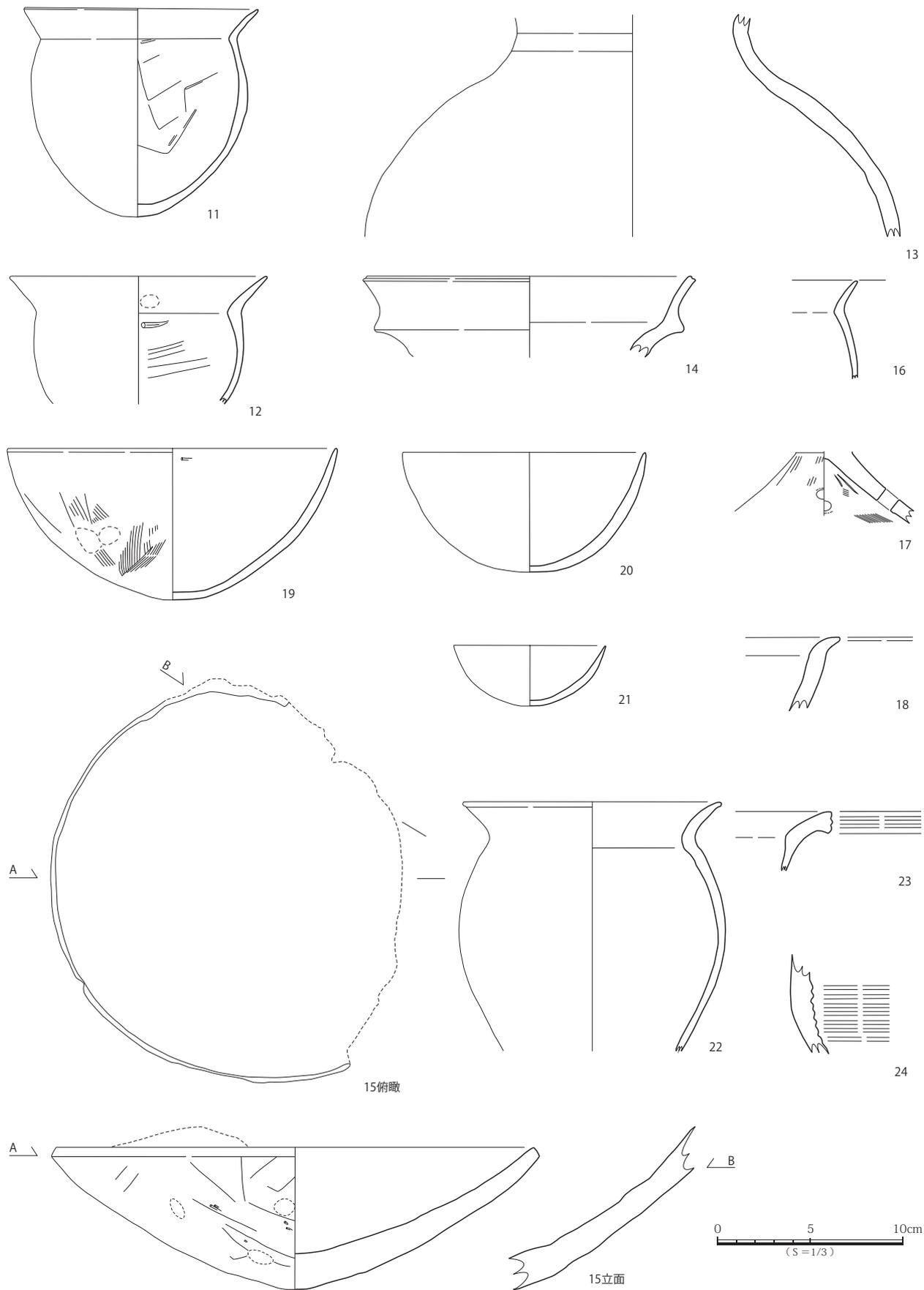
第3表 出土鉄器観察表

(()): 残存値

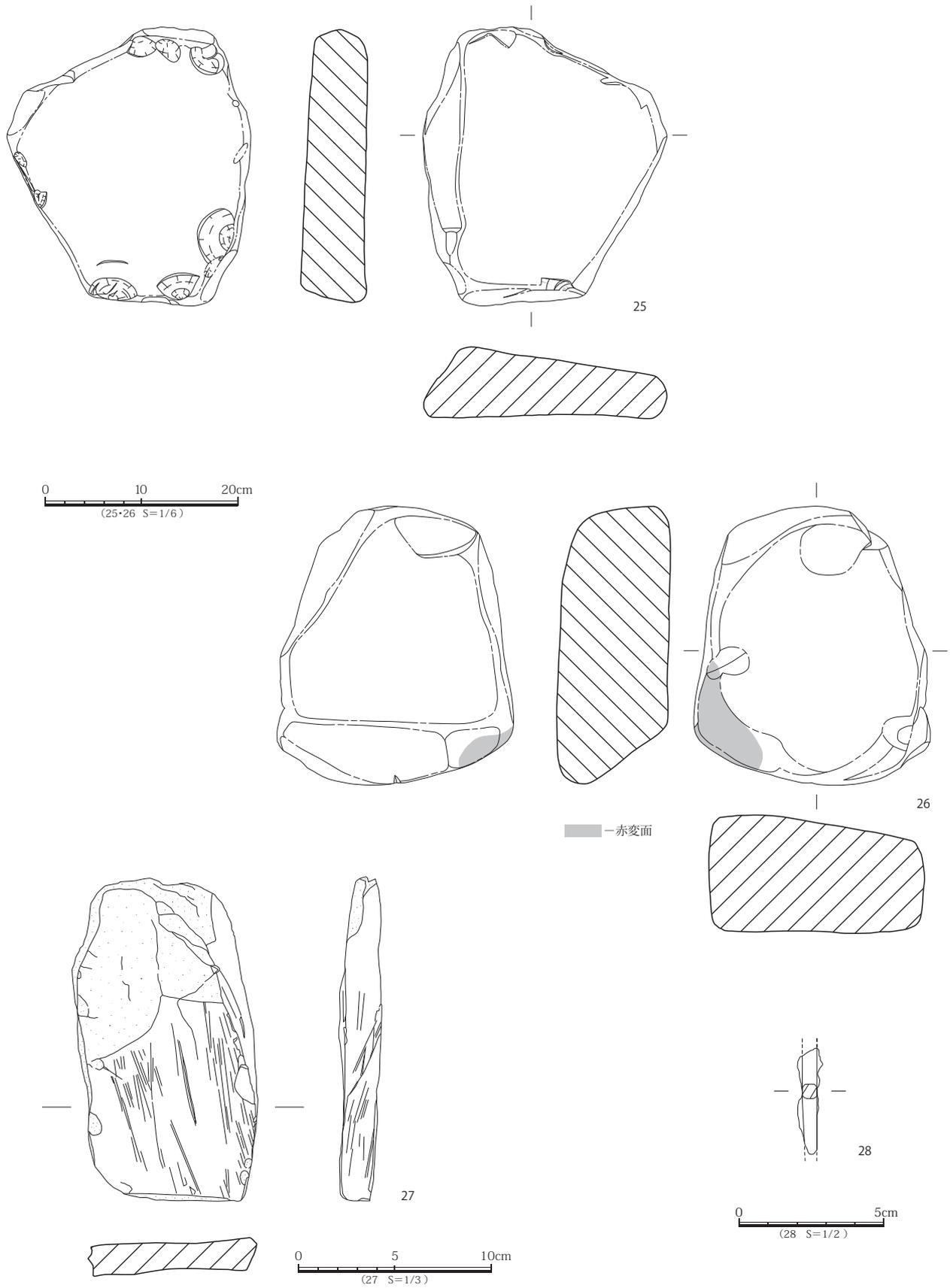
番号	種別	出土位置	計測数値 (cm)				備考
			部位	長さ	幅	厚さ	
28	錐状鉄製品	SH2	—	(3.7)	0.5	0.5	断面形状：方形



第 14 図 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



第 15 図 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)



第 16 図 出土遺物実測図 (3) (25・26 は $S=1/6$, 27 は $S=1/3$, 28 は $S=1/2$)

4 近世

(1) 遺構

○石垣 (第 17～20 図)

本遺構は調査区の北西部に位置する。近年まで使用されていた畑面に伴う現代石垣の下層から確認され、位置は現代石垣の約 1m 南西に平行して位置する。石垣の東半分は原状を保っているものと考えられるが、石垣の西半分は攪乱により削平されている。西端部には現代の配水路があり、上面の石材は水路に伴う掘り込み及び抜き取りを受けているが、基底部の石材の概ね元位置を保っていると考えられる。石垣の範囲は石垣の基盤地形の形状から、西端は現状付近に、東端は現状の石垣東端から約 50cm 付近まであったと考えられる。石垣の復元規模は東西約 13m、幅約 0.7m、高さ最大 0.3m でほぼ垂直に立ち上がる。石垣表側には約 30～50cm 角の石材を使用しており、裏込には 10cm 前後の角礫を使用している。なお、石材は自然石で加工されていない。

本石垣の石垣内からは陶磁器 (1・2)・砥石 (33)・茶臼 (34) が、石垣検出面からは陶磁器 (3～5・19～21) が出土している。本石垣の構築時期は出土陶磁器の特徴から 17 世紀初め頃と考えられる¹⁾。また、石垣の東西両端の石材の下からは土師質土器を中心とする土器片の広がりを確認した。東側土器群は大型の甕 (22) が、西端土器群は大型の鍋 (23) が出土した。検出状況から土圧でつぶれた状況ではなく、意図的に土器片を面的に置いた可能性が考えられる。その位置から考えて、石垣構築時に地鎮等の何らかの目的をもったものと考えられる。

本石垣は石垣の南側に広がる平坦面を区画するための石垣と考えられる。なお、石垣検出面及び石材の表面には細かな炭片が薄く広がっていることを確認した。石垣の上面及び前面に広く広がることから、火災等に由来する炭片の可能性があり、近世面に関する施設の廃絶原因・時期を示している可能性がある。出土した炭片の放射線炭素年代測定をおこなった結果、暦年較正年代が AD1653～AD1682 年 (2σ 25.1%), AD1762～AD1803 年 (2σ 45.3%), に相当する結果が出た。

○柱穴群 (第 21・22 図)

石垣面の南には東西約 13m 南北約 15m の平坦面が広がる。平坦面には多数の柱穴と考えられるピット群及び多数の土坑を確認した。本平坦面は土層観察から石垣構築面と同時期と判断でき、本柱穴群は平坦面からの深さから石垣と同時期およびそれ以前のものと考えられる。

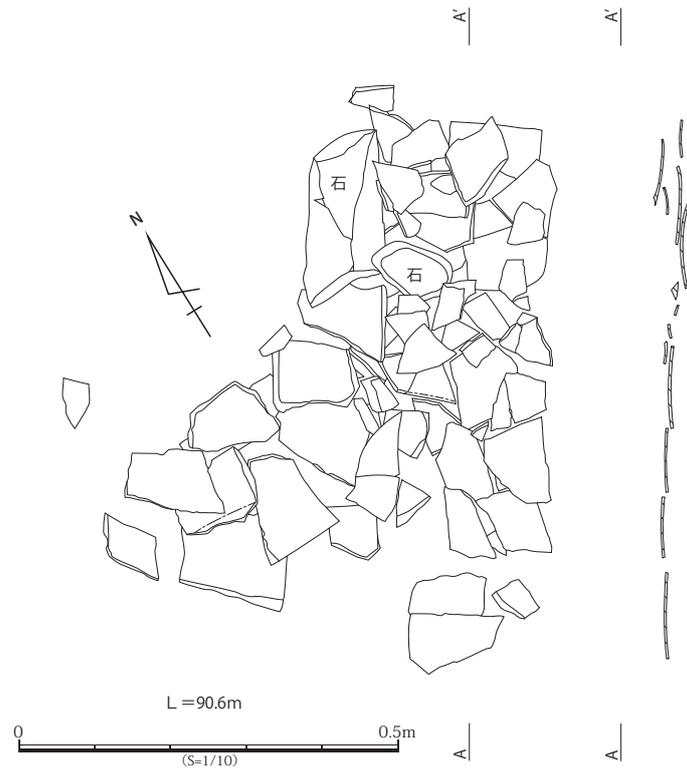
柱穴の規模は掘り方上面で直径 25～30cm である。底面標高は標高 90.30m±10cm の A グループと、標高 90.50±10cm の B グループの 2 種に大別できる。A グループは P5・13・15～17・20・23・25・35～39 が、B グループは P1・2・4・7～12・18・19・21・24 である。A グループは平坦面の各場所に位置しており、掘り込みは 40～50cm の柱穴で、本平坦面に伴う柱穴群と考えられる。B グループは主に平坦面の南側に位置している。平坦面南側の掘り込みは 20cm 以下と浅いが、緩斜面であった場所を深く掘りこんだ場所であり、柱穴の上部が削平されたものとも考えられる。このことから B グループの柱穴は平坦面が造られる以前、古墳時代の集落に伴う柱穴の可能性はある。



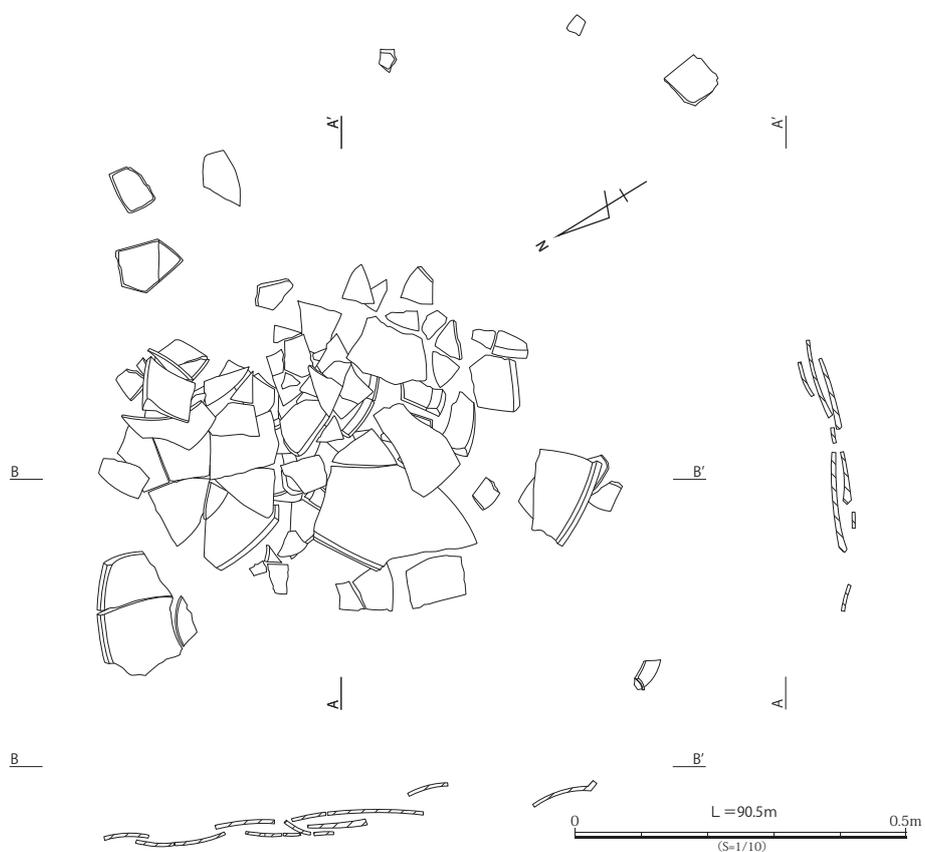
第 17 図 石垣周辺平面図 (S=1/100)



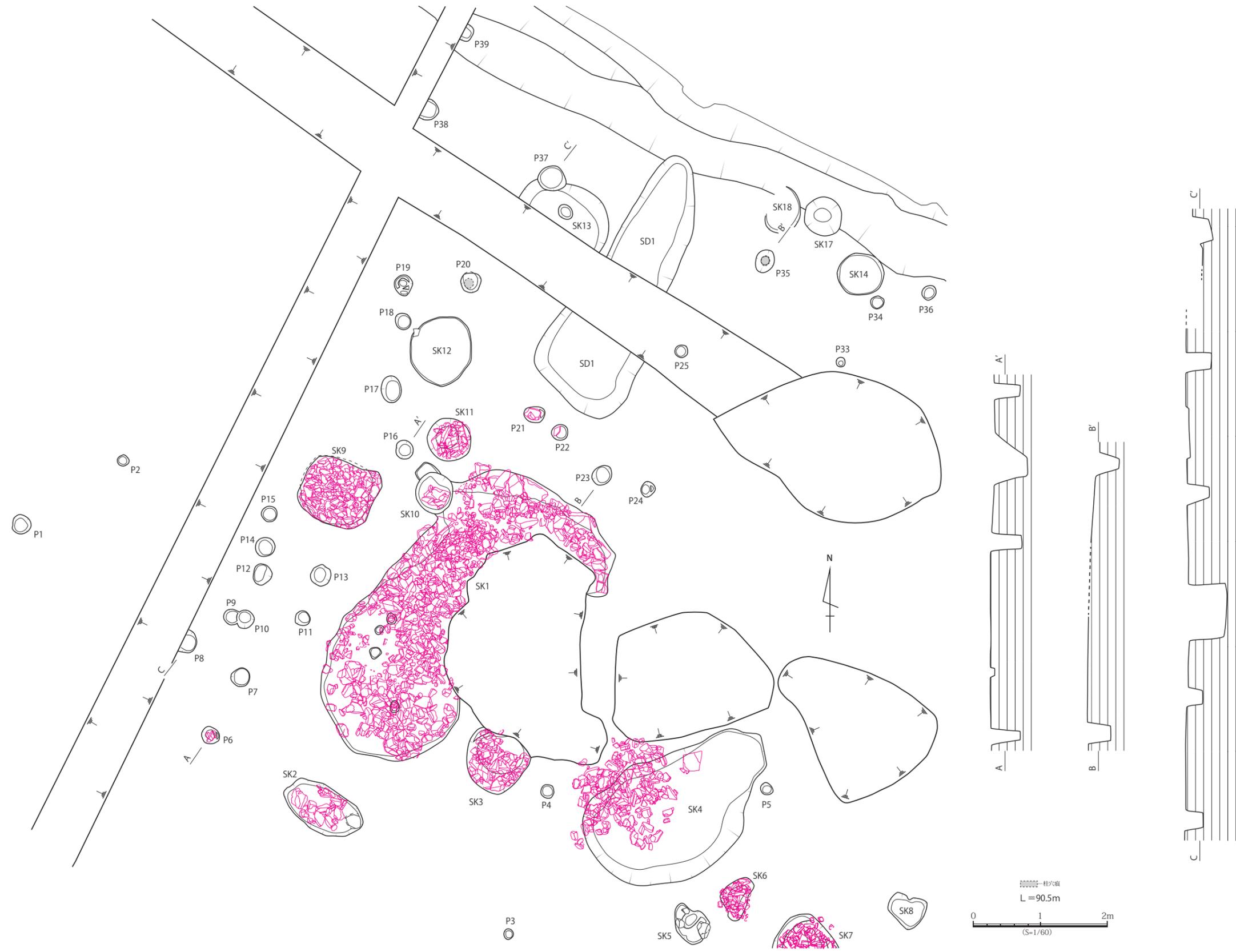
第 18 图 石垣实测图 (S=1/60)



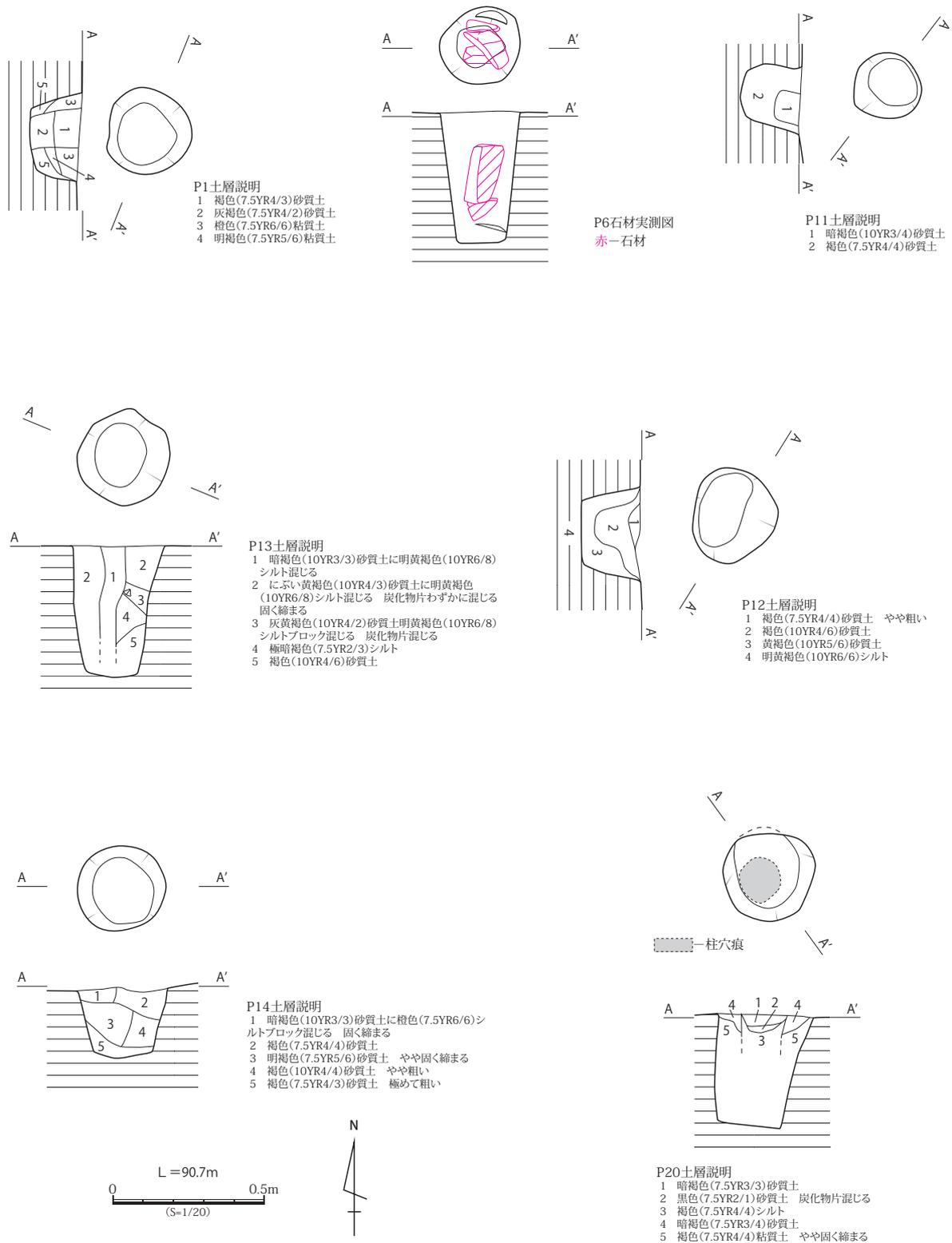
第 19 図 石垣下層東側土器群実測図 (S=1/10)



第 20 図 石垣下層西側土器群実測図 (S=1/10)



第 21 図 柱穴群実測図 (S=1/60)



第 22 図 各柱穴実測図 (S=1/20)

平面位置及び底面標高から P17・20・37, P6・13・16 及び P23・35 がそれぞれ組み合わせる可能性が高いが、柱穴の組み合わせによる上屋構造は想定することができなかった。また、P13・20・35 からは柱痕跡を確認した。痕跡から推定できる柱サイズはいずれも直径 10～15cm である。なお、P11・12・14 からは柱抜き取り痕を確認した。

平坦面から出土した、使用時に炭化物が付着したと考えられる土師質土器（鍋）片の炭化物の放射線炭素年代測定をおこなった結果、暦年代が AD1731～1785 年（2 σ 49.1%）に相当する結果がでた。

○ SK1（第 23 図）

SK1 は調査区の南西部に位置する大型の掘りこみである。平面形状は歪な長方形で、東側の一部を後世の土取りにより消失している。底面の規模は長辺約 4.6m 短辺 2.1～2.3m、底面標高は 90.50m、掘り方の深さは最大 14cm である。遺構底面の南側には、直径 10～18cm、深さ約 6cm のピット 4 基を確認した。

掘り方内にはこぶし～人頭大の大きさの角礫が広がっていた。本遺構の性格は明らかではないが、掘りこみが浅く、礫が平面的に広がっていることから、検出時の状況が本遺構の使用時の状況であった可能性がある。

本遺構からは角礫に混じり、陶磁器（7～10）が出土しており、出土土器の形態は 17 世紀中頃から 18 世紀にかけてのものと考えられる。

○ SK2（第 24 図）

SK2 は SK1 の南約 1m に位置する土坑である。平面形状は長円形で、底面の規模は長径 115cm 短径 58cm、底面標高は 90.60m、掘り方の深さは最大 15cm である。掘り方内にはこぶし～人頭大の大きさの角礫がまばらに認められた。

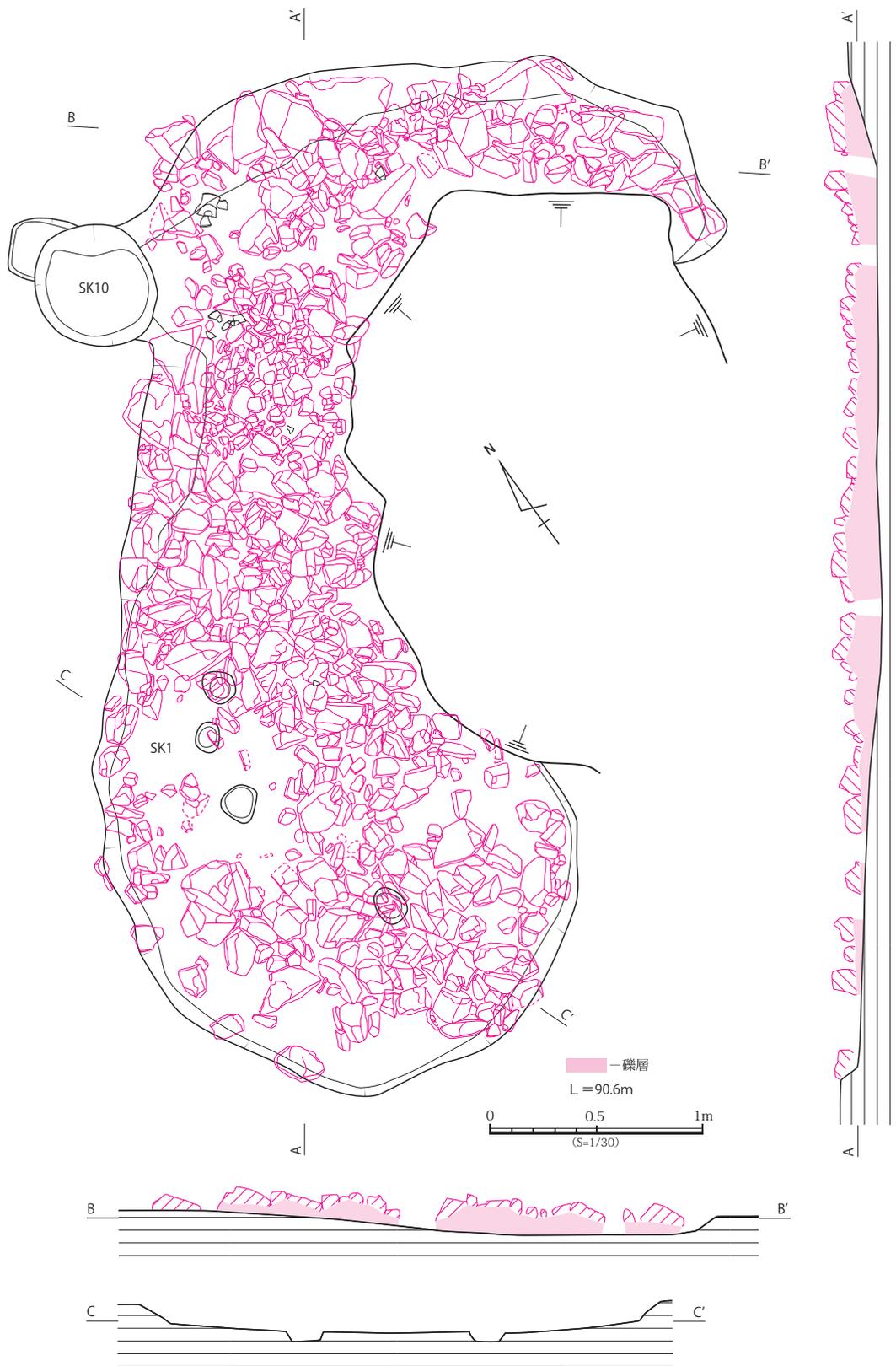
本遺構に伴う遺物は出土していない。

○ SK3（第 25 図）

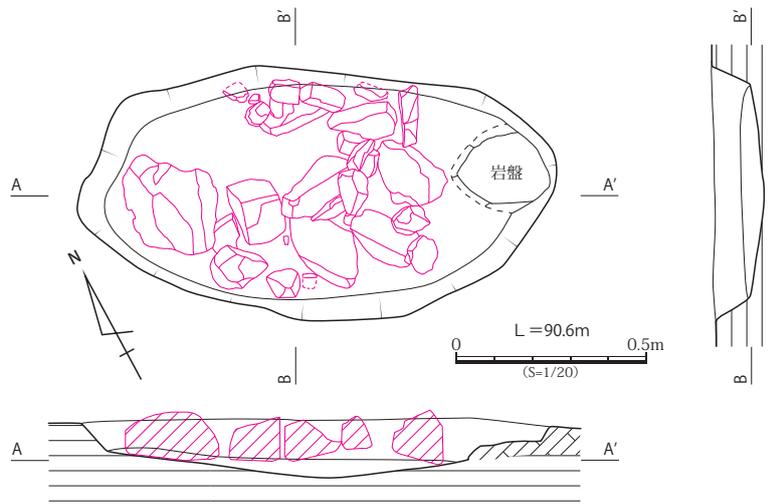
SK3 は SK1 の南東約 0.6m に位置する土坑である。掘り方上面の平面形状は円形で、底面の平面形状は長円形で、北側の一部を後世の土取りにより消失している。掘り方上面の規模は直径 91cm、底面の規模は長径 70cm 短径 54cm、底面標高は 90.25m、掘り方の深さは最大 40cm である。

掘り方内には上面から底面にかけて、こぶし～人頭大の大きさの角礫が詰まっていた。なお、礫同士及び底面・壁面と礫の間には土が混じらず空間が残る状態であった。このことは、礫の隙間に土砂が入り込む前に礫上面が埋まったことを表しており、本遺構の礫は遺構の廃棄に伴いつめられたものと考えられる。

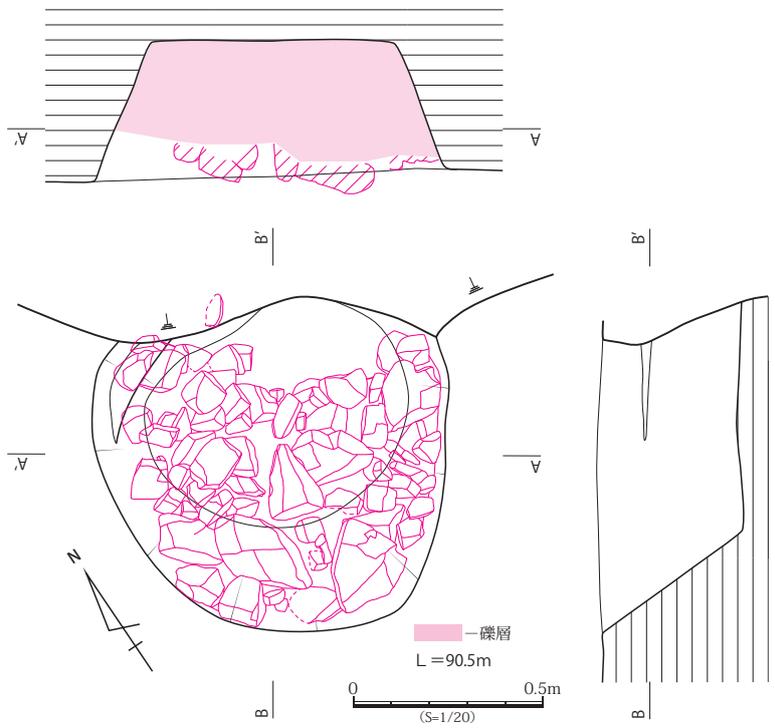
本遺構からは角礫に混じり、陶磁器（11）・砥石（35・36）が出土しており、出土土器の形態は 17 世紀末頃のものと考えられる。



第 23 図 SK1 実測図 (S=1/30)



第 24 図 SK2 実測図 (S=1/20)



第 25 図 SK3 実測図 (S=1/20)

○ SK4 (第 26 図)

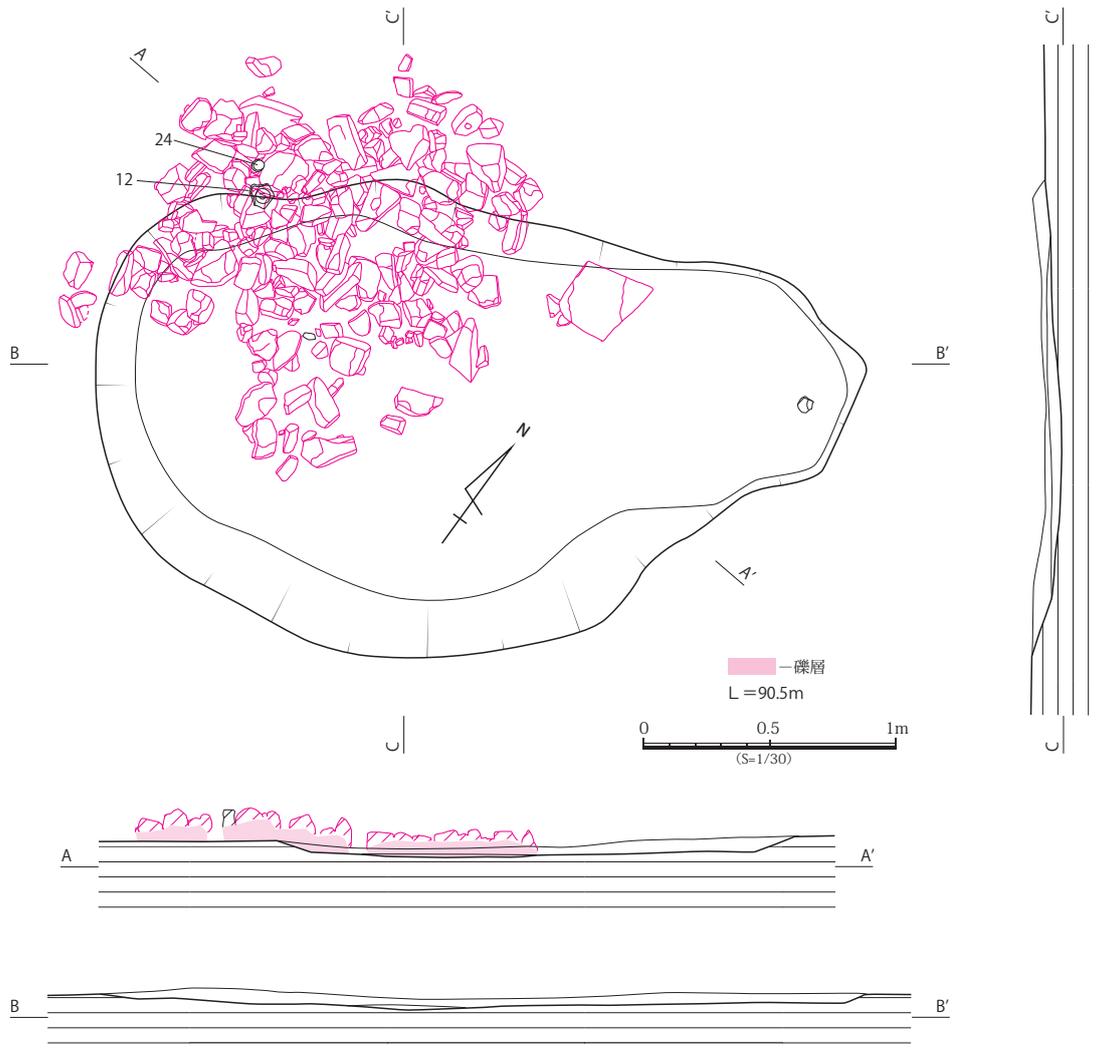
SK4 は SK3 の東約 1m に位置する土坑である。平面形状は歪な長円形で、底面の規模は長径 2.8m 短径 0.8 ~ 1.4m、底面標高は 91.02m、掘り方の深さは最大 8cm である。本遺構の東側上面にはこぶし〜人頭大の大きさの角礫が広がっていた。

本遺構からは陶磁器 (12) が、角礫内からは土師質土器 (24) が出土しており、出土土器の形態は 17 世紀後半のものと考えられる。

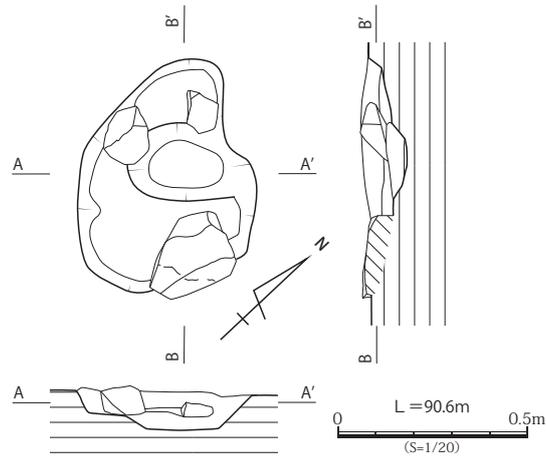
○ SK5 (第 27 図)

SK5 は SK4 の南約 0.3m に位置する土坑である。平面形状は歪な長円形で、底面の規模は長径 65cm 短径 46cm、底面標高は 90.57m、掘り方の深さは最大 7cm である。底面のほぼ中央には、長径 19cm 短径 12cm、底面標高は 90.53m、上段からの深さ 4cm の掘り込みをもつ。下側の掘り込みは形状・規模から柱穴跡の可能性もあるが、土層ではその痕跡は確認できなかった。

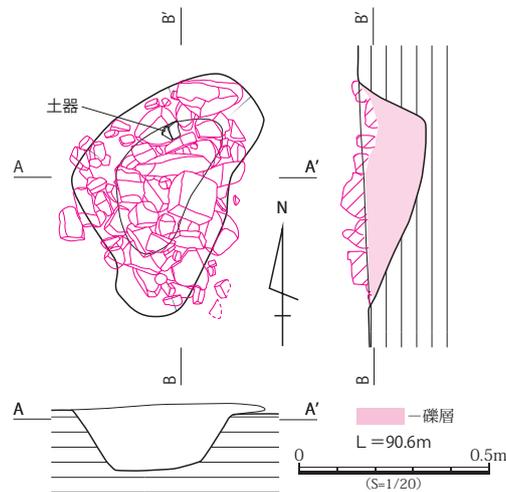
本遺構に伴う遺物は出土していない。



第 26 図 SK4 実測図 (S=1/30)



第 27 図 SK5 実測図 (S=1/20)



第 28 図 SK6 実測図 (S=1/20)

○ SK6 (第 28 図)

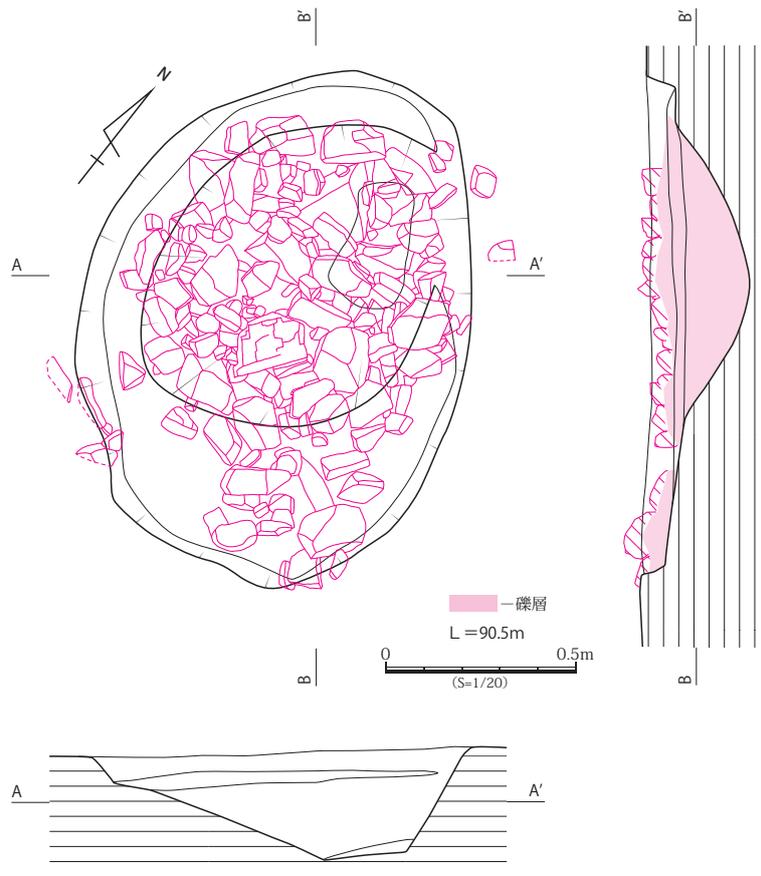
SK6 は SK4 の南東約 0.3m に位置する土坑である。平面形状は歪な長円形で、底面の規模は長径 37cm 短径 23cm、底面標高は 90.47m、掘り方の深さは最大 17cm である。掘り方内には 5～10cm 程度の大きさの角礫が詰まっていた。

本遺構からは角礫に混じり、陶磁器 (13) が出土しており、出土土器の形態は 17 世紀後半から 18 世紀後半のものと考えられる。

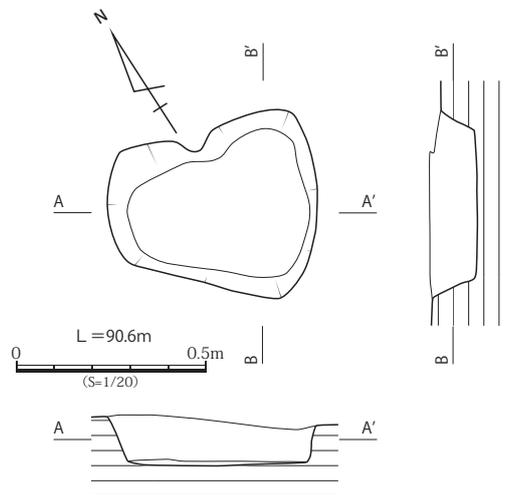
○ SK7 (第 29 図)

SK7 は SK6 の南東約 0.5m に位置する土坑である。平面形状は長円形で、底面の規模は長径 130cm 短径 90cm、底面標高は 90.55m、掘り方の深さは最大 8cm である。底面の北よりには、長径 35cm 短径 18cm、底面標高は 90.35m、上段のからの深さ 20cm の掘り込みをもつ。掘り方内には、こぶし～人頭大の大きさの角礫が詰まっていた。

本遺構に伴う遺物は出土していない。



第 29 図 SK7 実測図 (S=1/20)



第 30 図 SK8 実測図 (S=1/20)

○ SK8 (第 30 図)

SK8 は SK7 の北西約 1m に位置する土坑である。平面形状は歪な長方形で、底面の規模は長辺 47cm 短辺 40cm、底面標高は 90.53m、掘り方の深さは最大 13cm である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

○ SK9 (第 31 図)

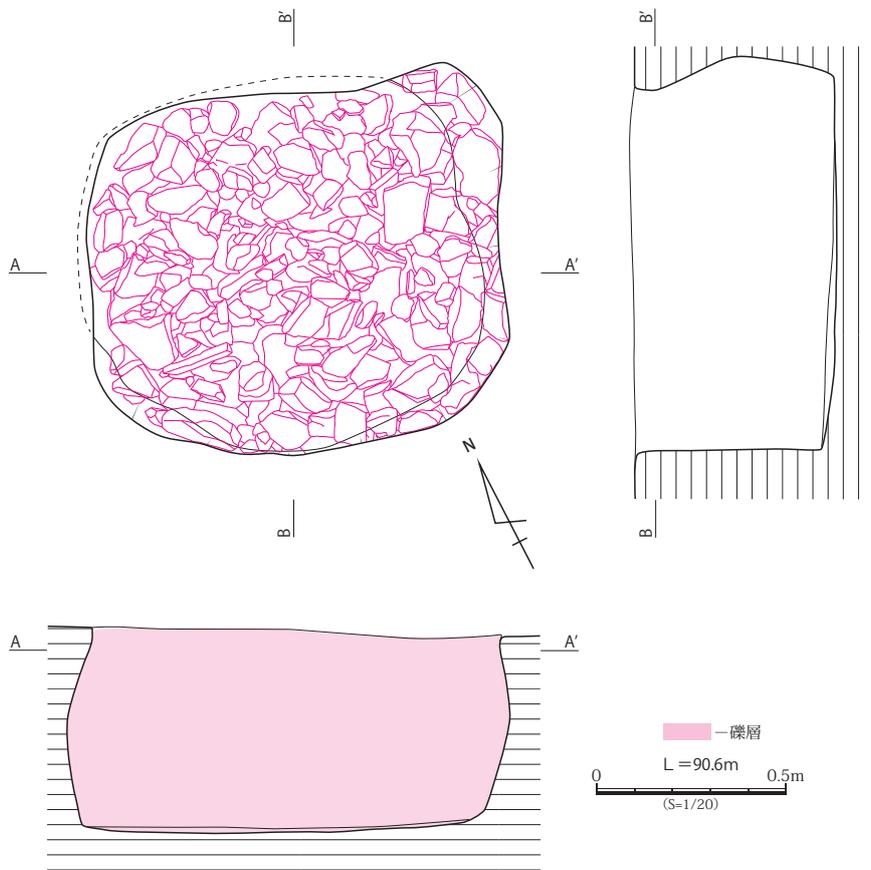
SK9 は SK1 の西約 1m に位置する土坑である。掘り方上面及び底面の平面形状は隅丸方形で、掘り込みの中位が袋状に広がる形状である。掘り方上面の規模は東西 108cm 南北 96cm、底面の規模は東西 115cm 南北 100cm、底面標高は 90.12m、掘り方の深さは最大 53cm である。

掘り方内には上面から底面にかけて、こぶし～人頭大の大きさの角礫が詰まっていた。なお、礫同士及び底面・壁面と礫の間には土が混じらず空間が残る状態であった。このことは、礫の隙間に土砂が入り込む前に礫上面が埋まったことを表しており、本遺構の礫は遺構の廃棄に伴いつめられたものと考えられる。

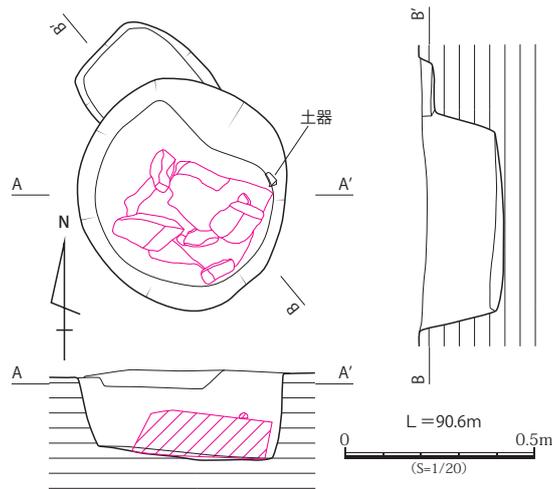
本遺構からは角礫に混じり陶磁器片が出土している。細片のため図示しえないが、刷毛目模様の陶器皿片であり、出土土器の形態は 17 世紀末～18 世紀前半頃のものと考えられる。

○ SK10 (第 32 図)

SK10 は SK1 の北西に隣接して位置する土坑で、北西部を後世の掘り込みにより削平されている。掘り方上面の平面形状は円形で、底面は歪な円形である。底面の規模長径 47cm 短径 38cm、底面標高は 90.50m、掘り方の深さは最大 23cm である。底面に接して 25cm×35cm の石材と小礫を



第 31 図 SK9 実測図 (S=1/20)



第 32 図 SK10 実測図 (S=1/20)

確認した。本遺構は SK1 を切っており、SK1 に後出すると考えられる。

本遺構からは陶磁器片及び土師質土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

○ SK11 (第 33 図)

SK11 は SK10 の北約 0.2m に位置する土坑である。平面形状は円形で、掘り方上面の規模は直径約 65cm、底面の規模は直径約 35cm、底面標高は 90.12m、掘り方の深さは最大 53cm である。

掘り方内の上半分にはこぶし～人頭大の大きさの角礫が多く含まれていた。角礫の下層、掘り方上面から深さ約 20cm の所に、桶等の曲げ物の痕跡と考えられる直径 45cm 幅 4cm の土色に変色した部分を確認した。本遺構は桶が設置されており、角礫は廃棄に伴いつめられたものと考えられる。

本遺構の埋土中からは土師質鍋 (25) が出土しているが、出土土器の時期は明らかにできなかった。

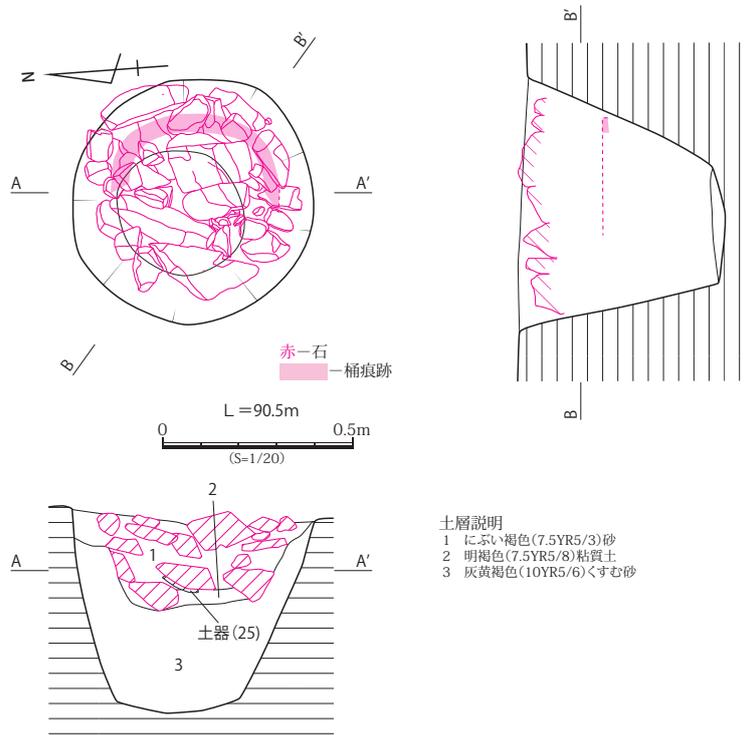
○ SK12 (第 34 図)

SK12 は SK11 の北約 0.5m に位置する土坑である。平面形状は長円形で、底面の規模は長径 98cm 短径 88cm、底面標高は 90.62m、掘り方の深さは最大 5cm である。掘り方が浅いことから土坑が位置する平坦面が形成される以前の土坑で、上部が削平された可能性もある。

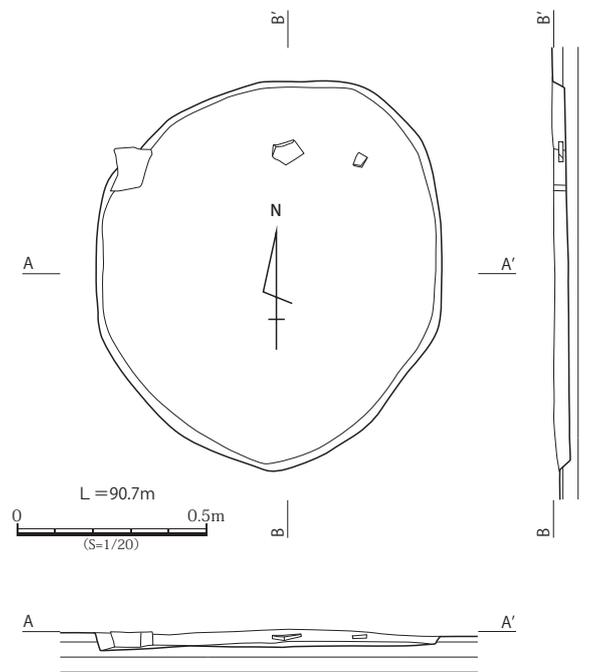
本遺構からは土師質土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

○ SK13・SD1 (第 35 図)

SK13 は SK12 の北東約 2m に位置する土坑である。遺構の南側は事前の試掘調査によるトレンチで削平され、北西部は P37 に切られている。残存部から推定できる形状は円形で、底面の規模は東西 115cm、底面標高は 90.42m、深さは最大 15cm である。底面には直径 25cm、底面からの



第 33 図 SK11 実測図 (S=1/20)



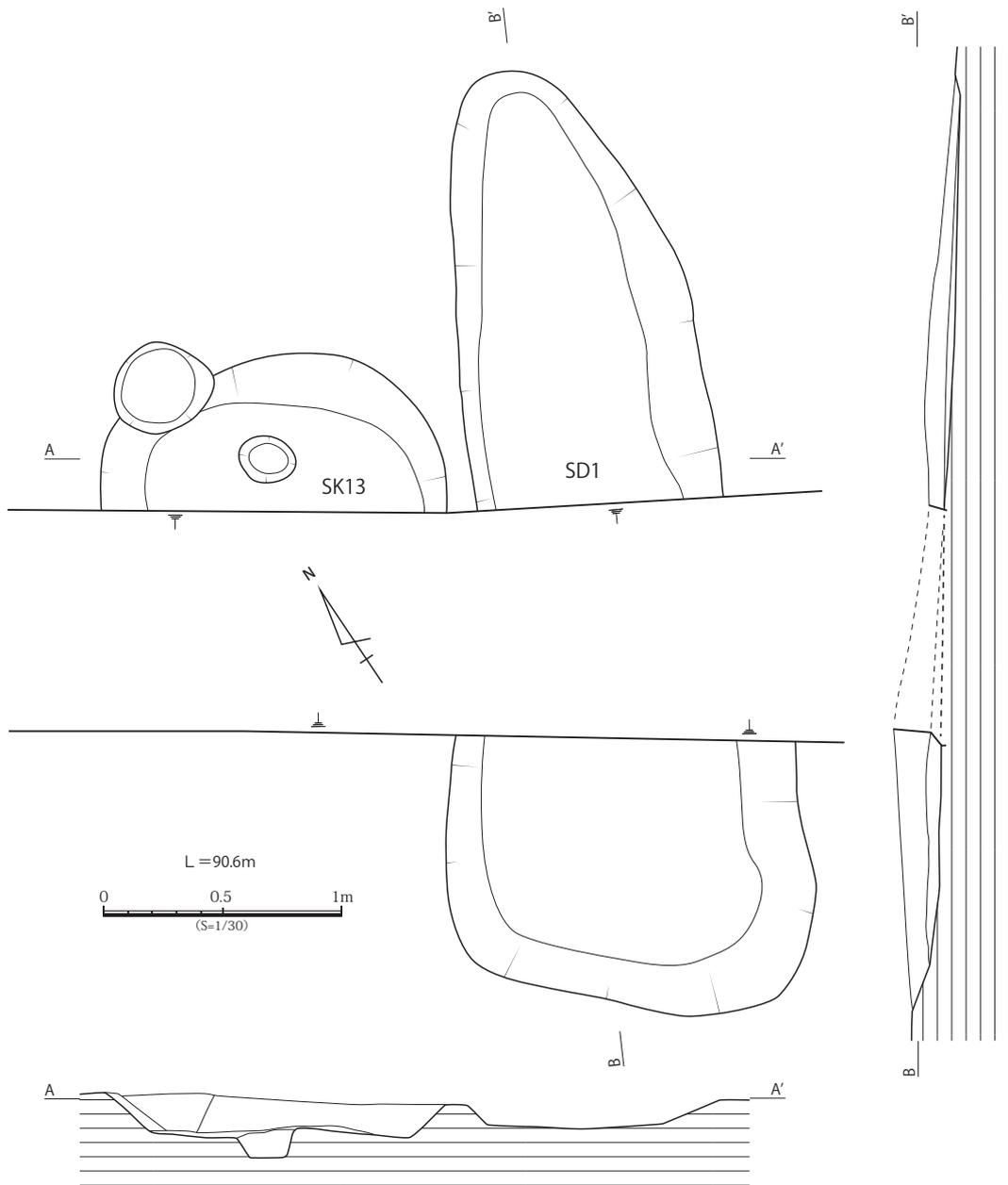
第 34 図 SK12 実測図 (S=1/20)

深さ 12cm の堀り込みを検出した。

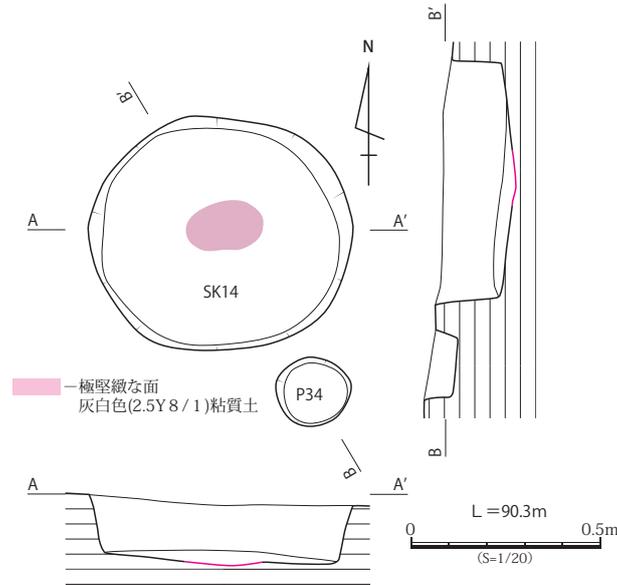
本遺構に伴う遺物は出土していない。

SD1 は SK13 の東に接して位置する溝状遺構である。平面形状は南北に長い三角形で、底面の規模は長辺 365cm 短辺は最大 75cm、底面は緩やかに北に傾斜し、底面標高は南端で 90.51m 北端で 90.42m、掘り方の深さは最大 18cm である。石垣構築面の下層に位置し、石垣面とほぼ直行すること、底面が堅く締まることから、石垣構築前の段階の平坦面に向かう通路等の可能性がある。

本遺構に伴う遺物は出土していない。



第 35 図 SK13・SD1 実測図 (S=1/20)



第 36 図 SK14 実測図 (S=1/20)

○ SK14 (第 36 図)

SK14 は石垣東端の約 0.5m 北に位置する土坑である。平面形状は円形で、底面の規模は東西 62cm 南北 57cm、底面標高は 90.11m 掘り方の深さは最大 19cm である。底面の中央部には、水分が溜まっていたため形成されたと考えられる長径 20cm 短径 13cm の灰白色の極堅緻な粘質土の面を確認した。本遺構は石垣構築面の下層に位置しており、石垣よりも先行すると考えられる。

本遺構からは陶磁器片及び土師質土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

○ SK15・SK16・SX1 (第 37 図)

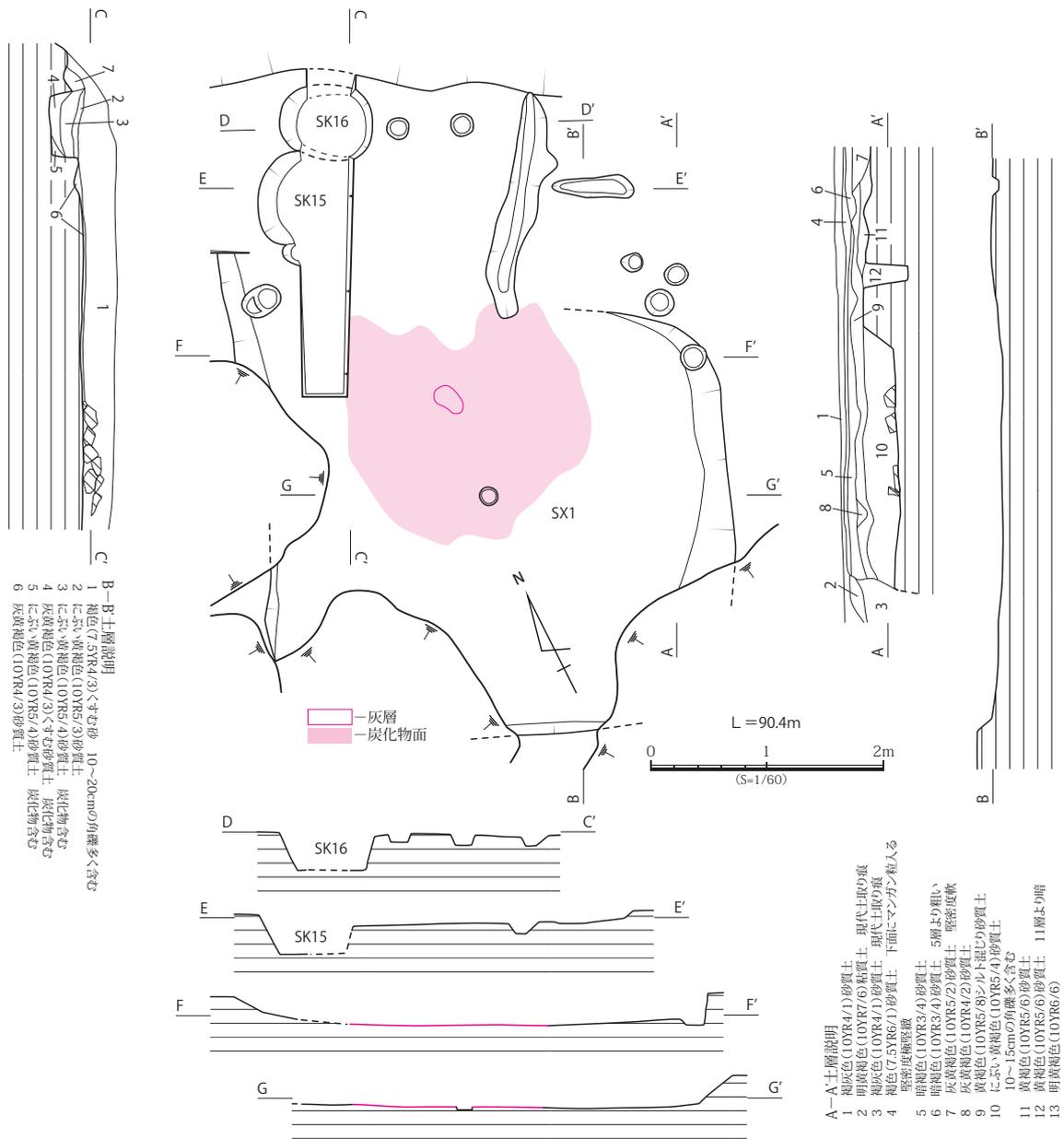
SK15 は SK14 の東約 1.6m に位置する土坑である。残存部から推定できる平面形状は南北に長い長円形で、底面の規模は南北 53cm、底面標高は 90.08m、掘り方の深さは最大 32cm である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK16 は SK15 の北に隣接して位置する土坑である。平面形状は楕円形で、底面の規模は東西 60cm 南北 50cm、底面標高は 90.04m、掘り方の深さは最大 30cm である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SX1 は SK15 の南東約 1m に位置する。周辺を現代の土取により削平され遺存状況は悪いが、残存部から隅丸方形と想定できる掘り込みを確認した。掘り込みの規模は掘り方上面で東西 4m 南北 3.6m、床面の規模は東西 3.6m 南北 3.5m、床面標高は 90.30m、掘り方の深さは最大 30cm である。床面からは東西 210cm 南北 190cm の不正形な炭化物・灰層の広がりを確認した。状況から火を使用した跡と考えられる。また、炭化物面の北東隅に接し、北壁があったと考えられる位置の中央部付近から北に伸びる形で、幅 25cm 深さ約 10cm の溝を確認した。炭化物面との位置関係から、



第 37 図 SK15・SK16・SX1 実測図 (S=1/60)

排煙等の設備の可能性があり、本遺構は住居跡ではなく、火を使う施設であると考えられる。

本遺構の埋土中からは、陶磁器 (18)・土師質土器 (30) 及び細片のため図示できないが、羽口の破片と思われる土器片が出土している。出土土器はその形態から 17 世紀後半のものと考えられる。

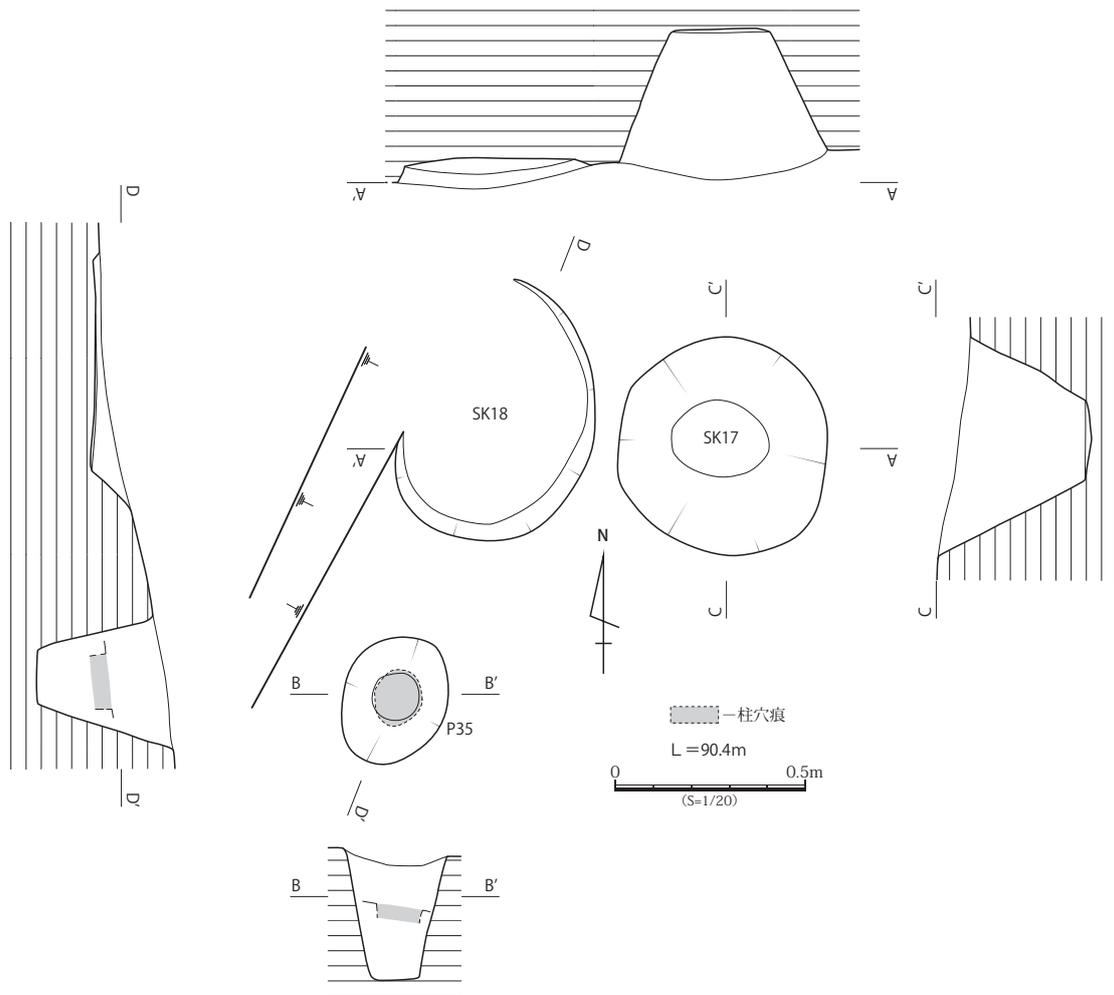
○SK17・SK18（第38図）

SK17は石垣構築面の下層，SK14の北西約0.4mに位置する土坑である。平面形状は円形で，底面の規模は長径26cm短径20cm，底面標高90.00m，深さは最大40cmである。本遺構は石垣構築面の下層に位置することから，石垣に先行するものである。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK18は石垣構築面の下層，SK17の西に隣接して位置する土坑である。北西部を調査時のトレンチにより消失しているが，想定できる平面形状は長円形で，底面の規模は長径65cm短径約45cm，底面標高90.33m，深さは最大10cmである。本遺構は石垣構築面の下層に位置することから，石垣に先行するものである。

本遺構の埋土中からは，陶磁器片及び土師質土器片が出土しているが，細片のため図示できなかった。

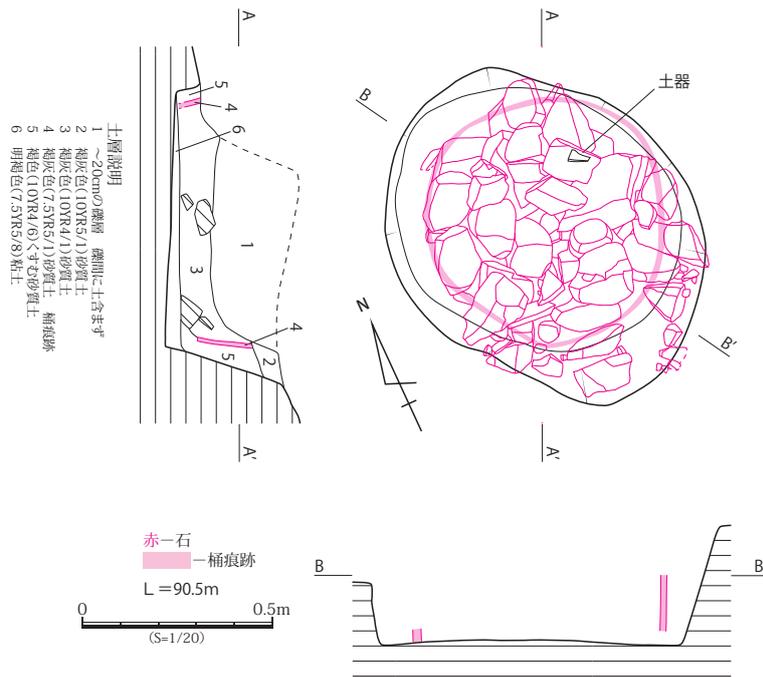


第38図 SK17・SK18実測図 (S=1/20)

○ SK19 (第 39 図)

SK19はSK13の北約0.5m、石垣を切って位置する土坑である。平面形状は歪な円形で、底面の規模は長径78cm短径65cm、底面標高は90.31m、深さは最大32cmである。遺構内の埋土上半分(第39図第1層)には一片10~20cmの角礫が多く含まれていた。また、埋土の下半分には、桶等の曲げ物の痕跡と考えられる、直径約65cm幅1~2cmの円筒状の土層(第4層)を確認した。状況から、本遺構は廃棄に伴い礫が詰められたものと考えられる。

本遺構の埋土中からは土師質土器片が出土したが、細片のため図示できなかった。



第 39 図 SK19 実測図 (S=1/20)

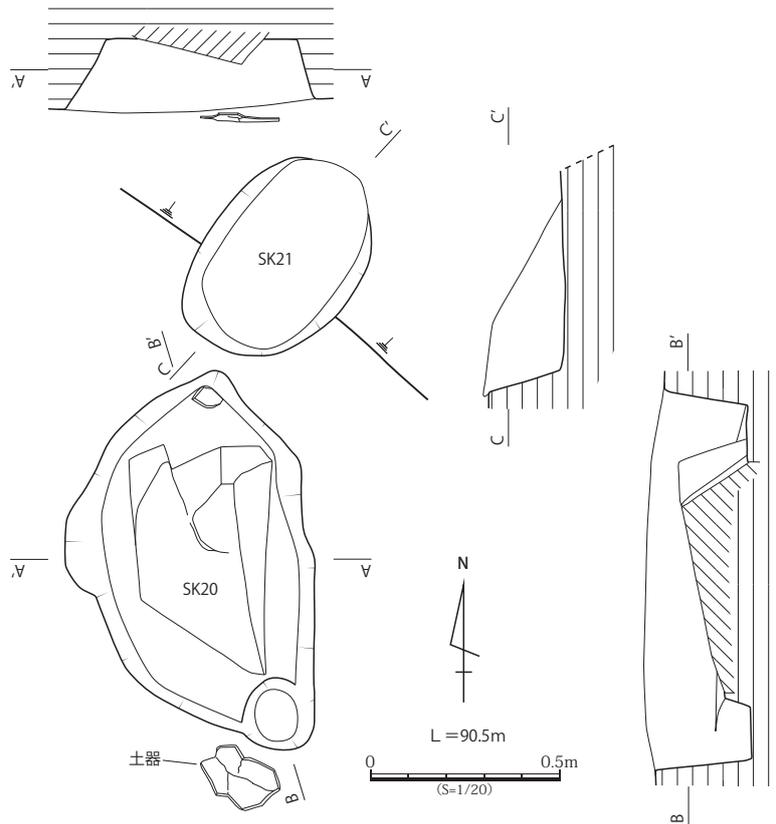
○ SK20・SK21 (第 40 図)

SK20はSK13の西約4.5mに位置する土坑である。平面形状は歪な長方形で、底面の規模は長辺87cm短辺50cm、底面標高は90.43cm、深さは最大23cmである。底面の大半は岩石が露頭しており、貯蔵等を目的とする土坑には向かない。このことから、掘削時に石材が出たため廃棄された土坑と思われる。南端部には底面直径12cm、底面からの深さ10cmのピットが位置するが、先後関係は明らかにできなかった。

本遺構の掘り方外からは土師質土器片が出土した。表面にススが付着しており、大型の鍋片と考えられるが、部分的であり図示できなかった。

SK21はSK20の北に隣接して位置する土坑である。北側1/3程度は削平されているが、想定できる平面形状は長円形で、底面の規模は長径約55cm短径32cm、底面標高は90.35m、深さは最大20cmである。

本遺構に伴う遺物は出土していない。



第 40 図 SK20・SK21 実測図 (S=1/20)

SK20・SK21 の位置する場所には本来石垣があったと考えられるが、石材は攪乱及び削平されており、SK20・SK21 と石垣との先後関係は不明である。

○ SK22 (第 41 図)

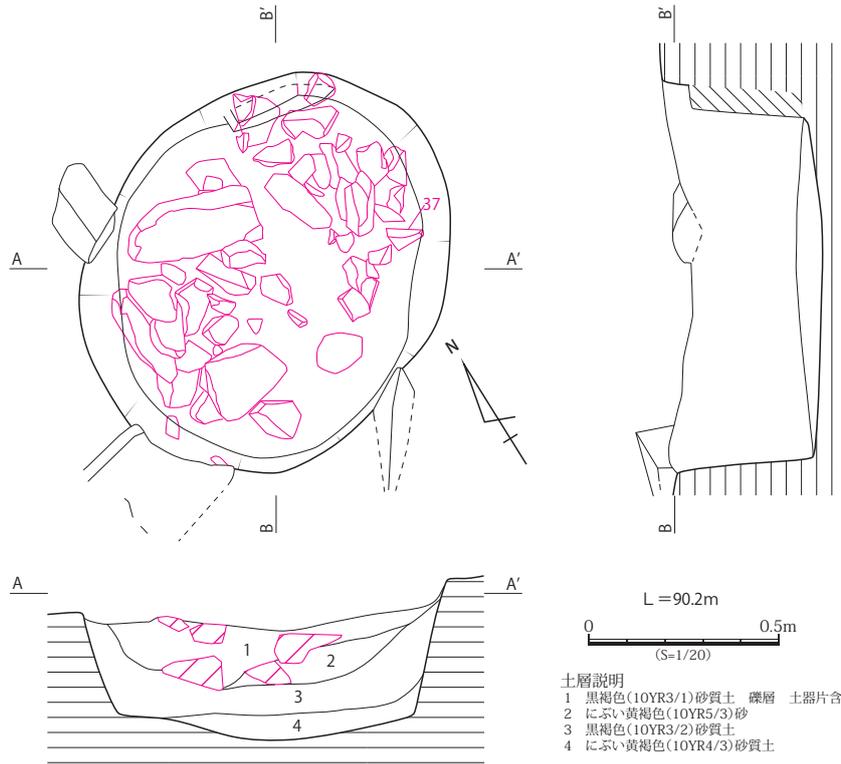
SK22 は石垣西端部に接して位置する土坑である。平面形状は円形で底面の規模は長径 95cm 短径 80cm、底面標高は 90.81cm、深さは最大 43cm である。埋土の上層部には、こぶし～人頭大の大きさの角礫及び土器片が含まれていた。状況から後世の攪乱に伴うものと考えられる。本遺構は石垣及び石垣下層西側土器群の下層から確認されたことから、石垣に先行するものと考えられる。

本遺構の埋土上層部からは陶磁器 (14～17)・内耳土器 (26)・砥石 (37) が出土している。出土土器はその形態から 17 世紀末から 18 世紀前半にかけてのものと考えられる。

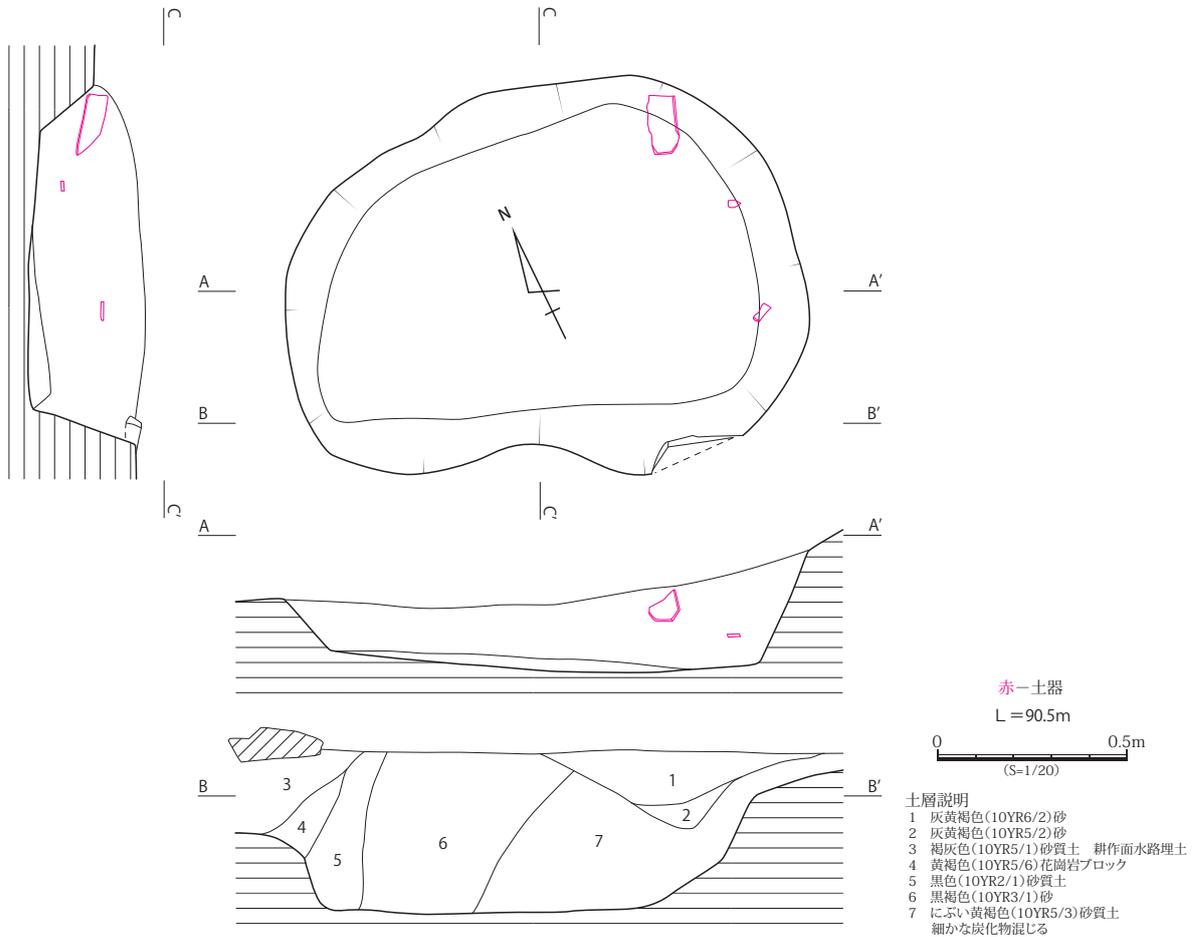
○ SK23 (第 42 図)

SK23 は SK22 の南約 0.9m に位置する土坑である。平面形状は歪な長方形で、底面の規模は長辺 115cm 短辺 60～80cm、底面標高は 90.15m、深さは最大 30cm である。本遺構は石垣構築面の下層から確認されたことから、石垣に先行するものと考えられる。

本遺構の埋土中からは大型の土師質鍋片や土師質鍋 (27)・砥石 (38) が出土しているが、出土土器の時期は明らかにできなかった。



第41図 SK22 実測図 (S=1/20)

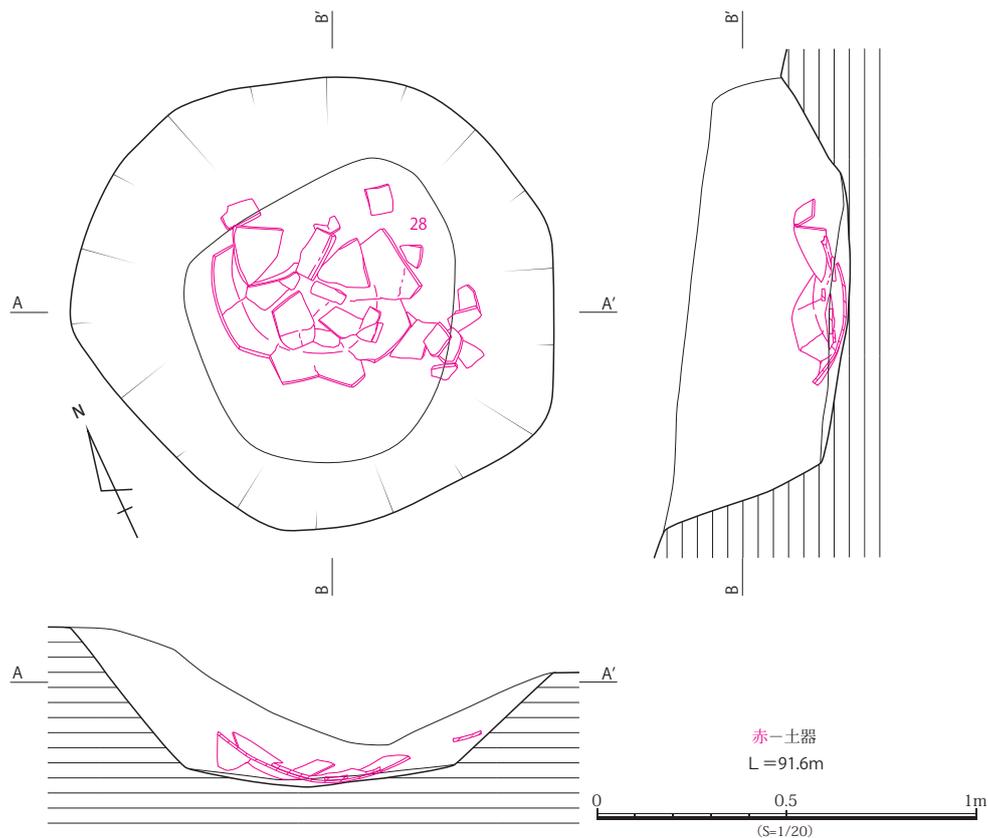


第42図 SK23 実測図 (S=1/20)

○ SK24 (第 43 図)

SK24 は SK7 の南東約 6m の斜面に位置する土坑である。平面形状は掘り方上面は多角形状で、底面は歪な円形である。底面の規模は東西 72cm 南北 80cm、底面標高は 91.32m、深さは最大 42cm である。

本遺構からは大型の土師質甕 (28) が出土した。底部が土坑底面に接して位置しており、土坑の使用時に設置されていたものと考えられる。甕の復元高が 70cm 近くあることから、土坑の本来の深さはそれ以上あったものと考えられる。なお、出土土器の時期は明らかにできなかった。

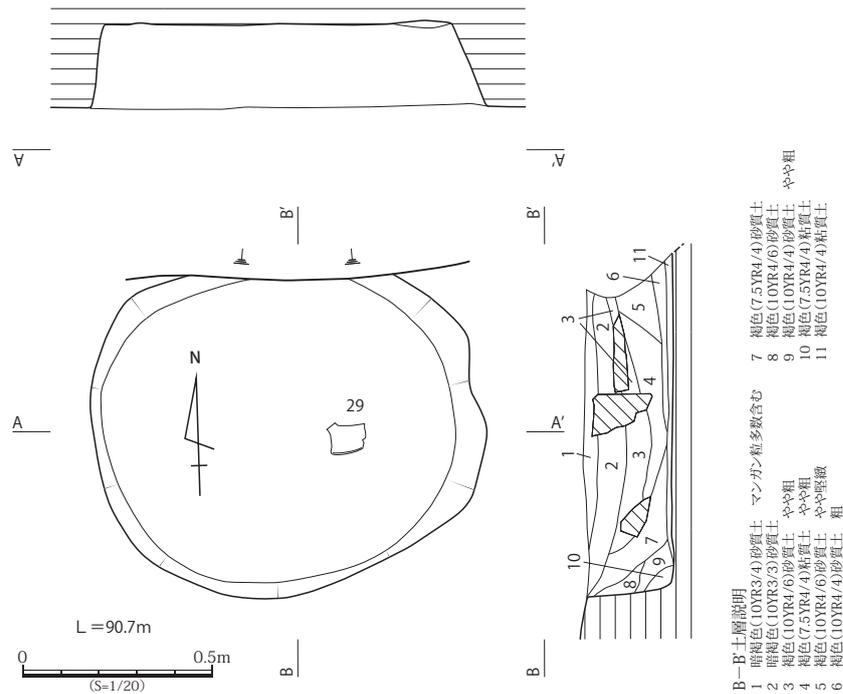


第 43 図 SK24 実測図 (S=1/20)

○ SK25 (第 44 図)

SK25 は SK24 の北約 3.5m に位置する土坑である。北側の一部を後世の土取りにより消失している。平面形状は長円形で、底面の規模は長径 92cm 短径は復元想定 82cm、底面標高は 90.36m、深さは最大 22cm である。

本遺構の底面直上からは焙烙 (29) が出土しているが、出土土器の時期は明らかにできなかった。



第44図 SK25実測図 (S=1/20)

(2) 遺物

近世面に伴う遺物としては、陶磁器・土師質土器・石製品が出土している。しかし、陶磁器・土師質土器類は調査区内で複数確認できたものの、大半が耕作等の後世の攪乱により部分的な破片となっており、今回報告できたものは一部である。なお、報告できなかったものも含め、陶磁器片のほとんどは17世紀半ばから18世紀半ばの特徴を持つものであり、南端部の斜面埋土中からは17世紀初め頃の比較的古い陶磁器片の出土が目立った。

陶磁器類はそのほとんどが肥前系であり、波佐見産、平戸・三川内産など長崎産の割合が多い。石垣内から出土した(1・2)は遺跡内の出土土器の中では比較的古い様相を持つ。(1)は灰緑色の灰釉に砂目をもち生産年代は17世紀前半頃に、(2)は青緑色の灰釉に胎土目をもち生産年代は16世紀末から17世紀初頭と考えられる。(6・14・15・16)は陶胎染付である。外面には蔦草の模様が施された碗で焼きはあまりよくなく、波佐見産で生産年代は17世紀後半から18世紀前半期にかけてのものと考えられる。(17)は外面は波状刷毛目、内面は打刷毛目の碗で、平戸・三川内産である。生産年代は1690年から1780年と考えられる。(18)はいわゆる呉器手碗で高台内は無釉である。生産年代は17世紀後半頃と考えられる。鉢類(4・5・11)はいずれも刷毛目をもち、いずれもあまり焼成はよくない。(4)は口縁部に緑色釉がかけられているが、焼成は悪く発色していない。

(23)は大型の鍋である。内面には花状の刻印が両端に対になって施されている。(21)は大型の鍋の把手部、(24)は鍋または焙烙の把手部と考えられる。(26)は内耳土器C群²⁾で18世紀代のものと考えられる。(22・23・25・28・31・32)はいずれも大型の鍋・甕であるが、類似品は

東広島市内の町屋等の調査例で多数出土しており、東広島市八本松町原周辺で焼かれた焼き物の特徴をもつ³⁾。なお、土師質土器類では大型の鍋・羽釜のものと思われる破片が多数出土したが、大半が復元不能であった。(20)は焼塩壺である。口縁部にはわずかに受け部が残り、底部の充填部は外れている。小川望氏のⅡ-1b類⁴⁾に属すると考えられる。

(33・35・36・37・38)は砥石である。石材はいずれも高田流紋岩で本遺跡周辺で採集が可能な石材である。石垣の石材や遺構の埋土中から出土したものであり、近世に伴うものか古墳時代の集落跡に関するものかは判断できなかった。(34・39)は石臼である。(34)は茶臼の上臼で、材質は砂岩、刻目は8分画・副溝は7である。(39)は上臼で、石材は花崗岩で刻目はない。心棒部には心棒に使用したと考えられる鉄棒の錆が付着していた。臼の上面部は被熱シスが付着しており、二次利用された可能性が高い。

注

1. 陶磁器については以下を参考にした。
九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』2000年
2. 福原茂樹氏は内耳土器を口縁部の形状により3群に分類している。
財団法人広島市文化財団『広島城遺跡基町高校グラウンド地点』1999年
3. 原村史編纂委員会『原村史』1967年
西条町『西条町史』1971年
4. 小川望『焼塩壺と近世の考古学』2008年 同成社

第4表 出土陶磁器観察表

単位は cm, []は復元値, -は不明

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	紋様	特徴	推定産地	生産年代
1	石垣内	陶器	皿	[12.3]	3.0	4.5	-	灰緑色の灰釉。砂目。	肥前	17c 前半
2	石垣内	陶器	皿	-	-	[4.5]	-	青緑色の灰釉。胎土目。	肥前	16c 末～17c 初頭
3	石垣面	陶器	皿	-	-	4.5	-	蛇の目釉剥ぎ。内面銅 緑釉, 砂目痕。底部無釉。 か?)	肥前(内野山北 か?)	1650～1690年代
4	石垣面 / 石垣下層西側土器群	陶器	鉢	-	11.9	-	内: 刷毛目	胎土: 明赤褐色	肥前系	18c 前半
5	石垣面	陶器	鉢	[26.4]	8.2	[11.0]	外: 刷毛目 内: 刷毛目	胎土: 赤褐色	肥前	17c 末
6	石垣下層西側土器群	陶胎 染付	碗	[10.1]	7.0	[4.3]	外: 蔓草	-	波佐見	17c 後半～18c 中頃
7	SK1 埋土	染付	碗	[9.7]	-	-	外: 雪輪草花紋	-	波佐見	1680～1740年代
8	SK1 埋土 / 石垣下層西側土器群	陶器	皿	[10.2]	5.3	[7.4]	内: 刷毛目	蛇の目釉剥ぎ	肥前	18c
9	SK1 埋土	陶器	皿	-	-	4.8	外: 緑釉・白化粧 内: 草・線	胎土: 精良, 淡黄色	平戸 / 三川内	1650～1690年代
10	SK1 埋土	陶器	播鉢	-	-	-	-	-	備前	-
11	SK3	磁器	鉢	-	-	[13.0]	内: 波状刷毛目, 白化粧	胎土: 褐色	肥前系	17c 末
12	SK4	陶器	皿	-	-	4.2	-	蛇の目釉剥ぎ。底部無釉。	平戸系	1650～1690年代
13	SK6	磁器	碗	-	-	-	-	外青磁内染付	肥前系	17c 後半～18c 後半
14	SK22 埋土	陶胎 染付	碗	10.1	6.7	4.0	外: 蔓草	-	波佐見	17c 末～18c 前半
15	SK22 埋土	陶胎 染付	碗	[9.8]	6.9	[4.8]	外: 蔓草	-	波佐見	18c 中頃
16	SK22 埋土	陶胎 染付	碗	-	-	[4.5]	外: 蔓草	-	波佐見	17c 後半～18c 中頃
17	SK22 埋土	陶器	碗	[9.7]	6.5	4.3	外: 波状刷毛目 内: 打刷毛目	胎土: 密 / 黒褐色	平戸 / 三川内	1690～1750年代
18	SX1	陶器	碗	-	-	4.3	-	呉器手。高台無釉。	肥前	17c 後半

第5表 出土土師質土器観察表

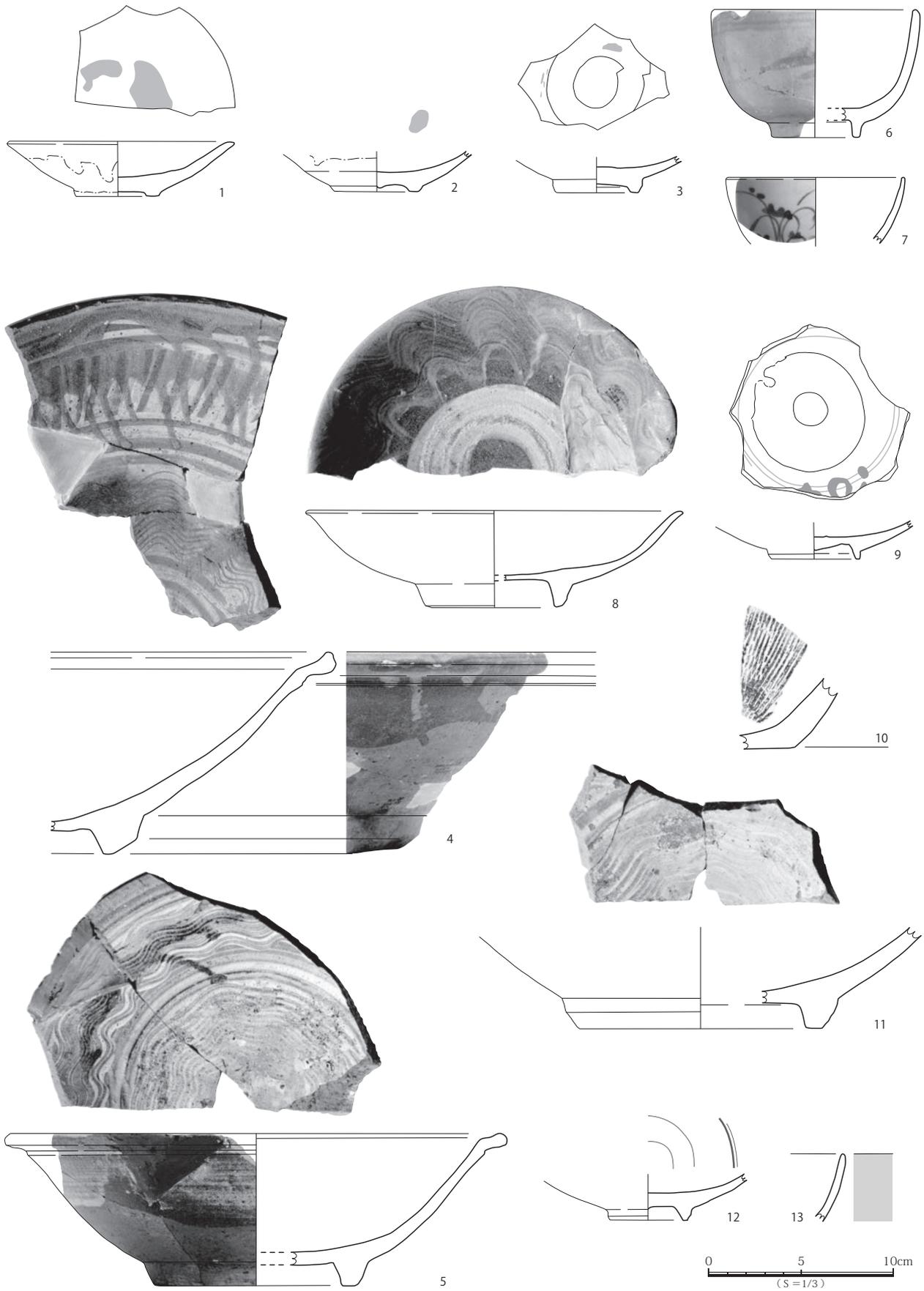
単位は cm, [] は復元値, - は不明

番号	遺構	器種	口径	器高	底径	胴部 最大径	特徴	色調	胎土	焼成
19	石垣面	焙烙	-	-	-	-	外面：スス付着。	灰黄褐色 (10YR6/2)	-	良好
20	石垣面	焼塩壺 身	[7.1]	7.4	[6.2]	-	内面：ヘラ後指ナデ。 底部粘土紐及び粘土塊充填痕。	橙色 (7.5YR7/8)	密, ~ 2mm の 石英含む。	良好
21	石垣面	把手	-	-	-	-	大形の鍋類の把手か?	灰白色 (2.5Y8/2)	精良	良好
22	石垣下層東 側土器群	甕	[51.7]	53 ~	[45.6]	[53.5]	外面：底部付近指頭圧痕 内面：口縁付近荒れ。 輪積成形。	淡黄色 (2.5 Y 8/3)	密	良好
23	石垣下層西 側土器群	鍋	53.4	18.4 ~	-	-	外面：スス付着 内面：口縁部に花形紋 胴部中位に指頭圧痕及び リング状に黒化。	灰白色 (2.5Y8/2)	やや密	やや軟
24	SK4	把手	-	-	-	-	大型の鍋の把手か?	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	密	良好
25	SK11/ 石垣 下層西側土 器群	鍋	-	-	-	-	外面：被熱	灰白色 (10YR5/1)	-	良好
26	SK22 埋土	内耳 土器	-	-	-	-	外面：スス付着	灰黄色 (2.5Y7/2)	-	良好
27	SK23	鍋	-	-	-	-	外面：スス付着 内耳土器か?	灰白色 (2.5Y8/2)	-	良好
28	SK24	甕	73.7	-	47.8	75.3	外面：刷毛目 上部と下部の接点不明。	灰黄色 (2.5Y7/2)	密	やや軟
29	SK25	焙烙	-	-	-	-	外面：被熱により黒化	灰黄色 (2.5Y7/2)	やや粗, ~ 2mm の砂粒多い。	良好
30	SX1 埋土	鍋	-	-	-	-	外面：被熱により黒化 大形の鍋の口縁部。	灰黄色 (2.5Y7/2)	-	良好
31	その他埋土	甕	-	-	45.3	-	外面：刷毛目 内面：底部屈曲部荒れ	灰白色 (2.5Y8/2)	~ 1 mm の長石 多い。	やや軟
32	その他埋土	甕	-	-	-	-	内面：口縁付近荒れ	灰白色 (2.5Y8/2)	やや密	やや軟

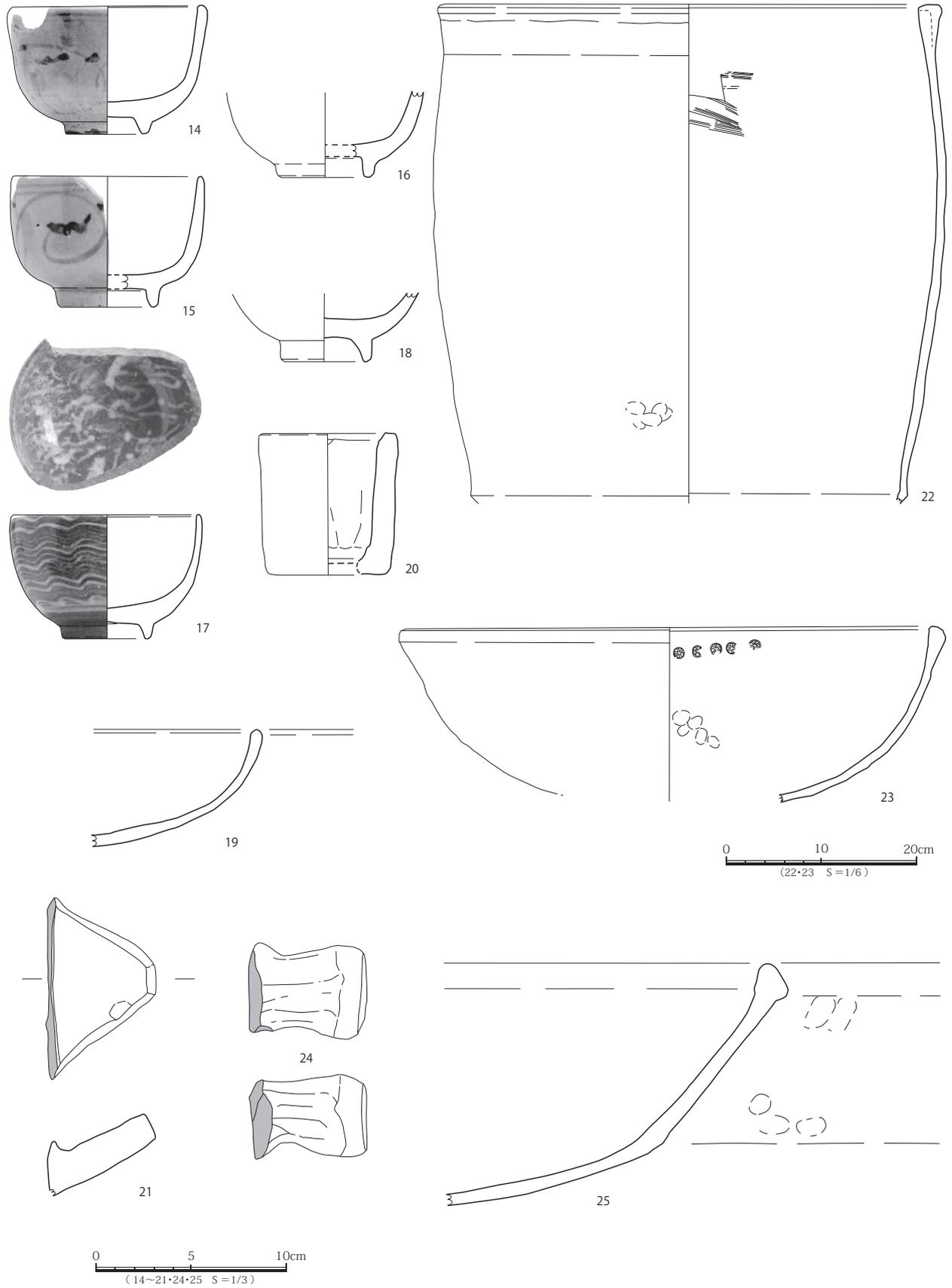
第6表 出土石製品観察表

単位は cm, [] は復元値, - は不明, / は該当部位無し

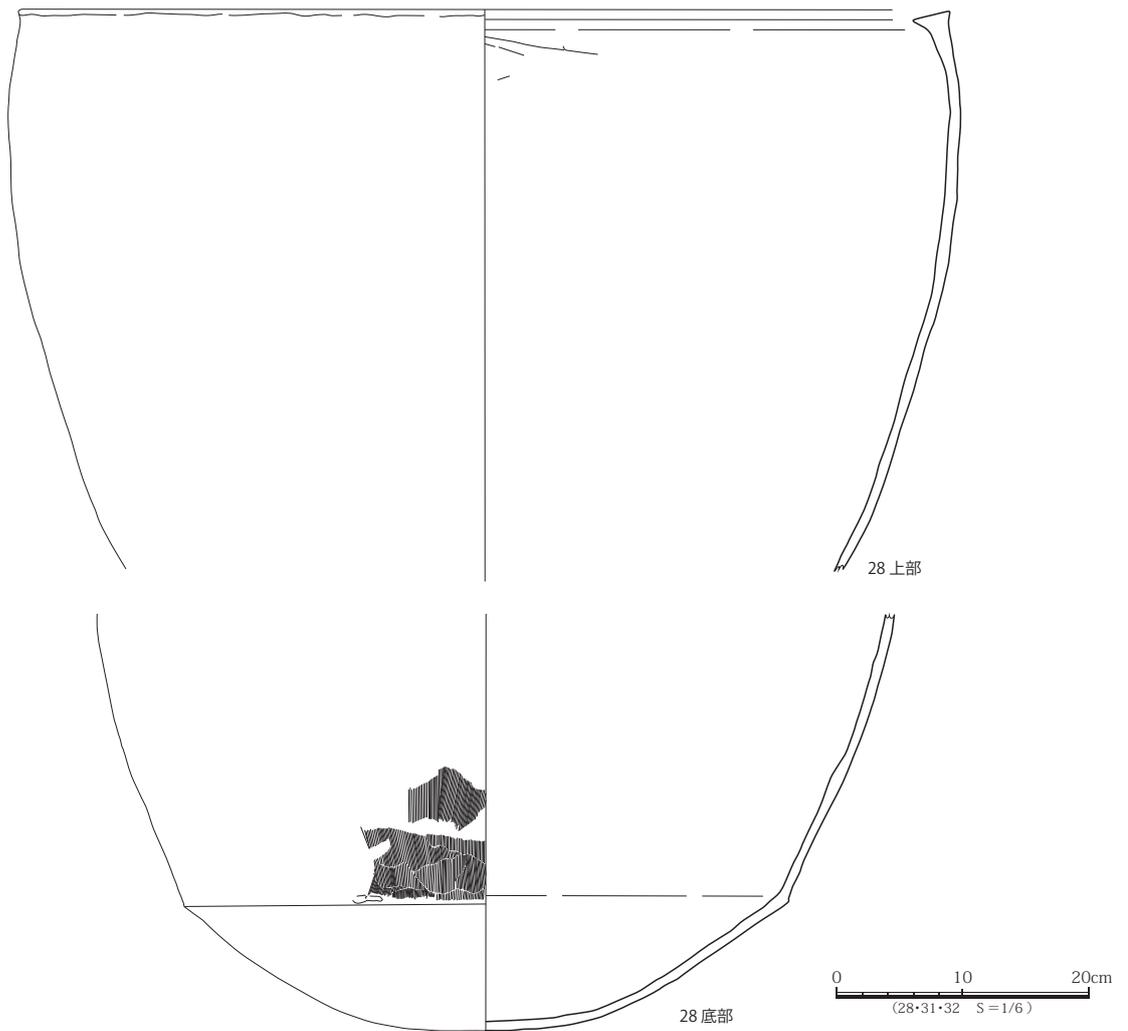
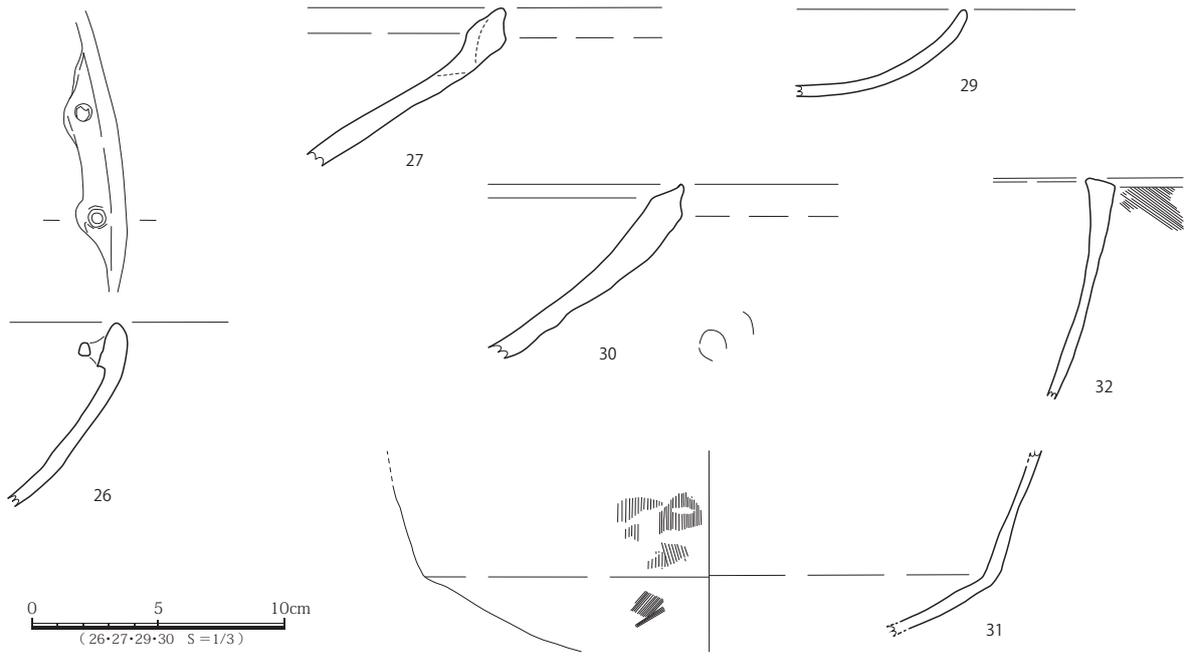
番号	遺構	器種	口径	器高	底径	特徴
33	石垣内	砥石	6.5	6.4	3.4	使用面：2 材質：高田流紋岩
34	石垣内	茶白 (上白)	-	[13.5]	10.5	刻目：8分画 副溝 7 刻目は周縁まで有。 材質：砂岩
35	SK3	砥石	9.5	6.7	1.6	使用面：1 材質：高田流紋岩
36	SK3	砥石	7.9	4.5	4.7	使用面：2 材質：高田流紋岩
37	SK22 埋土	砥石	7.4	4.7	4.5	使用面：2 材質：高田流紋岩
38	SK23	砥石	13.2	8.5	6.2	使用面：2 材質：高田流紋岩
39	その他埋土	白 (上白)	-	[29.5]	4.8 ~ 9.5	材質：花崗岩 芯棒部に錆付着。



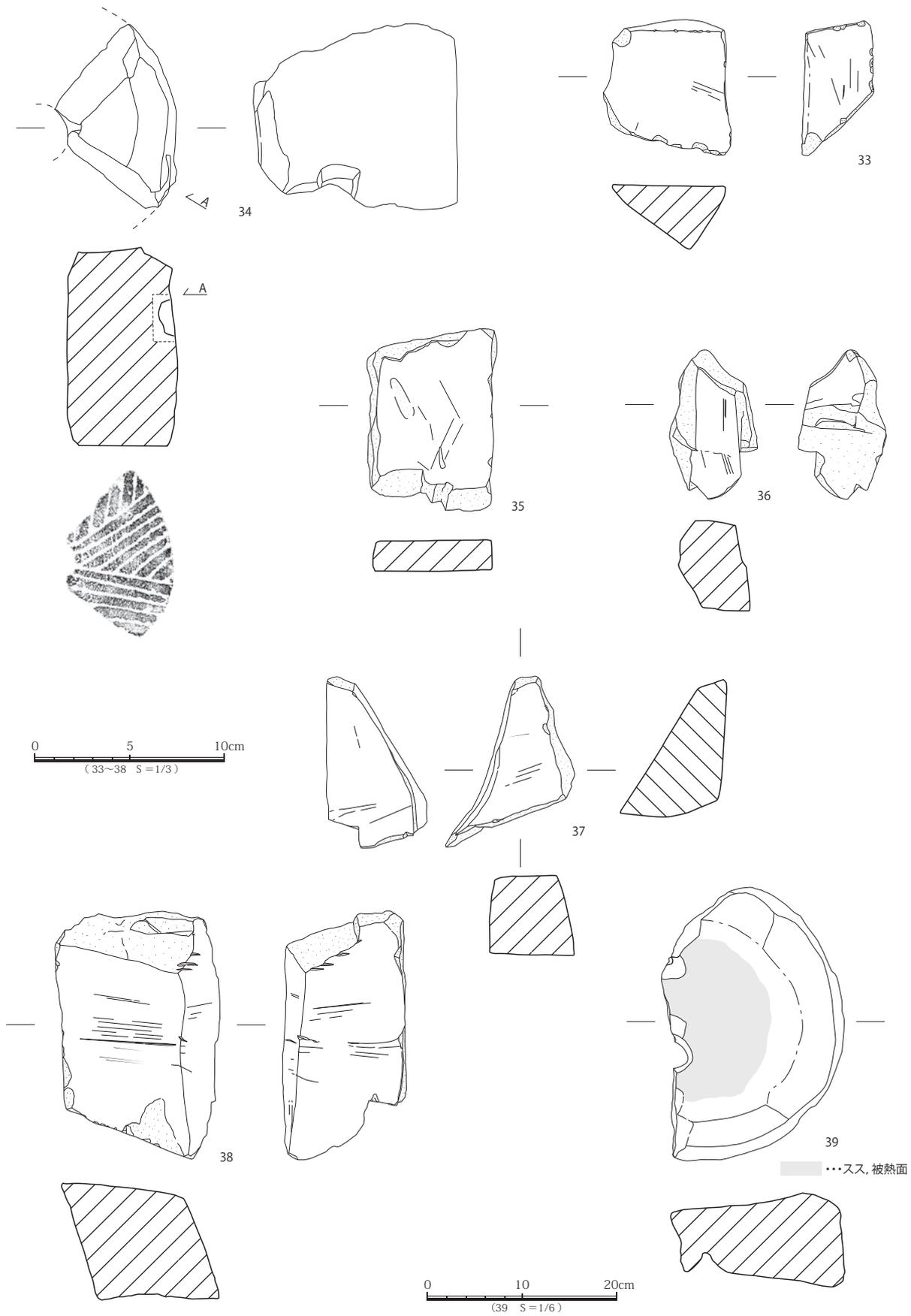
第 45 図 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)



第46図 出土遺物実測図(5) (22・23はS=1/6, 他はS=1/3)



第 47 図 出土遺物実測図 (6) (28・31・32 は S=1/6, 他は S=1/3)



第 48 図 出土遺物実測図 (7) (39 は S=1/6, 他は S=1/3)

IV まとめ

1 古墳時代

(1) 遺構の時期と特徴について

今回の調査では、集落に関する遺構として竪穴住居跡 5 軒を確認した。(そのうち SH5 は、第 1 次調査で確認されていた SB10 の未調査部分である。) 各住居跡を時期ごとに分類すれば以下のとおりとなる。

- ・古墳時代初頭(Ⅲ-1期) SH2
- ・古墳時代前期前半(Ⅲ-2期) SH1・SH4・SH5(SB10)

SH3 は、遺構に直接ついた土器がなかったため明確な時期は決定できなかったが、埋土中からは小形精製土器の高坏が出土しており、下限は古墳時代前期前半と見てよいであろう。

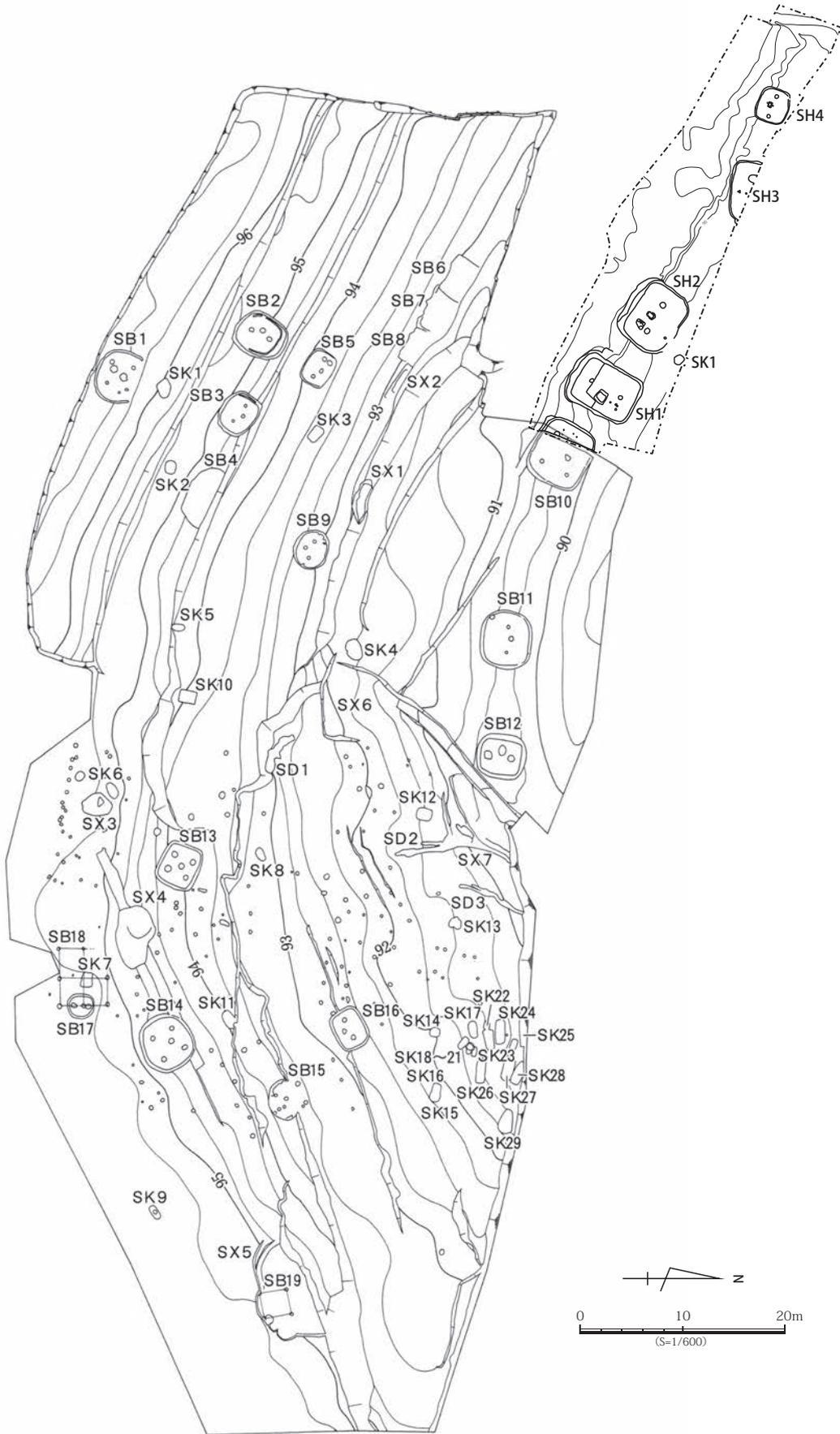
各住居跡の形状・構造は、SH1・SH2・SH4 の 3 軒は、いずれも平面形状が隅丸長方形で二本柱の上屋構造を持つ。また SH3 は、部分的な調査に留まったため確認は出来なかったが、南側壁面と柱穴中央との距離が 2m を超えていることから考えれば、前述の 3 軒同様の 2 本柱構造であった可能性が高い。2 本柱を前提に SH3 を復元すれば、長軸長 6m、短軸長 4.2m 程度で、ほぼ SH2 と同等の規模・形状である。なお SH5(SB10) は、第 1 次調査で確認された部分と併せ 4 本柱の上屋構造を持ち、平面形状が隅丸長方形であることを確認した。今回の調査で確認した住居跡 5 軒のうち、4 軒が 2 本柱の上屋構造であることは、後述のとおり本遺跡全体の大きな特徴である。

2 本柱構造の SH1, SH2, SH4 の床面では、柱穴の間を中心に被熱による赤変が広範囲にわたって認められた。この赤変は地中 10cm 以上まで及んでおり、高温かつ長期間にわたって熱が加えられた様子を窺わせる。また SH1・SH2 の床面は、基盤層を掘り込んで上下二段に形成されていたが、SH1 では上段においても赤変が認められた。加えて、SH1 からは床面に接して磨耗した石や被熱した台石が、SH2 からは鉄器が出土した。これらのことを総合すれば、2 本柱の住居跡は、例えば鍛冶工房のような、通常の住居とは異なる性格を持っていた可能性が考えられる。

(2) 集落の構成と変遷

第 1 次調査の成果を含め、塔之原遺跡全体を通して集落の構成と変遷を考える。第 1 次及び今回の調査で確認された全ての遺構の位置を示したのが第 49 図である。

まず今回の調査によって新たに確認された SH1～SH4 を見ると、概ね標高 90m の等高線に沿うように位置している。さらに標高 90m の等高線を SH1 の東にたどれば、第 1 次調査で確認された SB10(SH5)・SB11・SB12 が連続して位置している。また、これらの住居跡の長軸線は、いずれも等高線にほぼ平行もしくは直交している。このような共通性は、この住居群の建築にあたって、等高線を基礎とする何らかの規準が存在していたことを推定させる。この規準の存在を前提に他の建物の配置を見れば、概ね標高 95m 前後に位置する SB1～SB5, SB13～SB15, SB17 と、概ね標高 93m 前後に位置する SB6～SB9, SB16 に区分できる。



第 49 図 集落遺構配置図

ただし調査範囲のほぼ中央、東西約 30m・標高約 92m～96m の範囲では建物跡が全く確認されていない。本遺跡は後世の地形改変が著しいが、当該範囲の両端に位置する SB3・SB4 や SB13、その中央に位置する SK5（縄文時代の落とし穴と考えられる）の遺存状況を考えれば、竪穴住居跡が完全に消滅するほどの削平は考えにくい。よって、そもそも当該範囲は住居等が存在していない、広場的な空間であったと考えられる。また、その北東には墳墓群が形成されており、墓域と居住空間は区別されていたと推定されている¹⁾。

以上から本集落跡は、建物の建築にあたっては概ね標高 95m・93m・90m の等高線を基準とし、それらが墓域とその南側に連続するに広場によって東西に大きく二分されるプランを持っていたと推定される。

なお、未完掘の SH3 やその北側の地形を考えれば、集落の範囲はさらに北側に広がっていた可能性を指摘しておきたい。

次に、住居跡等を時期ごとにまとめたものが第 7 表である。（第 1 次調査の各建物の想定時期は報告書による。）

第 7 表 塔之原遺跡竪穴住居跡の時期

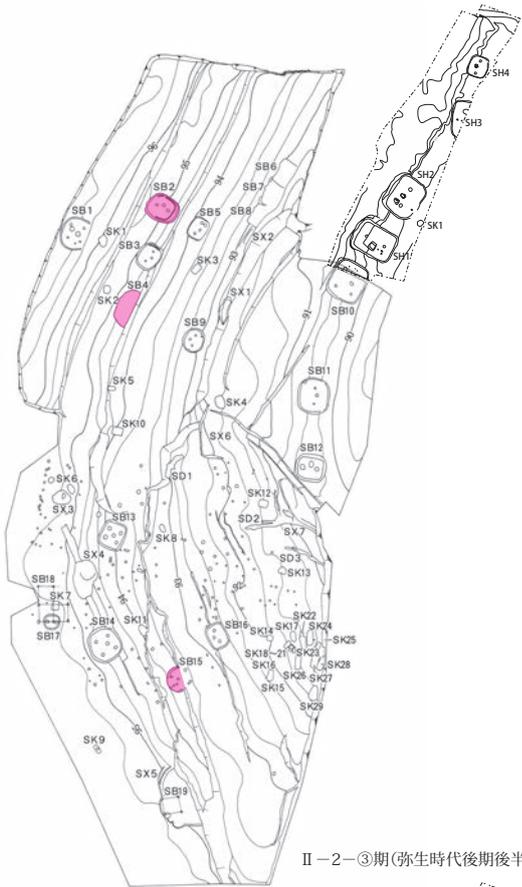
時期		遺構
弥生時代後期後葉	Ⅱ-2-③	SB2,SB4,SB15
弥生時代終末	Ⅱ-3	SB1,SB5,SB7
弥生終末～古墳初頭	Ⅲ-1	SB3,SB6,SB11,SB16
古墳時代初頭		SB8,SB9,SB12,SB13,SB17,SH2
古墳時代前期前半	Ⅲ-2	SB10(SH5),SB14,SH1,SH4

第 1 次調査の段階では、概ね弥生時代後期後葉に最初の住居跡が出現し、以降古墳時代初頭まで継続的に 4 軒前後の建物からなる集落跡が営まれていたと推定された。しかし、今回の調査で確認された 4 軒の住居跡が加わったことで、古墳時代初頭期には少なくとも 6 軒の建物が存在していたことが明らかになった。さらに、第 1 次調査の際に弥生時代終末～古墳時代初頭と推定された 4 軒も、床面から出土した土器、もしくは埋土中でも新しい土器を基準にすれば、下限の古墳時代初頭に位置づけたい。

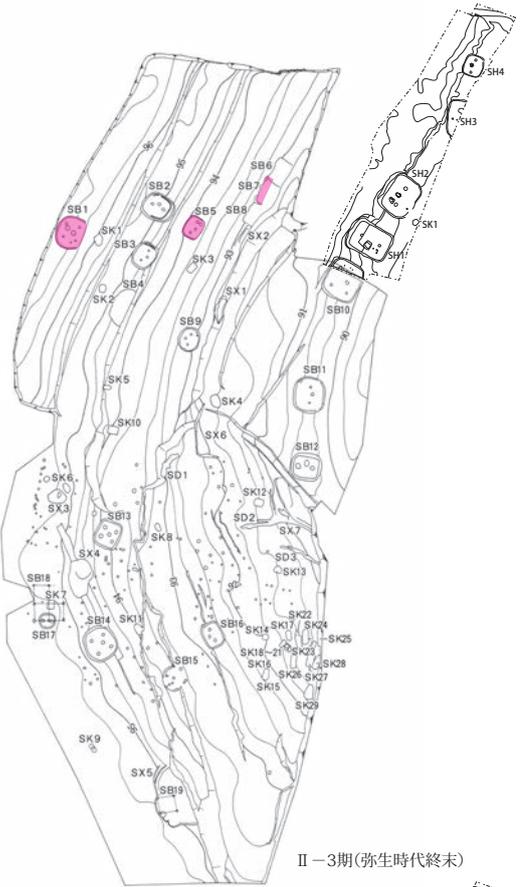
以上を踏まえ、集落の変遷を推定したのが第 50 図である。

本遺跡の形成期は弥生時代後期後半で、3 軒程度の建物が集落西側の標高 95m 群に現れる。この状況は弥生時代終末まで続くが、古墳時代初頭に建物数は急速に増加し、集落西側の標高 93m 前後の群と標高 90m 前後の群と、東側のグループが形成される。この時期が集落の最盛期で、少なくとも 6 軒、最大で 11 軒前後の建物が営まれる。続く古墳時代前期前半期にも西側 90m グループに 3 軒、東側に 1 軒が加わるが、この時期を過ぎると、調査範囲内から急速に建物群の姿が消える。

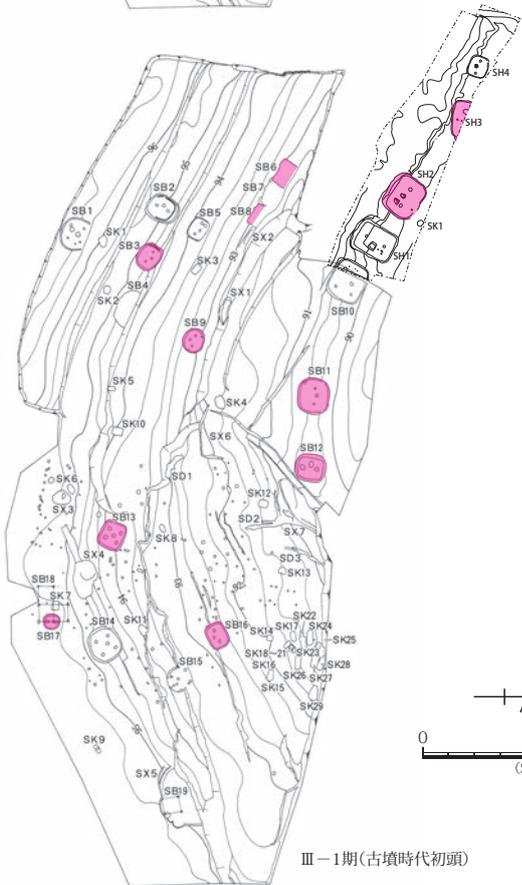
ところで、東側の建物群は比較的新しい SB14 や SB17 が標高の高い場所に位置するなど、西側とはやや異なる様相を示す。これは、集落の中心が西側にあり、東側は派生的な存在であったことを表している可能性がある。



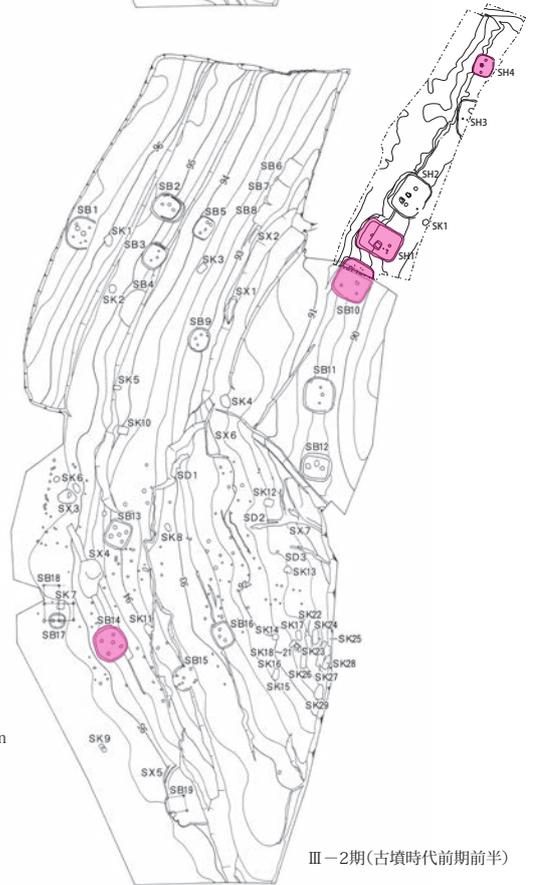
II-2-③期(弥生時代後期後半)



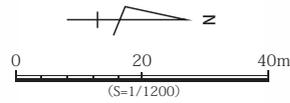
II-3期(弥生時代終末)



III-1期(古墳時代初頭)



III-2期(古墳時代前期前半)



第 50 図 集落遺構変遷図

(3) 二本柱竪穴住居跡について

今回の塔之原遺跡の発掘調査によって新たに確認された竪穴住居跡4軒²⁾のうち3軒が2本柱住居跡である。また未完掘のSH3も、柱穴と壁面との距離等から考えれば2本柱構造の可能性が高い。第1次調査と併せると、本遺跡全体で確認された竪穴住居跡17軒(SB4・SB6～SB8は明確な柱穴が確認されていないため、竪穴“住居”からは除いた)のうち最大12軒が2本柱住居跡で、率にして70%を超える。

広島県全域で確認された、弥生時代から古墳時代の2本柱住居跡は第10表のとおりで、100以上の遺跡から計290軒が確認されている³⁾。このうち、広島市域で確認されたものは、本遺跡を除き10遺跡合計20軒である。広島市域で確認された全ての竪穴住居跡は41遺跡350軒であることから⁴⁾、2本柱住居跡の住居跡全体に占める割合は5.7%である。また、2本柱住居跡が確認された10遺跡に限ってみても、住居跡の総数は129軒で、2本柱住居跡の割合は平均15.5%にすぎない。したがって70%を超える本遺跡は、極めて特異な状況といえる。

広島県全域に目を向ければ、東広島市域や庄原市・三次市域に多く分布することがわかる。特に塔之原遺跡同様10軒以上の2本柱住居跡が確認された遺跡は、東広島市高屋町地区西本遺跡群(15軒：弥生時代中期～後期)・浄福寺遺跡群(15軒：弥生時代後期を中心とする)、東広島市西条地区下上戸遺跡(10軒：弥生時代中期後半)、庄原市木戸地区和田原遺跡群(24軒：弥生時代中期後半を中心とする)、三次市三良坂地区和知白鳥遺跡(15軒：古墳時代中期～後期)である。本遺跡の12軒は県内でも多い部類に入る。また、時期は弥生時代中期後半～後期、もしくは古墳時代中期以降のものが大半を占める。本遺跡が属する弥生時代終末～古墳時代前期に限れば、広島市域で8遺跡9軒が、広島県全域(広島市域を除く)でも8遺跡12軒が該当するにすぎない。

以上のように、本遺跡で確認された2本柱住居跡は、軒数、全住居跡に占める割合、時期のいずれにおいても県内の他の遺跡とは異なる様相を示している。第1次調査では吉備系の土器も出土していることも併せて考えれば、今後は県外の類例などより視野を広げた検討が必要である。

(4) 中央土坑について

今回の調査で確認された竪穴住居跡のうち、完掘されていないSH3を除く全ての住居跡の床面中央付近で土坑(以下、他の遺跡との比較のため、便宜的に「中央土坑」と呼ぶ。)を確認した。これらの中央土坑は、第1次調査においても各住居跡から確認されており、炉跡ではなく作業土坑の可能性があること、2本の主柱穴を結ぶ線の左右いずれかに偏在し、出現頻度の高さは広島市域では特異な存在であることなどが指摘されている⁵⁾。

今回の調査では、中央土坑の構造と性格、住居本体との関係性に関する新たな知見を得た。これを踏まえて土坑を主体に考察を行う。

① 土坑の構造と機能について

今回の調査で確認された3基の中央土坑は、いずれも平面形状は概ね整った長方形の二重土坑である。土坑壁面もしくは埋土中に著しい被熱層や炭化物層が認められず、灰をかき出した痕跡も認められないため、炉跡ではなかったと考えられる。

このうち SH1 中央土坑は 3 基中最大規模で、埋土は 7 層に分層でき、一次坑の大半と二次坑の上 1/3 を占める上層群と、二次坑の下 2/3 を占める下層群に大別できる。(第 6・7 図参照) このうち上層群を構成する第 1 層～第 4 層は、概ね断面は U 字状に堆積している。SH1 埋土と連続する土層断面は設定できなかったが、土色・土質を比較すれば、SH1 床面直上に堆積する第 16 層(明褐色土)と土坑第 4 層(鈍い褐色土)が共通する。この第 4 層には、数ヶ所の断絶や厚みの顕著な変化が認められた。本土坑程度の規模であれば、自然に埋没した場合このような不連続性は考えにくく、実際第 4 層の上に堆積した第 1 層・第 2 層はそれぞれ連続した層となっている。第 4 層の不連続性と、一次坑の存在と形状を併せて考えれば、本土坑は一次坑に木蓋をのせた木蓋土坑であった可能性が高い。SH1 廃棄後床面上に堆積した第 16 層が、木蓋の腐朽とともに不等沈下し土坑第 4 層となったと考えれば、不連続性も説明が可能である。

二次坑の大半を占める下層群は、土坑中央に第 6 層が、四壁に接して第 7 層が位置し、その境界はほぼ垂直に立ち上がっている。本土坑は土石流堆積物層を掘り込んでいるため、壁面及び底面に角礫が露出しており平滑ではない。第 7 層はその間を埋めて表面を平滑に整えた層であろう。したがって本来の二次坑として使用されたのは第 6 層が占める部分に相当し、その規模は、D 断面で 28cm 前後、E 断面で 38cm 前後と推定される。

また、本土坑を木蓋土坑と仮定すれば、一次坑壁面及び壁面に接して位置する第 5 層は、木蓋と掘り方との隙間の埋め土と考えられる。本層は、断面 D - D' では一次坑底面上に位置し、二次坑上端より内側にははみ出さない。一方、断面 E - E' では二次坑上端よりも内側に張り出し、第 6 層と第 7 層の境界まで達する。以上から、木蓋は断面 D - D' を長軸方向として、概ね長さ 90cm 幅 40cm 程度と推定される。

一方、SH2・SH4 の中央土坑は埋土を分層することはできなかった。しかし、一次坑はどちらも平面形状が整った長方形で、壁面はほぼ垂直、四隅は直角に近い明確なコーナー状に掘り込まれていた。あたかも一枚板がぴったりはまり込んでいたかのような形状から考えれば、SH1 同様、木蓋土坑であった可能性は高い。また、二次坑の長辺/短辺/一次坑底面からの深さを比べれば、SH2 : 40cm / 27cm / 20cm, SH4 : 32cm / 24cm / 35cm である。SH1 の実際の二次坑と推定する第 6 層の規模は 38cm / 28cm / 42cm で、3 基に大差が無いことがわかる。

以上から、確認できた 3 基の中央土坑は、いずれも木蓋土坑であったと推定できる。その用途は、何らかの収納に使われたものと思われる。また、推定される木蓋の規模は、長さは差異があるが幅は 30 ~ 40cm, また二次坑の平面形状は長方形で、長辺 32 ~ 40cm, 短辺 24 ~ 28cm に収まる。これらの数値は、一次坑の規模にかかわらず、実際に使用できた土坑の収納空間が同じような規模であったこと、換言すれば収納物が同じような大きさだったことを示している。

次に、土坑が付随する竪穴住居跡との関係を見ると、以下の共通性が認められる。

- a 土坑は、支柱穴を結ぶ軸線のほぼ中央からややずれた場所に位置する。柱穴と土坑の相対的な位置を考える指標として、軸線と土坑中心との距離と柱間隔の比(以下、離軸率と呼ぶ)を比較すれば、SH1 = 0.24, SH2 = 0.1, SH4 = 0.2 である。ただし SH2 で本来建築者が意図したのが土坑南側の掘り方の位置とするならば、離軸率は 0.2 となり 3 軒ともほぼ一致する。

b 住居跡の床面中央部には焼土面が形成され、土坑はすべてこの焼土面を切っている。この焼土面は、赤変が地中 10cm 以上に及んでいることが土坑壁面で観察され、高温かつ長期間にわたる被熱によって形成されたと考えられる。したがって、土坑の形成は住居が建築されてから一定期間を経て行われたと推定される。

これらのことは、土坑そのものの形状・構造や機能だけでなく、土坑が住居の構造全体のなかでどこに造られたのか、また住居の建築から廃棄までのどの段階で作られたのかという、住居全体における中央土坑の空間的・時間的位置づけに、高い共通性・規則性が存在していたことを示している。

② 塔之原遺跡（第 1 次）との比較

第 1 次調査では、8 軒の 2 本柱竪穴住居跡のうち 7 軒で中央土坑が確認されている。これらの土坑について、今回の調査で得られた共通事項と比較したのが第 8 表である。

形状は円形基調のものと方形基調のものが混在し、二重土坑状のものは SB9 の楕円形の 1 件だけで、形状による規則性は認められない。また埋土の堆積状況も含め、木蓋を想起させる記録はない。一方、規模や深さは SH1 の二次坑もしくは SH2・SH3 の一次坑とほぼ同程度であり、壁面もほぼ垂直かやや上に開く状態であるなど、似通った面も認められる。土坑壁面もしくは埋土中に著しい被熱層や炭化物質層が認められるものはなく、炉跡とは考えにくいことも共通する。

竪穴住居跡本体とのかかわりについては、既に第 1 次調査において、2 本の主柱穴を結んだ線の左右いずれかに偏在することが指摘されている。改めて柱との位置関係を離軸率で見ると 0.24 を平均に概ね 0.2～0.3 の範囲に収まり、今回の調査で得られた数値と近似である。また床面中央に焼土が存在する場合、第 1 次調査ではこれを避けるように中央土坑が存在すると捉えられたが、今回の調査の成果をもとに見直せば、焼土と土坑が重複する SB2・SB3・SB5・SB12・SB16 の全てにおいて、焼土を土坑が切っていると捉えられる。

以上、第 1 次調査及び今回の調査を併せた塔之原遺跡全体で、確認された 2 本柱竪穴住居跡 11 軒中 10 軒に中央土坑が付随し、遺跡全体を通して高い共通性が認められることが明らかになった。特に、離軸率が概ね 0.2～0.3 の範囲に収まること、床面中央の焼土面と重複する場合土坑が後出することは、土坑の選地が、例えば焼土を避けるといった受身の理由ではなく、より積極的な意図と規則性のもとに行われたことを示唆している。また焼土の状況から、土坑の設置時期は住居建築

第 8 表 塔之原遺跡第 1 次調査 中央土坑を持つ竪穴住居跡観察表

住居跡	形状	規模 (cm)	深さ (cm)	離軸率	焼土	炉跡痕跡
SB2	隅丸方形	50 × 50	32	0.22	切る	なし
SB3	長方形	40 × 32	26	0.25	切る	なし
SB5	楕円形	44 × 32	42	0.2	切る	なし
SB9	楕円形 (二重土坑)	一次坑 52 × 42	25	0.35	焼土の外	なし
		二次坑 36 × 32				
SB11	円形	54 × 50	18	0.16	焼土なし	なし
SB12	長方形	84 × 47	31	0.28	切る	なし
SB16	長方形	42 × 37	24	0.28	切る	なし

後一定期間を経た後と考えられることは、住居の使用に関して一定の推移があることを示唆している。

なお機能については、作業用土坑の可能性もあるが、一部は木蓋土坑であったことを前提にすれば、収納用であった可能性が高い。しかし、収納物の内容や意図については不明である。

③ 県内の方形二重土坑について

広島県内において、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡に伴う土坑のうち、二重土坑は第9表のとおりである⁹⁾。このうち平面形状が長方形の二重土坑は、三次市油免遺跡 SB27・SB37（以上弥生時代終末）・SB60（古墳時代初頭）、庄原市竜王堂遺跡 SB8・SB14・SB15（いずれも古墳時代初頭）、同則清2号遺跡 SB1（古墳時代中期）にそれぞれ付随する土坑などがある。概ね時期は古墳時代初頭以降、分布は県北部域といった傾向が見られる。また、住居跡内の位置を理由に炉跡と報告される例が多いが、実際には土坑内に明確な焼土面や炭化物層を伴う例は無いため、炉跡以外の使われ方をした可能性は十分にある。しかしながら、例数が少なく、比較検討するにはいたらなかった。

これまで調査された膨大な数の土坑数を考えれば、二重土坑の類例の少なさは、その特殊性を物語っていると言えよう。

第9表 広島県内弥生時代～古墳時代 二重土坑一覧表

単位は全て cm

遺跡名	遺構名	形状等	時期	土坑										文献
				位置	形状	上段長さ	上段幅	上段深さ	下段長さ	下段幅	下段深さ	埋土等	性格	
油免	SB60	方形4本柱	古墳初頭	中央ややずれ	長方形	85	60	11	57	37	25		炉?	1
油免	SB27 ～29		弥生終末	中央	長方形	140	95	26	69	44	43	炭化物含む	炉?	1
油免	SB37	方形4本柱	弥生終末	壁際	長方形	170	120	20	88	78	22		?	1
油免	SB17	円形6本柱	古墳中期	中央	円形	125	115	20	80	63	54	暗褐色粘質土	?	1
大谷	SB46	円形	弥生終末	中央	円形	67	61	15	35	25	7		?	2
則清2号	SB1	円形2本柱	古墳中期	壁際	長方形	75	45	2	45	25	27		木蓋土坑	3
竜王堂	SB8	方形4本柱	古墳初頭	中央	長方形	80	45	13	70	35	36		炉?	4
竜王堂	SB14	方形4本柱	古墳初頭	中央	長方形?	?	?	25	45	25	20	炭化物含む	炉?	4
竜王堂	SB15	方形4本柱	古墳初頭	中央ややずれ	長方形	100	60	6	60	35	45		炉?	4
割谷	SB13	円形2本柱	弥生終末	柱穴間	円形	62	58	12	34	32	14		?	5
古市4号	F4-01	方形4本柱	古墳前期	中央	円形	96	96	12	66	55	20	上層に焼土面	炉	6
浄福寺2号	SB36	円形6本柱	弥生終末	中央	円形	90	80	15	48	48	30		?	7

※土坑の性格 炉＝焼土・炭化物層を含み炉跡の可能性の高いもの
 炉?＝位置等から炉跡と推定されているもの
 ?＝焼土・炭化物層を伴わず、炉跡とは考えられないもの

④ 県内の2本柱竪穴住居跡に付随する中央土坑との比較

2本柱竪穴住居跡と中央土坑については、4本以上の柱を持つ竪穴住居跡とは、性格や出自が異なる可能性が指摘されており⁷⁾、広島県内の事例に限っても様々な検討が行われている⁸⁾。既に見て

きたように、塔之原遺跡の2本柱竪穴住居跡と中央土坑は、住居内における土坑の位置や設置時期に明確な規則性がある。それは住居の構造・性格や使用履歴にかかわるものであり、概念として土坑の個別の形状より上位に位置すると考えた。この規則性を視点に、県内の他の2本柱住居とこれに伴う中央土坑と比較する。

第10表のとおり、広島県内で確認された2本柱竪穴住居跡290軒のなかで、中央土坑を持つものは193軒である。そのうち支柱穴を結んだ軸線上に位置する土坑が163基、残りが軸線からやや外れて位置する土坑で、塔之原遺跡のものを除けば20基である。

軸線から外れた土坑のうち、焼土や多量の炭化物などの痕跡から明らかに炉跡と考えられるのは、広島市長尾遺跡SH2、段之原山遺跡SH3、東広島市志村遺跡SB2、浄福寺遺跡住居跡、西本6号遺跡SB48、徳政遺跡7号住居跡、三次市和知白鳥遺跡SB14・SB15・SB31・SB36、北広島町京野遺跡SB30である。また、炉跡以外の可能性があるもののうち、土坑の深さが10cm前後と浅く収納機能を満たさないとされるものは、広島市城ノ下A地点遺跡第4号住居跡、段之原山遺跡SH4、東広島市西本6号遺跡SB28、庄原市大成遺跡SB34、和知白鳥遺跡SB29、高峰遺跡SB5、京野遺跡SB29である。以上の土坑は塔之原遺跡との関連性が薄いと見てよいであろう。

残る東広島市金平山遺跡SB10、三次市高峰遺跡SB6である。両者ともに平面形状は円形で、規模は塔之原遺跡のものと同様である。離軸率は金平山例が0.13、高峰例が0.28で、前者は0.2を大きく下回っている。また時期は、それぞれ弥生時代中期後半、古墳時代中期である。あえて言えば高峰例の類似性が高いが、いずれも集落内で単発的であることや、属する住居跡の構造まで含めて考えれば、塔之原遺跡との関連性は不明といわざるを得ない。

以上のように、中央土坑に関しても、広島県内には塔之原遺跡との直接的な関連性をうかがわせる事例は確認できず、むしろこの集落の特異性を補強する結果となった。その要因が集落内に留まる単なる地域性なのか、あるいは瀬野川流域のみならず、広島圏域を超えた外部地域との関係に起因するものか、引き続き調査研究が必要であろう。

注

- 1) (財)広島県教育事業団『塔之原遺跡 一般国道2号改築工事(安芸バイパス)に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書』2006
- 2) SH5はSB10と同一であるため除く。
- 3) 2014年度までに報告された広島市及び当財団実施分。試掘等は除く。
- 4) 2014年度までに報告された当財団所蔵の報告書による。広島県内の2本柱竪穴住居跡は、弥生時代を中心としたものは植谷遺跡(報告書98)杉谷遺跡(報告書96)で、古墳時代のものは和知白鳥遺跡(報告書86)の報告書で集成が試みられている。本書は中央土坑を考察の切り口としていることから、これら既存の集成も含め作成している。
- 5) 1に同じ
- 6) 2014年度までに報告された当財団所蔵の報告書による。
- 7) 中間研志「松菊里型住居—我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』同朋社 1987年
石野博信「西日本における弥生中期の二つの住居」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館 1993年
- 8) 報告書96・98

第10表 広島県内弥生時代～古墳時代2本柱竪穴住居跡集成表

規模の単位は m, 中央土坑深さの単位は cm, () は復元値, - は不明

地域	場所	遺跡名	遺構名	平面形	規模			中央土坑				時期	文献
					長	短	柱間隔	位置	形状	深さ	機能		
安芸 南部	広島市	国重城跡	第2号	隅丸方形	4.8	4.4	2.5	中央	方形	20	炉	古墳初頭	1
		芳力谷	第3号	隅丸長方形	3.6	2.8	2.6	-	-	-	-	弥生終末	2
		毘沙門台東	A-1	楕円	4.0	3.0	1.9	中央	方形	7	?	?	3
		毘沙門台東	B-3	方形	3.0	2.2	2.2	-	-	-	-	?	3
		毘沙門台東	B-4	楕円	3.6	3.1	1.9	-	-	-	-	古墳初頭	3
		毘沙門台東	B-13	隅丸長方形	-	-	1.6	-	-	-	-	後期中葉	3
		下沖5号	第9号	円形	3.8	3.8	1.9	中央	長方形	15	炉	後期中葉	4
		下沖5号	第12号	隅丸方形	2.7	-	1.4	-	-	-	-	?	4
		下沖5号	第14号	隅丸長方形	4.0	2.5	2.2	-	-	-	-	後期前半	4
		黒谷	第5号	隅丸方形	4.4	4.0	2.6	中央	方形	20	?	古墳初頭	5
		長尾	SH1	隅丸長方形	4.8	3.7	1.4	-	-	-	-	古墳初頭	6
		長尾	SH2	隅丸方形	3.7	3.7	1.9	軸外	長方形	11	炉	?	6
		大町七九谷	A-SH1	方形	4.2	4.0	1.8	-	-	-	-	古墳初頭	7
		大町七九谷	A-SH6	長方形	4.5	4.0	2.4	-	-	-	-	古墳初頭	7
		城ノ下A	第1号	長方形	5.0	3.0	2.0	-	-	-	-	後期中葉	8
		城ノ下A	第2号	長方形	4.0	2.5	2.0	-	-	-	-	後期中葉	8
		城ノ下A	第4号	円形	3.8	3.8	1.7	軸外	楕円	11	?	古墳初頭	8
		高陽台A	1	円形	4.0	-	2.5	-	-	-	-	後期中葉	9
		段之原山	SH3	隅丸長方形	4.0	3.0	1.8	軸外	不整形	17	炉	古墳初頭	10
		段之原山	SH4	隅丸長方形	2.8	1.6	1.0	軸外	長方形	10	炉	後期後半	10
		塔ノ原1	SB2	隅丸長方形	5.2	4.3	2.0	軸外	円形	32	?	後期後半	11
		塔ノ原1	SB3	隅丸長方形	4.2	3.6	1.9	軸外	長方形	26	?	後期末	11
		塔ノ原1	SB5	隅丸長方形	3.5	2.9	2.0	軸外	楕円	42	?	後期末	11
		塔ノ原1	SB9	楕円	3.9	3.2	1.7	軸外	円形	25	?	古墳初頭	11
		塔ノ原1	SB11	隅丸長方形	5.7	5.0	2.5	軸外	円形	18	?	古墳初頭	11
		塔ノ原1	SB12	隅丸長方形	4.5	4.0	2.2	軸外	長方形	31	?	後期末	11
		塔ノ原1	SB16	隅丸長方形	4.1	3.2	2.0	軸外	長方形	24	?	後期末	11
		塔ノ原1	SB17	楕円	2.5	2.3	1.5	-	-	-	-	古墳初頭	11
		塔ノ原2	SH1	隅丸長方形	6.0	4.5	3.3	軸外	方形	58	?	古墳前期前半	本書
		塔ノ原2	SH2	隅丸長方形	6.2	4.6	3.0	軸外	長方形	29	?	古墳初頭	本書
塔ノ原2	SH4	隅丸長方形	3.3	2.9	2.1	軸外	方形	40	?	古墳前期前半	本書		
東広島市 高屋	高屋	志村	SB2	隅丸方形	4.9	4.9	1.9	軸外	円形	5	炉	後期後半	12
		宮領1号	SB1	円形	7.5	7.5	1.1	中央	楕円	20	炉	中期後半	13
		宮領1号	SB2	楕円	6.6	6.0	1.4	中央	楕円	25	炉	中期後半	13
		宮領1号	SB3	長方形	3.2	2.0	1.4	-	-	-	-	中期後半	13
		胡麻5号	SB3	隅丸方形	4.5	4.5	1.3	中央	楕円	30	炉	後期後半	14
		胡麻5号	SB4	長方形	2.6	2.2	0.9	中央	楕円	7	炉	後期後半	14
		胡麻5号	SB6	長方形	3.0	2.0	1.4	中央	楕円	7	炉	後期中葉	14
		浄福寺	住居跡	長方形	4.7	3.6	1.2	軸外	楕円	4	炉	古墳中期	15
		浄福寺1号	SB3	隅丸長方形	2.6	2.2	0.7	中央	楕円	10	?	後期中葉	16
		浄福寺1号	SB14	隅丸方形	4.0	(4.0)	2.1	-	-	-	-	古墳中期	16
		浄福寺1号	SB36 b	長六角形	7.8	6.0	1.8	中央	円形	30	炉	後期中葉	16
		浄福寺1号	SB41	隅丸方形	3.1	2.6	1.5	-	-	-	-	後期初頭	16

地域	場所	遺跡名	遺構名	平面形	規模			中央土坑				時期	文献	
					長	短	柱間隔	位置	形状	深さ	機能			
安芸 南部	東広島市 高屋	浄福寺2号	SB7	隅丸方形	3.5	2.8	2.1	中央	長方形	6	?	後期中葉新	17	
		浄福寺2号	SB15a	円形	3.9	3.9	1.9	中央	円形	36	炉	後期中葉新	17	
		浄福寺2号	SB16 b	楕円	7.2	6.2	1.7	中央	楕円	23	炉?	後期中葉新	17	
		浄福寺2号	SB20	方形	5.0	4.9	1.4	中央	楕円	20	?	中期	17	
		浄福寺2号	SB27	楕円	7.4	7.2	1.8	中央	不整円形	10	炉	後期中葉新	17	
		浄福寺2号	SB30	長方形	3.5	2.4	1.3	中央	円形	5	?	後期中葉新	17	
		浄福寺2号	SB49	隅丸長方形	4.2	2.8	2.1	中央	円形	26	?	後期中葉新	17	
		浄福寺2号	SB53	方形	3.1	2.8	1.0	中央	円形	9	炉	古墳初頭	17	
		浄福寺2号	SB55	長方形	5.4	4.2	2.9	-	-	-	-	-	古墳時代	17
		浄福寺2号	SB78	隅丸方形	3.5	3.1	1.4	中央	円形	16	炉	後期中葉古	17	
		浄福寺2号	SB86	円形	4.0	4.0	2.5	中央	円形	43	炉?	後期中葉古	17	
		西本第1B	SB3a	隅丸方形	4.6	4.6	1.0	中央	不整円形	16	炉	後期前半	18	
		西本2号	SB3	方形	4.4	4.1	1.2	-	-	-	-	-	古墳初頭	19
		西本6号(市)	SB3	方形	4.2	4.2	1.4	中央	円形	20	?	後期?	20	
		西本6号(市)	SB10	円形	9.0	8.5	2.0	-	-	-	-	-	後期前半	20
		西本6号(市)	SB12	円形	7.2	7.2	1.4	中央	楕円	10	炉	後期前半	20	
		西本6号(県)	SB8	円形	3.6	3.6	0.9	中央	不整形	22	炉	中期前葉	21	
		西本6号(県)	SB10	円形	6.3	5.6	1.1	中央	不整形	15	炉	中期前葉	21	
		西本6号(県)	SB11	円形	6.5	6.5	1.0	中央	方形	19	炉?	中期前葉	21	
		西本6号(県)	SB13	方形	4.2	3.6	1.1	中央	円形	11	炉	中期中葉	21	
	西本6号(県)	SB14	円形	5.5	5.5	1.1	-	-	-	-	-	中期前葉	21	
	西本6号(県)	SB23	隅丸長方形	4.3	3.4	1.4	中央	長方形	13	?	中期後葉	21		
	西本6号(県)	SB28	円形	3.5	3.5	1.4	軸外	不整円形	13	?	後期中葉	21		
	西本6号(県)	SB32	円形	7.2	7.2	1.7	中央	不整円形	-	炉	後期中葉	21		
	西本6号(県)	SB46	方形	5.0	5.0	1.6	中央	楕円	8	炉	中期後葉	21		
	西本6号(県)	SB48	楕円	3.2	2.9	1.6	軸外	不整楕円	7	炉	後期前葉	21		
	福岡山3号	1	不整円形	5.0	5.0	0.9	中央	円形	?	?	?	中期	22	
	高屋東2号・3号	SB3	円形	3.6	3.6	1.3	中央	楕円	10	炉	後期初頭	23		
	高屋東2号・3号	SB5	円形	4.5	4.0	1.2	中央	楕円	20	?	後期前半	23		
	高屋東2号・3号	SB6	円形	5.4	5.1	1.4	-	-	-	-	-	?	23	
	高屋東2号・3号	SB8	円形	4.3	4.3	1.2	中央	長円	20	?	後期前半	23		
	高屋東2号・3号	SB10	円形	4.0	4.0	1.0	中央	長円	15	炉	?	23		
	原の谷	SB4	方形	2.8	2.8	0.8	-	-	-	-	-	古墳中期	24	
	西8地点	SB1	隅丸方形	3.1	2.6	1.2	-	-	-	-	-	後期後半	25	
	溝口2号	SB3	六角形?	4.2	3.9	1.3	中央	円形	15	?	?	中期	26	
	溝口4号	No1017	円形	6.4	6.0	1.5	中央	楕円	25	炉?	?	中期後半	27	
	東広島市 西条	金平山	SB10	円形	3.2	3.2	1.9	軸外	円形	20	?	?	中期後半	28
		下上戸	SB3	方形	3.5	3.2	1.4	中央	円形	35	炉?	?	中期後半	29
		下上戸	SB1	八角形	5.3	4.7	1.3	中央	円形	20	?	?	中期後半	30
		下上戸	SB2	楕円	5.1	4.8	1.1	中央	楕円	30	炉	?	中期後半	30
下上戸		SB4	方形	4.2	4.2	1.2	中央	円形	20	?	?	中期後半	30	
下上戸		SB6	方形	4.0	3.5	1.2	中央	円形	30	炉	?	中期後半	30	
下上戸		SB7	方形	4.8	4.8	1.2	中央	円形	30	炉	?	中期後半	30	
下上戸		SB8	八角形	5.3	5.2	1.3	中央	円形	23	?	?	中期後半	30	
下上戸		SB9	?	4.0	3.5	1.2	中央	円形	25	?	?	中期後半	30	
下上戸		SB10a	六角形?	6.0	5.5	1.4	中央	円形	-	炉	?	中期後半	30	

地域	場所	遺跡名	遺構名	平面形	規模			中央土坑				時期	文献	
					長	短	柱間隔	位置	形状	深さ	機能			
安芸 南部	東広島市 西条	下上戸	SB10b	六角形?	6.6	5.5	1.4	中央	円形	-	炉	中期後半	30	
		石佛	SB1	隅丸方形	4.0	4.0	1.2	中央	方形	35	炉	?	31	
		石佛	SB9	隅丸火	3.1	3.1	1.3	中央	楕円	20	炉	?	31	
		是石	SB1	方形	4.2	(4.0)	1.8	-	-	-	-	古墳中期	32	
		古市	SB01	長方形	4.4	3.8	1.0	-	-	-	-	中期後半?	33	
		古市2号	F2-01	長方形	6.0	5.0	0.8	-	-	-	-	古墳中期	34	
		助平3号	SB14	方形	3.6	3.2	2.3	-	-	-	-	古墳後期	35	
		助平3号	SB16	方形	4.4	4.2	1.4	-	-	-	-	古墳中期	35	
		助平3号	SB18	長方形	4.5	3.7	1.2	-	-	-	-	古墳中期	35	
		助平3号	SB19a	長方形	5.4	4.0	1.3	-	-	-	-	古墳中期	35	
		助平3号	SB19b	長方形	6.0	5.2	1.5	-	-	-	-	古墳中期	35	
		横田1号	SB17	楕円	3.9	3.6	1.6	中央	円形	25	炉	後期前葉	36	
		横田1号	SB18	円形	4.5	4.1	2.0	中央	不整円形	5	炉	後期後葉	36	
		横田1号	SB22	円形	4.3	4.3	1.7	中央	円形	5	?	後期前葉	36	
		横田1号	SB23	隅丸方形	3.3	3.3	1.0	中央	不整円形	20	炉	後期中葉	36	
		横田1号	SB31	円形	3.8	3.8	1.9	-	-	-	-	後期中葉	36	
			吉光谷	SB16	隅丸方形	3.5	3.0	1.3	中央	楕円	20	炉?	後期前葉	37
			大楨	SB13	長方形	3.8	3.0	1.1	中央	楕円	30	?	後期前葉	38
	東広島市 志和	小越	No7	隅丸長方形	3.0	2.1	1.2	中央	円形	20	?	後期前半	39	
		小越	No22	隅丸方形	2.7	2.7	1.7	中央	楕円	15	炉	後期初頭	39	
小越		No23	楕円	6.2	4.8	1.4	中央	円形	20	炉	中期後半	39		
小越		No24	楕円	6.4	5.0	?	中央	楕円	16	?	中期後半	39		
東広島市 八本松	徳政	3号	方形	3.5	3.5	1.1	-	-	-	-	古墳中期	40		
	徳政	7号	円形	5.2	5.2	1.0	軸外	円形	20	炉	?	40		
東広島市 豊栄	中屋遺跡B地点	SB14	隅丸方形	5.3	4.6	1.9	-	-	-	-	古墳前期	41		
備後 南部	福山市 今津	長波	SB50	円形	5.0	5.0	1.2	中央	円形	30	炉?	中期後半	42	
	福山市 津之郷	サコ田	SB2a	隅丸方形	5.3	5.0	1.4	中央	長方形	20	炉?	後期前半	43	
		サコ田	SB2 c	方形	5.4	5.0	1.1	中央	円形	20	炉?	後期前半	43	
		沢田	SB1	隅丸方形	5.4	5.4	1.5	-	-	-	-	後期後半	44	
		沢田	SB5	隅丸長方形	6.0	5.4	1.4	中央	円形	20	炉	後期後半	44	
	福山市 加茂	吹越	第1号	楕円	4.5	4.0	1.2	-	-	-	-	中期末	45	
	福山市 駅家	長迫	SB1	円形	7.0	6.5	1.4	中央	円形	10	炉?	中期後半	46	
		茜ヶ峠	SB8	円形	6.2	5.5	1.2	中央	楕円	?	炉?	後期前半	47	
		茜ヶ峠	SB28	楕円	6.0	5.0	1.2	中央	楕円	?	炉?	中期末	47	
		石槌権現	SB3	楕円	3.9	3.3	1.2	中央	長方形	15	炉?	中期末	48	
		法成寺本谷古墳	SB1	円形	4.1	4.0	1.2	中央	楕円	40.5	炉?	中期後半	49	
		大塚谷	住居跡	円形	6.4	5.7	1.4	中央	楕円	20	炉	中期末	50	
		地藏堂	1号	円形	6.2	5.2	1.4	中央	不整円形	40	炉	中期末	50	
		手坊谷	2号	隅丸方形	5.0	4.8	1.3	中央	楕円	10	炉?	中期後半	50	
手坊谷		7号 a	楕円	7.0	-	1.5	中央	楕円	40	炉?	中期後半 ～後期前半	50		
手坊谷	7号 b	楕円	5.6	4.8	1.4	中央	楕円	40	炉?	中期後半 ～後期前半	50			

地域	場所	遺跡名	遺構名	平面形	規模			中央土坑				時期	文献	
					長	短	柱間隔	位置	形状	深さ	機能			
備後南部	福山市 駅家	手坊谷	7号c	楕円	7.0	5.8	1.5	中央	楕円	40	炉?	中期後半 ～後期前半	50	
		手坊谷	7号d	楕円	5.4	4.6	1.4	中央	楕円	40	炉?	中期後半 ～後期前半	50	
		手坊谷	12号	楕円	5.2	4.6	1.7	中央	円形	25	炉?	中期後半 ～後期前半	50	
		手坊谷	13号a	楕円	5.9	4.7	1.3	中央	楕円	25	炉?	中期後半 ～後期前半	50	
		手坊谷	13号b	楕円	6.7	6.0	1.5	中央	楕円	25	炉?	中期後半 ～後期前半	50	
		池ノ内	3号	隅丸方形	6.0	5.5	1.4	中央	楕円	15	?	中期後半	50	
		池ノ内	6号	円形	4.0	3.8	1.3	中央	楕円	21	?	中期後半	50	
		池ノ内	22号	隅丸方形	6.5	5.2	1.4	中央	楕円	10	?	中期後半	50	
		池ノ内	23号	隅丸方形	4.6	4.3	1.2	中央	円形	25	炉	中期後半	50	
		池ノ内	24号	楕円	7.1	6.4	1.4	中央	不整形	20	?	中期後半	50	
	池ノ内	33号	楕円	5.0	4.4	1.1	中央	楕円	15	炉?	中期後半	50		
	福山市 新市町	汐首B2区	SB1	隅丸方形	3.5	2.3	1.1	中央	円形	10	?	後期	51	
		汐首B4区	SB1	円形	3.3	3.1	1.4	-	-	-	-	後期	51	
		汐首B5区	SB12	隅丸方形	4.8	4.2	1.4	中央	楕円	30	?	後期	51	
		汐首B5区	SB16	隅丸方形	3.0	2.7	0.9	中央	楕円	10	炉?	後期	51	
	福山市 神辺町	神辺御領	ASB13	円形	5.2	5.2	1.3	中央	楕円	20	炉	中期中葉	52	
		神辺御領	ASB17	円形	5.2	5.2	1.1	中央	円形	20	炉	中期前葉	52	
		神辺御領	ASB22	円形	5.8	5.8	1.5	中央	円形	20	?	中期前葉	52	
		神辺御領	BSB01	円形	5.0	5.0	1.3	中央	楕円	10	?	中期前葉	52	
		大宮	SB1401	隅丸方形	3.8	3.2	1.6	中央	円形	35	炉	中期後半	53	
	三原市	小丸	SB5	方形	4.8	4.6	1.2	中央			炉	後期後半	54	
	尾道市	曾川1号	SB12	隅丸方形	5.8	5.4	1.8	中央	楕円	10	炉?	後期後半	55	
		曾川1号	SB24	方形	3.8	3.6	1.3	中央	楕円	22	?	古墳前期	56	
	世羅郡 世羅町	金井原	SB5	円形	5.4	5.4	1.7	中央	楕円	20	炉	中期前半	57	
		田龍	SB1	円形	4.2	3.8	1.5	-	-	-	-	後期後半	58	
	備後北部	庄原市 木戸	隠地上組	SB5	隅丸方形	4.3	4.3	1.4	中央	円形	30	炉	中期末	59
			宮山2号	SB1d	隅丸方形	5.6	5.4	1.9	中央	楕円	25	炉	中期後半	60
和田原B地点			SB1	隅丸方形	5.2	5.2	2.2	中央	楕円	15	炉?	中期後半	61	
和田原B地点			SB2	隅丸方形	4.6	4.0	?	中央	楕円	30	炉?	中期後半	61	
和田原B地点			SB3	隅丸長方形	3.4	2.2	2.3	-	-	-	-	中期後半	61	
和田原D地点			SB1	円形	6.0	6.0	1.8	中央	楕円	19	炉	中期後半	62	
和田原D地点			SB2	円形	4.2	4.2	1.6	中央	円形	24	炉	中期後半	62	
和田原D地点			SB3	円形	4.2	4.2	1.5	中央	楕円	18	炉	中期後半	62	
和田原D地点			SB8	円形	3.0	3.0	1.2	中央	楕円	8	?	後期後半	62	
和田原D地点			SB17	隅丸長方形	7.0	6.0	1.9	中央	楕円	28	炉	中期後半	62	
和田原D地点			SB18	円形	3.6	3.6	1.0	中央	溝状	10	?	中期後半	62	
和田原D地点			SB19	楕円	7.0	6.0	1.9	中央	不整円形	28	?	中期後半	62	
和田原D地点			SB34	円形	4.2	4.2	2.3	中央	楕円	16	?	後期前半	62	
和田原D地点			SB36	隅丸方形	4.6	4.5	1.8	中央	不整円形	23	炉?	中期後半	62	
和田原D地点			SB38	円形	5.6	5.6	0.9	中央	楕円	16	?	中期後半	62	
和田原D地点			SB41	楕円	7.7	7.2	1.4	中央	長楕円	20	?	中期中葉	62	
和田原D地点			SB42a	円形	5.0	5.0	1.9	中央	長楕円	30	炉	中期後半	62	
和田原D地点	SB45	方形	3.7	3.5	2.0	中央	円形	18	?	中期後半	62			

地域	場所	遺跡名	遺構名	平面形	規模			中央土坑				時期	文献
					長	短	柱間隔	位置	形状	深さ	機能		
備後 北部	庄原市 木戸	和田原 D 地点	SB46a	円形	3.5	3.5	2.2	中央	楕円	22	?	後期前半	62
		和田原 D 地点	SB47	方形	5.9	5.4	1.9	中央	楕円	28	?	中期後半	62
		和田原 D 地点	SB53	円形	3.8	3.8	1.1	中央	楕円	13	?	後期前半	62
		和田原 C 地点	SB1	方形	5.0	4.6	2.1	-	-	-	-	中期後葉 ～後期初頭	63
		和田原 C 地点	SB4	隅丸方形	4.5	4.0	2.2	-	-	-	-	中期後葉	63
		和田原 E 地点	SB3	方形	4.4	4.4	2.0	中央	楕円	22	?	中期末 ～後期初頭	64
		和田原 E 地点	SB5	円形	5.8	5.8	2.1	中央	楕円	16	炉	中期末 ～後期初頭	64
		和田原 E 地点	SB9	隅丸方形	4.0	3.4	1.4	中央	円形	32	?	中期末 ～後期初頭	64
		小和田	SB1	隅丸長方形	4.4	3.5	1.9	中央	円形	10	?	古墳後期	65
		小和田	SB5	方形	?	3.6	1.3	中央	不整形	6	炉	古墳後期	65
		永宗	SB2	隅丸方形	4.4	4.0	2.5	中央	方形	15	炉	古墳前期前半	65
		永宗	SB3	隅丸方形	3.4	3.0	1.8	中央	円形	40	炉	古墳前期前半	65
		小和田二次	SB7	楕円	5.5	5.0	1.6	中央	円形	10	炉	中期末	66
	小和田二次	SB10	方形	4.0	3.5	1.3	-	-	-	?	古墳後期	66	
	庄原市 本村	大原 1 号	第 1 号	円形	5.5	5.0	1.6	中央	-	-	炉?	中期末	67
		大原 1 号	第 2 号	楕円	5.9	4.9	1.5	中央	-	-	炉?	中期末	67
	庄原市 是松	則清 1 号	SB3	隅丸長方形	5.0	3.0	1.9	-	-	-	-	古墳後期	68
		則清 2 号	SB1	長方形	4.9	3.7	1.7	-	-	-	-	古墳中期	68
		則清 2 号	SB2	長方形	4.9	4.0	1.4	-	-	-	-	古墳後期	68
		則清 2 号	SB4	隅丸長方形	4.1	2.4	2.0	-	-	-	-	古墳後期	68
庄原市 掛田	割谷	SB6	方形	(3.8)	3.0	1.2	-	-	-	-	古墳前～中	69	
	割谷	SB9a	方形	(4.7)	4.0	1.4	-	-	-	-	古墳前～中	69	
	割谷	SB9b	方形	5.5	4.5	1.7	-	-	-	-	古墳前～中	69	
	割谷	SB13	円形	4.2	3.9	2.1	中央	円形	20	?	後期末 ～古墳初頭	69	
	割谷	SB17	方形	(3.4)	(2.8)	1.2	中央	円形	30	?	古墳後期	69	
	割谷	SB23	円形	3.3	3.3	1.5	中央	不整円形	40	?	後期	69	
	割谷	SB25	方形	(4.1)	(3.9)	2.4	-	-	-	-	古墳後期	69	
	割谷	SB26	円形	3.3	3.3	1.4	中央	不整円形	30	?	後期	69	
庄原市 川西	境ヶ谷	SB34	方形	4.5	(4.5)	1.2	中央	円形	20	炉	古墳後期	70	
	布掛	SB5	円形	3.2	3.2	1.8	中央	不整円形	25	炉?	後期後半	71	
	布掛	SB11	隅丸方形	4.3	4.3	1.9	中央	楕円	14	炉?	?	71	
	布掛	SB30	楕円	4.1	3.8	2.0	中央	楕円	23	炉?	古墳前期	71	
	布掛	SB31	方形	(4.8)	4.1	2.3	-	-	-	-	古墳中期	71	
	布掛	SB32	円形	3.5	3.5	1.7	中央	円形	18	炉?	後期後半	71	
	布掛	SB36	方形	3.8	3.5	1.5	-	-	-	-	古墳初頭	71	
	布掛 2007	SB II -8	方形	3.1	3.1	0.8	-	-	-	-	古墳前期	72	
	布掛 2007	SB II -9	円形	5.0	5.0	2.0	中央	楕円	30	炉?	古墳前期	72	
	大仙 2 号	SB1	隅丸方形	4.6	4.6	1.7	中央	楕円	25	炉?	中期後半	73	
大仙 2 号	SB5	円形	4.5	4.0	1.9	中央	楕円	20	?	中期後葉	74		
庄原市 三日市	大成遺跡	SB10	長方形	4.5	3.7	1.3	-	-	-	-	古墳中期	75	
	大成遺跡	SB34	長方形	5.4	4.0	2.3	軸外	円形	50	?	古墳中期	75	

地域	場所	遺跡名	遺構名	平面形	規模			中央土坑				時期	文献
					長	短	柱間隔	位置	形状	深さ	機能		
備後 北部	庄原市 七塚	浅谷山東B地点	SB7	方形	4.4	4.0	1.4	-	-	-	-	古墳後期	76
		岡山A地点 1991	SB7	長方形	4.8	4.0	1.7	-	-	-	-	古墳終末	77
	上原	岡山A地点 1999	SB10	隅丸方形	3.8	3.5	1.9	中央	不整形	16	炉	古墳前期	78
		小深	SB6		-	-	-	-	-	-	-	古墳前半	79
	庄原市 高町	宮脇	SB03	方形	4.3	3.6	1.8	-	-	-	-	古墳後期	80
		宮脇	SB06	方形	5.3	4.3	1.8	-	-	-	-	古墳後期	80
	庄原市 口和	稲干場第2号古墳	SB1	隅丸方形	4.5	4.5	3.1	中央	隅丸長方形	23	?	後期中葉	81
		石谷3号	SB1	方形	(4.8)	4.4	1.2	-	-	-	-	古墳後期	82
		原畑	SB8	隅丸長方形	3.7	3.6	0.9	-	-	-	-	古墳後期	83
		原畑	SB16	隅丸長方形	5.3	4.1	1.9	-	-	-	-	古墳中期	83
	三次市 向江田	深茅	SB5	隅丸長方形	4.6	3.7	1.2	-	-	-	-	古墳中期	84
	三次市 和知	河原田2号	SB305	方形	(4.0)	(4.0)	1.6	中央	不整形	6	炉	古墳後期	85
		和知白鳥	SB3a	長方形	4.8	4.0	1.6	-	-	-	-	古墳中期	86
		和知白鳥	SB7	長方形	4.2	3.7	1.1	-	-	-	-	古墳後期	86
		和知白鳥	SB14	方形	3.4	3.2	1.4	軸外	楕円	15	炉		86
		和知白鳥	SB15	隅丸長方形	3.6	3.1	1.3	軸外	円形	6	炉	古墳後期	86
		和知白鳥	SB20	長方形	4.3	3.5	1.5	-	-	-	-	古墳後期	86
		和知白鳥	SB22	方形	3.9	3.5	1.0	-	-	-	-	古墳後期	86
		和知白鳥	SB24	方形	4.7	4.4	1.1	-	-	-	-	古墳後半	86
		和知白鳥	SB27	方形	3.2	3.0	0.9	-	-	-	-	古墳中期	86
		和知白鳥	SB29	方形	3.3	2.8	1.2	軸外	ピット2	-	?	古墳中期	86
		和知白鳥	SB30	方形	3.8	3.7	1.2	-	-	-	-	古墳後半	86
		和知白鳥	SB31	方形	3.2	3.2	1.0	軸外	楕円形	10	炉	古墳後半	86
		和知白鳥	SB36	隅丸方形	4.0	4.0	1.6	軸外	円形	35	炉?	古墳後半	86
		和知白鳥	SB37	楕円	4.4	3.6	1.6	-	-	-	-	古墳後半	86
		和知白鳥	SB38	長方形	4.5	3.8	1.3	-	-	-	-	古墳後半	86
	和知白鳥	SB45	長方形	3.1	2.6	1.1	-	-	-	-	古墳後半	86	
	三次市 四拾貫	三重1号	SB5	長方形	4.3	3.0	1.3	中央	不整形	6	炉	古墳後半	87
		三重1号	SB11	方形	3.9	3.6	1.2	-	-	-	-	古墳後半	87
		三重1号	SB16	方形	3.6	3.3	1.8	-	-	-	-	古墳後半	87
		三重1号	SB23	方形	3.5	3.2	1.0	-	-	-	-	古墳中期	87
		三重1号	SB25	長方形	4.7	4.0	1.5	-	-	-	-	古墳後期	87
		風呂谷	SB4	方形	-	3.7	1.4	-	-	-	-	古墳後期	88
風呂谷		SB13	方形	4.1	3.0	1.4	-	-	-	-	古墳後期	88	
風呂谷		SB15a	方形	4.9	-	1.4	中央	円形	7	炉	古墳後期	88	
風呂谷		SB15b	方形	4.9	-	1.7	中央	円形	10	炉	古墳後期	88	
風呂谷	SB16	方形	3.5	3.4	1.0	-	-	-	-	古墳後期	88		
三次市 下志和	大歳	SB4	長方形	4.2	3.7	0.7	-	-	-	-	古墳後期	89	
	大歳	SB5	長方形	4.6	3.5	2.5	-	-	-	-	古墳後期	89	
三次市 海渡	帰海寺谷	SB4	方形	3.6	3.6	1.1	-	-	-	-	古墳後期	90	
	帰海寺谷	SB5	方形	(6.0)	4.8	1.9	-	-	-	-	古墳中期	90	
三次市 南畑敷	高峰	SB5	方形	4.3	4.3	1.3	軸外	円形	6	?	古墳中期	91	
	高峰	SB6	L字形	5.0	4.3	1.5	軸外	円形	40	?	古墳中期	91	
	高峰	SB7	方形	3.5	3.5	1.0	-	-	-	-	古墳中期	91	
三次市 三良坂町	宮風呂	SB2	楕円	(3.5)	(3.5)	1.2	-	-	-	-	古墳中期	92	
	道が曾根	SB7a	隅丸長方形	5.7	(4.2)	1.7	軸外	楕円	8	炉?	古墳終末	93	
	道が曾根	SB53	隅丸長方形	(3.0)	(3.0)	1.5	中央	長方形	5	炉?	古墳終末	93	

地域	場所	遺跡名	遺構名	平面形	規模			中央土坑				時期	文献			
					長	短	柱間隔	位置	形状	深さ	機能					
備後 北部	三次市 三良坂町	大谷	SB15	方形?	(3.6)	(3.0)	1.2	-	-	-	-	古墳終末	94			
		油免	SB57	不整形円形	5.0	4.5	2.7	中央	円形	23	炬?	後期中葉	95			
		油免	SB65	円形	3.1	3.0	1.6	中央	楕円	15	?	後期中葉	95			
		油免	SB71	円形	4.2	3.8	2.4	中央	円形	28	?	後期中葉	95			
		油免	SB3	隅丸方形	4.6	4.5	2.1	-	-	-	-	古墳前期後半	95			
		油免	SB38	円形	4.1	3.7	2.1	中央	不整形円形	31	炬?	古墳前期前半	95			
		油免	SB62d	隅丸長方形	4.0	3.3	1.6	中央	楕円	20	炬?	古墳後期 ~古代	95			
		杉谷B地点	SB14c	長方形	3.7	2.8	2.0	-	-	-	-	古墳後期	96			
		杉谷C地点	SB5	隅丸方形	5.0	4.5	1.2	中央	長円形	15	?	中期後葉	96			
	杉谷C地点	SB8	楕円	6.5	5.2	1.7	-	-	-	-	中期後葉	96				
安芸 北部	安芸高田市	向原	1号	円形	7.6	7.6	2.3	中央	-	-	炬?	後期末	97			
		高宮町	植谷	SB3	楕円	3.1	2.8	1.6	中央	楕円	11	炬	後期前半	98		
	北広島町	千代田町	京野	SB27	隅丸長方形	4.3	3.0	1.8	-	-	-	-	後期前葉	99		
			京野	SB28	隅丸長方形	4.2	2.8	2.0	-	-	-	-	後期前葉	99		
			京野	SB29	隅丸長方形	4.0	2.8	2.3	軸外	楕円	10	炬?	後期中葉	99		
			京野	SB30	長方形	4.1	3.1	2.3	軸外	円形	10	炬	後期中葉	99		
			宮城古墳群	SB1	長方形?	4.5	4.5	2.0	-	-	-	-	後期	100		
	北広島町	大朝町	岡の段A地点	SB5	円形	3.8	3.8	1.0	中央	円形	15	炬	前期	101		
			岡の段A地点	SB6	円形	4.3	4.1	0.9	中央	円形	15	?	前期	101		
			岡の段A地点	SB7	円形	5.4	5.0	0.8	中央	円形	20	?	中期	101		
			岡の段C地点	SB16	円形	3.0	2.7	1.3	中央	円形	18	炬	後期	102		
			岡の段C地点	SB17a	円形	4.8	4.8	2.4	中央	円形	19	炬	後期	102		
			岡の段C地点	SB17b	円形	4.0	4.0	1.5	-	-	-	-	後期	103		
			岡の段C地点	SB18	方形	4.3	3.8	1.7	-	土坑3	-	-	古墳中期	102		
			岡の段C地点	SB25	円形	6.4	6.0	1.3	中央	不整形円形	29	?	前期	102		
			岡の段C地点	SB26	円形	4.8	4.5	1.2	中央	円形	22	?	前期	102		
			杉ヶ迫	SB1	楕円	3.6	3.2	2.4	中央	不整形円形	10	炬	後期後半	103		
			北広島町	豊平町	中筋	SB1	方形	4.1	3.5	1.7	-	-	-	-	古墳後期	104
					中筋	SB3	台形	3.2	2.7	1.6	-	-	-	-	古墳後期	104

※中央土坑の機能欄について

炬：焼土面や埋土中の炭化物など根拠があるもの、炬?：根拠の記載が無いが炬と報告されているもの、空欄：炬とは考えられないもの

※時期の欄について

弥生時代は時代区分を省略表記する。例) 後期後半=弥生後期後半

参考文献

- 1 広島市教育委員会『国重城跡発掘調査報告』1982年
- 2 広島市教育委員会『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』1984年
- 3 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』1990年
- 4 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線(石内バイパス)道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988年
- 5 (財)広島市歴史科学教育事業団『黒谷遺跡発掘調査報告』1995年
- 6 (財)広島市文化財団『長尾遺跡』1999年
- 7 (財)広島市文化財団『大町七九谷遺跡群』1999年
- 8 (財)広島市歴史科学教育事業団『城の下A地点遺跡発掘調査報告』1991年
- 9 広島市教育委員会『高陽台遺跡群発掘調査報告』1982年
- 10 (財)広島市文化財団『段之原山遺跡』2006年
- 11 (財)広島県教育事業団『塔之原遺跡—一般国道2号改築工事(安芸バイパス)に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書—』2006年
- 12 (財)広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅷ)』1992年
- 13 (財)広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅸ)』1993年
- 14 (財)広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群I』1990年
- 15 東広島市教育委員会『浄福寺遺跡発掘調査報告書』1984年

- 16 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群Ⅲ』1993年
- 17 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ』1993年
- 18 広島県教育委員会『西本遺跡群－A・B・C地点－』1976年
- 19 東広島市教育文化振興事業団『西本2, 3・4, 7号遺跡発掘調査報告書』1999年
- 20 (財) 東広島市教育文化振興事業団『西本6号遺跡発掘調査報告書1』1996年
- 21 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『西本6号遺跡』1997年
- 22 東広島市教育委員会『埋蔵文化財調査報告』1993年
- 23 (財) 東広島市教育文化振興事業団『高屋東2号・3号遺跡発掘調査報告書―一般国道375号(東広島道路)道路改良事業に係る発掘調査―』2008年
- 24 東広島市教育委員会『埋蔵文化財調査報告書』1985年
- 25 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群Ⅴ』1993年
- 26 (財) 東広島市教育文化振興事業団『溝口2号遺跡発掘調査報告書』2005年
- 27 (財) 東広島市教育文化振興事業団『溝口4号遺跡発掘調査報告書』2010年
- 28 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『金平山遺跡・貞付谷遺跡』1992年
- 29 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『下上戸遺跡』1996年
- 30 (財) 東広島市教育文化振興事業団『下上戸遺跡発掘調査報告書』1996年
- 31 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅴ)』1990年
- 32 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『奥田・是石・鷺田・藤田―一般国道375号道路改良工事に伴う発掘調査―』1989年
- 33 広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『西条第1土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)』1983年
- 34 東広島市教育委員会『西条第1土地区画整理事業内埋蔵文化財発掘調査報告書』1992年
- 35 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『西条第1土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』1993年
- 36 創建ホーム(株)・大成エンジニアリング・(株) 東広島市教育委員会『横田1号遺跡発掘調査報告書』2012年
- 37 (財) 東広島市教育文化振興事業団『吉光谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ』2001年
- 38 建設省中国地方整備局・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『大槇遺跡群 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1985年
- 39 (財) 東広島市教育文化振興事業団『小越遺跡発掘調査報告書』1997年
- 40 東広島市教育委員会『徳政遺跡発掘調査報告書』1982年
- 41 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『中屋遺跡B地点発掘調査報告Ⅰ』1998年
- 42 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『松永バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告』1984年
- 43 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅵ)』1991年
- 44 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅶ)』1991年
- 45 広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『石槌山古墳群』1981年
- 46 広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『長迫遺跡発掘調査報告書』1982年
- 47 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『石槌権現遺跡群・茜ヶ峠遺跡発掘調査報告』1985年
- 48 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『石槌権現遺跡群発掘調査報告』1981年
- 49 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳』1998年
- 50 広島県教育委員会『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』1976年
- 51 新市町教育委員会『汐首・後池』1996年
- 52 広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡』1981年
- 53 神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅹ』1989年
- 54 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅺ)』1990年
- 55 (財) 広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川第1号遺跡(G～J地区)』2008年
- 56 (財) 広島県教育事業団『曾川1号遺跡(L・M地区)一般国道486号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』2010年
- 57 (財) 広島県教育事業団『金井原遺跡発掘調査報告書』2009年
- 58 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『田龍遺跡』1997年
- 59 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『隠地上組遺跡』1984年
- 60 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『宮山2号遺跡発掘調査報告書』1999年
- 61 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『和田原遺跡』1988年
- 62 庄原市教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』1999年
- 63 簡易保険福祉事業団 庄原市教育委員会『和田原C地点遺跡発掘調査報告書』2001年
- 64 庄原市教育委員会『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2004年
- 65 広島県教育委員会(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『西山・小和田・永宗 国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』1982年
- 66 庄原市教育委員会『庄原市上野総合公園遺跡群Ⅱ 小和田遺跡』2009年
- 67 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』1973年

- 68 庄原市教育委員会『則清1・2号遺跡』1993年
- 69 庄原市教育委員会『割谷遺跡発掘調査報告書－庄原市外四ヶ町連合衛生施設組合一般廃棄物処理施設整備事業（汚泥再生処理センター建設工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査－』2002年
- 70 広島県教育委員会（財）広島県埋蔵文化財調査センター『境ヶ谷遺跡群－庄原養鶏団地造成に係る埋蔵文化財の調査－』1983年
- 71 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『地域高規格道路江府三次線（一般国道183号）道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（2）布掛遺跡・大仙1号遺跡・大仙2号遺跡発掘調査報告書』2003年
- 72 （財）広島県教育事業団『布掛遺跡・大槇神遺跡 一般国道183号（高道路）に係る発掘調査報告書』2007年
- 73 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『地域高規格道路江府三次線（一般国道183号）道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（2）布掛遺跡・大仙1号遺跡・大仙2号遺跡発掘調査報告書』2003年
- 74 （財）広島県教育事業団『大仙2号遺跡 一般国道183号（高道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査』2008年
- 75 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『大成遺跡』1989年
- 76 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山東B地点』1992年
- 77 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『岡山A地点遺跡』1994年
- 78 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『国営備北丘陵公園整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 岡山A地点遺跡・清水4号遺跡・清水6号遺跡』1999年
- 79 （財）広島県教育事業団『浅谷山西古墳・浅谷山1号遺跡・小深遺跡 国営備北丘陵公園整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』2010年
- 80 （財）広島県教育事業団『宮脇遺跡発掘調査報告書 地域高規格道路江府三次道路（一般国道183号）道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』2004年
- 81 （財）広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（22）稲干場第2～4・9号古墳』2012年
- 82 （財）広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（26）石谷2号遺跡 石谷3号遺跡』2013年
- 83 （財）広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（24）番久遺跡・原畑遺跡』2013年
- 84 三次市教育委員会『深茅遺跡・岩脇遺跡』2013年
- 85 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『河原田2号遺跡・寺の前古墓』1992年
- 86 （財）広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（19）和知白鳥遺跡2』2012年
- 87 （財）広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（28）三重1号遺跡』2013年
- 88 （財）広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（31）風呂谷遺跡・風呂谷古墳』2014年
- 89 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『大歳遺跡』1994年
- 90 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1997年
- 91 広島県教育委員会『緑岩古墳－三次地区工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』1983年
- 92 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『宮風呂遺跡発掘調査報告書』1988年
- 93 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅱ）』1998年
- 94 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅵ）－太谷遺跡の調査－』2003年
- 95 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅳ）－油免遺跡の調査－』2003年
- 96 三良坂町教育委員会『杉谷遺跡群』2003年
- 97 高宮町教育委員会『向原遺跡』1989年
- 98 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『植谷遺跡・根野見遺跡・植谷古墳発掘調査報告書』2002年
- 99 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）』1998年
- 100 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅱ）』1993年
- 101 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅲ）』1993年
- 102 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅳ）』1994年
- 103 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅲ）』1993年
- 104 （財）広島県埋蔵文化財調査センター『国営広島県北部土地改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1997年

2 近世

(1) 遺跡の性格について

今回の調査では、近世の遺構として石垣 1 基や柱穴群・土坑 25 基・溝状遺構 1 基、性格不明遺構 1 基を、また、出土物として近世陶磁器・土師質土器等を確認した。しかしながら、調査区の大部分は畑として後世まで使用され、また、近年の土取りによる削平部分が多く存在するなど、遺存状況はよいものではなかった。しかしながら調査区の西半分には遺構は集中し、石垣の範囲からも近世の施設は調査区の西半分にあったと考えられる。

今回確認した近世遺構の性格について考察したい。広島藩が文政 8 年（1825）に編纂した地誌である『芸藩通志』には、上瀬野村の廃寺として廃伊福寺と廃清道寺についての記載がある。このうち廃清道寺については「地名を堂の原とよぶ、地蔵堂一字あり、其外址礎所々に遺り、古墓もあり」と記されている。廃清道寺の正確な場所は明らかではないが、絵図上では遺跡の立地する付近に描かれていること、現在は「堂の原（どうのはら）」の地名はないが、遺跡の所在する地名（字名）が「塔之原（とうのはら）」であり読みが類似すること、記載にある地蔵堂や古墓（五輪塔）が存在することから、本遺跡の所在地とほぼ一致する。また、地元住民のからの聞き取りによると、今回の調査区の南側、第 1 次調査の調査範囲付近に廃清道寺跡が存在したと伝えられている。調査範囲西側の山林内にも井戸跡が 2 基確認できる状況を考慮すると、今回確認された近世石垣・柱穴群・土坑等の遺構は廃清道寺跡に関するものと考えられる。

石垣の南側の平坦面からは多数の柱穴を検出したが、明確な建物跡を示す組み合わせや遺構の確認はできなかった。前述したとおり『芸藩通志』には廃清道寺に地蔵堂があった記述があり、現存の地蔵堂がこれに該当するものと考えられる。しかし、現存する地蔵堂は明治 29 年 4 月 10 日及び昭和 34 年 2 月 28 日に移設・改築している記録¹⁾があり、元々が現在の位置にあったかどうかは定かではない。廃清道寺跡が調査区の南側斜面にあったと伝えられることから、本調査区は寺院本体ではなく、入り口部分、もしくは旧地蔵堂などの寺院に付随する施設が存在した場所と考えられる。

出土物からみると、復元は出来なかったが一般に使用するものよりもかなり大きな土師質鍋片の出土が目立った。このことは地域の祭事に村民が集まり、炊き出し等をしていたためではないかと想定できる²⁾。また、瓦片が出土しないこと、石垣面に炭化物片が散らばることから、寺院の建物は瓦葺ではなく、茅葺の建物、いわゆる地域のお寺であったと想定できる。

さて、ここで近世面の時期を考察したい。本遺跡から出土した古代以降の土器で最も古いものは 16 世紀末～17 世紀初頭の特徴をもち、概ね 17 世紀後半～18 世紀前半のものを中心に出土する。次に平坦面から出土した土器に付着した炭化物片は出土物使用時、つまりは施設が存在した年代を示していると想定できる。分析土器自体の形式は不明であるが、科学年代測定の結果、AD1731～1785 年に属する可能性が高い。また、石垣面から出土した炭化物片は、出土状況から近世面が火災を受けた時期を示している。他の出土土器の時期と科学年代測定の時期を合わせて考慮すると、廃絶時期は AD1653～1682 年（2σ 25.1%）もしくは AD1762～1803 年（2σ 45.3%）に属す

る可能性が高い。古文書中に廃清道寺の記載があるもので最も古いものには、正徳2年（1715年）に記載された『安芸郡神社仏閣古跡調扣』³⁾がある。文書中には「右清道寺ト申候 超興破壊共二年数相知不申候」とあり、既に破壊されて人々の記憶にはない廃寺として記載されている。このことから火災の時期は、廃寺に伴うものであればAD1653～1682年の時期に属すると考えられる。なお、遺跡内からは18世紀前半の土器も出土する。当地では現在も毎年4月に地元の方々により、地蔵堂と山上神社の祭礼が行われており、廃寺後も祭事のみは連綿と行われていたことが窺える。このことから、廃寺後も本調査区で祭事等が行われていたとも考えられ、火災はしばらく時期をおいて起きたものであればAD1762～1803年に属するものと考えられる。

さて、廃清道寺の由来であるが、『安芸郡神社仏閣古跡調扣』以前の文献での記述は確認できない。1989年におこなった石仏石神等民間信仰調査報告⁴⁾によれば、遺跡の南側山頂に位置する山上神社について「大和大峯山清道寺の末寺廃清道寺より」山上に勧進したと伝えられている。地蔵堂の中には大峯山山頂から吉野の金峯山寺までの道筋を記した明治29年の文書が残されている。ここでいう大和大峯山は、山上ヶ岳の大峯山寺と吉野山の金峯山寺を中心とする修験道に関わる寺院全体をさすものと考えられる。以上のことから廃清道寺は大和大峯山と関わりがあることが想定できる。現在大峯山及び吉野山周辺には清道寺というお寺はない。慶長年間に記された『吉野山絵図』⁵⁾にもその名を確認することはできないことから、清道寺は慶長期以前に存在し広島に勧進した可能性、もしくは吉野山ではなく山上ヶ岳に存在した可能性⁶⁾がある。ただし、今回の調査では出土土器が近世主体であること、第1次調査時には中世から近世のものと考えられる土師質土器が出土しているが、明らかに中世まで下るものがないことから、概ね近世初頭頃に営まれた修験道に関する寺院と想定できる。

(2) 集石土坑について

今回の調査では土坑を25基確認しているが、そのうち10基が土坑内に礫を伴うものであった。集石土坑は出土状況から、掘り込みが20cm以下の浅いもの（Aグループ）・掘り込みが40cm以上の深いもの（Bグループに）大別できる。

Aグループの土坑にはSK1・SK2・SK4・SK6・SK7・SK10が属する。礫の配置に規則性はみられず、掘り込みはSK1・SK4・SK7のように大型のものもあり、石像物の基部などの下部施設とは考えられない。礫は床面や壁面に直接接して詰まっており、掘り方の掘削後もしくは使用後にすぐに置かれたものと考えられるが、掘り込みが浅く、礫で埋めて廃棄したものとは考えにくい。廃清道寺が修験道と関わりのある寺院と想定できることから、宗教的な儀式に伴う施設の可能性がある。

Bグループの土坑にはSK3・SK9・SK11・SK19が属する。SK3・SK9は床面や壁面に礫が直接接して掘り方上部まで詰まっており、礫間に土器片が混じる。これらの礫は状況から土坑の廃棄に伴って投入されたものと考えられる。SK11・SK19からは桶痕跡が確認できた。木桶痕跡の内外には、漆喰・粘土等の水分の漏れを防ぐ施設は確認できないことから、水溜や肥溜のような液体の保存施設とは考えにくい⁷⁾。礫は桶の上面から沈む形で詰まっており、上部のみに留まる。この状況は土坑の廃棄後ある程度時期があき、内部に土砂がたまった状態で上に礫が投機されたものと考え

られる。

3 結び

瀬野川流域を含む広島市東部域は、昭和40年代から調査が進んだ市中央部を占める太田川中～下流域、西部域の八幡川・石内川流域に比して、本格的な発掘調査が始まって間も無い。中でも本遺跡が位置する上瀬野地区における弥生時代から古墳時代にかけての調査は、本遺跡と段之原山遺跡の僅か2例にすぎない。また、県内での近世の寺院跡の地方の寺院跡の調査例も少なく⁸⁾、具体的な状況は明らかではない。上瀬野地区の様相を明らかにするのは、当該時期の集落跡・寺院跡はもちろん、墓制を含めたさらなる調査事例の増加がまたれる。

注

- 1) 現在の地藏堂内に当時の寄進者の記録が保管されている。
- 2) 現在でも遺跡南側山頂に位置する山上神社での祭事のあと、麓の地藏堂で祭事をおこなった後、当地で飲食をおこなっている。現在は仕出し弁当等を利用している様であるが、寺院の存在した当時は炊き出し等で対応していたのではなかろうか。
- 3) 三戸家文書『安芸郡神社仏閣古跡扣』1715年
- 4) 広島市歴史科学教育事業団『石仏石神等民間信仰調査報告』1991年
- 5) 『慶長年間吉野山絵図』国立国会図書館蔵
- 6) 中世には山上や山下の吉野山には多数の寺院があったとされるが、明治元年(1868)の神仏分離令及び明治5年(1872)の修験道廃止令により、複数あった吉野山の子院・諸寺は廃寺となっており、全容は明らかでない。
- 7) 坂中組遺跡出土の埋桶土坑には、内部には廃棄時の河原石が詰まっており、土坑の壁面は漆喰で塗り固められていることから、水溜や肥溜のような液体の保存施設と考えられている。
広島県埋蔵文化財調査センター『坂中組遺跡』2001年
- 8) 県内では近世の修験道に関する寺院跡の調査例として、東海寺跡及び小童遺跡がある。
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(VI)』1994年

I. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。炭化材についても同様である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。本報告では、塔之原遺跡より出土した炭化材に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。

2. 試料と方法

試料は、塔之原遺跡のSH4（焼失住居跡）から出土した炭化材 22 点である。試料の詳細は、結果とともに表 1 に記す。

樹種同定の方法は、次のとおりである。まず、試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の断面を作製した。同定は、落射顕微鏡によって 50 ～ 1000 倍で観察し、木材構造および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

表 1 に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 炭 8, 炭 11, 炭 14, 炭 17, 炭 18, 炭 20, 炭 26, 炭 46, 炭 47, 炭 48, 炭 51, 炭 53, 炭 56, 炭 58, 炭 60, 炭 62, 炭 63, 炭 66, 炭 68, 炭 70, 炭 74

横断面では年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。放射断面では、道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20m、径 40cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 30m、径 2m に達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

2) スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科 炭 36

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴からスダジイに同定される。福島県、新潟県佐渡以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ 20m、径 1.5m に達する。材は耐朽性・保存性はやや低く、建築、器具などに用いられる。

表1 塔之原遺跡における樹種同定結果

試料番号	結果 (学名/和名)
SH4炭 8 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭11 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭14 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭17 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭18 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭20 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭26 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭36 炭化材	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ
SH4炭46 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭47 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭48 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭51 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭53 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭56 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭58 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭60 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭62 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭63 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭66 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭68 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭70 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
SH4炭74 炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ

4. 所見

同定の結果、塔之原遺跡のSH4（焼失住居跡）から出土した炭化材は、クリ 21 点、スダジイ 1 点であった。ほとんどがクリであり、炭 36 のみがスダジイであった。

クリは重硬で保存性が良い材で、柱材などの建築材として比較的良好に使われる樹木であり、縄文時代から柱材としての利用が確認されている。また報告例から見て、山陽地方では竪穴住居の部にクリがよく利用されている。なお、広島県では建築部材の他に西7地点遺跡（古墳時代中期から後期）では槽の同定例があり、古代以降の製鉄跡や炭窯では燃料材、中世以降では下駄や椀などに利用されている。クリは、温帯に広く分布する落葉広葉樹であり、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。スダジイはやや重硬で耐朽・保存性は低い材で、建築部材としては重要視されない木材である。出土例からは礎板や柱などの建築部材、鋤などの農具、鉢などの容器、杭材などに利用されるが、広島県では報告例があまり見られない。スダジイは温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。

いずれの樹種も温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する樹木であり、遺跡周辺に生育していたと考えられる。どちらの樹木も二次林要素であり、周辺の人為干渉によって二次林化した森林からの木材を住居の用材に利用したと推測される。

参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.
 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
 パリノ・サ・ヴェイ（1993）西7地点遺跡出土木製品材同定，東広島ニュー・タウン遺跡群V，広島県埋蔵文化財調査センター - 調査報告書第107集，広島県埋蔵文化財調査センター，p.171-175.
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242.

II. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約 6 万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、塔之原遺跡の遺構構築年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、塔之原遺跡の石垣南側平坦面より土した土器に付着した炭化物、石垣面より出土した炭化材の 2 点である。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）で測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 1 測定試料及び処理

試料名	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	石垣南側平坦面	土器付着炭化物	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No. 2	石垣面	炭化材	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 測定結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、図 1 には暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表 2 測定結果

試料名	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No. 1	28348	-25.11 ± 0.22	174 ± 16	175 ± 15	cal AD1669-1681 (15.8%)	cal AD1666-1686 (17.7%)
					cal AD1739-1754 (17.7%)	
					cal AD1763-1781 (23.5%)	
					cal AD1799-1802 (3.8%)	
					cal AD1938-1944 (7.4%)	
No. 2	28349	-26.80 ± 0.21	203 ± 17	205 ± 15	cal AD1661-1675 (16.5%)	cal AD1653-1682 (25.1%)
					cal AD1777-1799 (32.8%)	
					cal AD1941... (18.9%)	
					cal AD1738-1750 (3.0%)	
					cal AD1762-1803 (45.3%)	
					cal AD1937... (22.0%)	

BP : Before Physics (Present) , AD : 紀元

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(年BP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

塔之原遺跡の遺構構築年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法(AMS法)により放射性炭素年代測定を行った。その結果、石垣南側平坦面より出土した土器付着炭化物は、 175 ± 15 年BP(2σ の暦年代でAD1666～AD1686年, AD1731～AD1785年, AD1796～AD1809年, AD1927年以降)、石垣面より出土した炭化材は、 205 ± 15 年BP(2σ の暦年代でAD1653～AD1682年, AD1738～AD1750年, AD1762～AD1803年, AD1937年以降)の年代値であった。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p.355-363.
 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」, p.3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

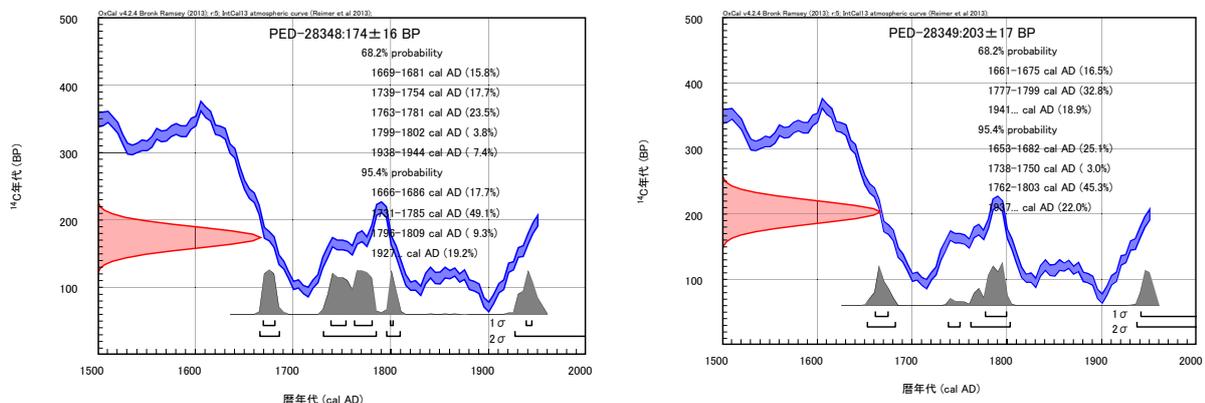


図1 暦年構成結果

Ⅲ. 胎土分析（粘土の材料分析）

1. はじめに

広島市安芸区上瀬野町に所在する塔之原遺跡は、瀬野川と熊野川が合流する台地上にある。ここでは、塔之原遺跡の粘土土坑から採取された粘土について、薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成等の特徴について調べた。

2. 試料と方法

試料は、塔之原遺跡の土坑 SK1 から採取された粘土 1 点である（表 1）。粘土試料は、薄片を作製し、偏光顕微鏡を用いて、微化石類、鉱物類、岩石片の特徴について観察した。なお、この粘土土坑は、古墳時代もしくは中世の遺構と考えられている。

表1 薄片観察を行った粘土試料とその詳細

分析No.	遺跡名	種類	調査区	遺構	堆積物の特徴
1	塔之原遺跡	粘土	8区	粘土土坑 (SK1)	灰白色 (5Y 8/1) 粘土、白色粒子 (1mm以下) 少量混じる

薄片作製は、試料を予め電気炉を用いて 750 度 6 時間で焼成した後、岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ、固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドガラスに接着した。その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ 0.02mm 前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

薄片は、偏光顕微鏡を用いて観察し、薄片全面にみられた微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について記載を行った。

以下に、粘土試料中の粒子を同定または分類する際の各分類群の特徴を示す（表 2）。

表2 胎土中の微化石類と砂粒物の特徴

試料No.	種類	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	粘土	150 μ m - 350 μ m	1.60mm	植物珪酸体化石、骨針化石 (1)、胞子化石	石英・長石類 斜長石 (双晶)、ガラス質、カリ長石 (パーサイト)、複合石英類 (大型)、雲母類、複合石英類 (小型)、複合石英類 (中型)、凝灰岩質、斜方輝石、ジルコン、砂岩質、角閃石類

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは 10 ～数百 μ m 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉 (1988) や安藤 (1990) は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質，石灰質の骨片で，細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが，淡水産としても 23 種ほどが知られ，湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって，骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり，長径約 10～50 μm 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ，イネ科草本やスゲ，シダ，トクサ，コケ類などに存在する。

[胞子化石]

胞子は，直径約 10～30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は，水成堆積物中に多く見られるが，土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英および長石類は，いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち，後述する双晶などのように，光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く，一括して扱う。

[長石類]

長石は，大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は，双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は，細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また，ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は，火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は，花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く，黒色から暗褐色で，風化すると金色から白色になる。形は板状で，へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見えることが多い。花崗岩など，ケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し，変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は，肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し，形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類，ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は，肉眼的に緑色から淡緑色を呈し，柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり，色は黒色から黒緑色で，薄片上では黄色から緑褐色などである。形は，細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような，ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で，電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）

や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[片理複合石英類]

石英，長石類，岩片類などの粒子が集合し，片理構造を示す岩石である。

[砂岩質・泥岩質]

石英，長石類，岩片類などの粒子が集合し，基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質，約 0.06mm 未満のものを泥岩質とした。

[複合石英類]

複合石英類は，石英の集合している粒子で，基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は，粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に，個々の石英粒子の粒径が 0.01mm 未満のものを微細，0.01～0.05mm のものを小型，0.05～0.10mm のものを中型，0.10mm 以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には，堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

[石灰質類]

微小～小型～大型の方解石から構成され，結晶度は低いものから高いものまで見られる。結晶度，構成粒子の大きさなどの構造に基づいて分類される。

[斑晶質・完晶質]

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し，基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

[流紋岩質]

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し，基質は微細な鉱物やガラス質物からなり，流理構造を示す岩石である。

[凝灰岩質]

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち，結晶度が低く，直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

[不明粒子]

下方ポーラーのみ，直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や，変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3. 結果および考察

粘土試料の薄片の顕微鏡観察結果について述べる。

粘土試料の粒子組成については，微化石類や鉱物・岩石片を記載するために，プレパラート全面を精査・観察した。以下では，粒度組成や 0.1mm 前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成，計数も含めた微化石類などの記載を示す。

(1) 微化石類による粘土試料の分類

粘土試料の薄片全面を観察した結果，微化石類（骨針化石と珪藻化石）が検出された。微化石類

の大きさは、放散虫化石が数 100 μm 、珪藻化石が 10 ～ 数 100 μm 、骨針化石が 10 ～ 100 μm 前後である（植物珪酸体化石が 10 ～ 50 μm 前後）。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約 3.9 μm 以下、シルトが約 3.9 ～ 62.5 μm 、砂が 62.5 μm ～ 2mm である（地学団体研究会・地学事典編集委員会、1981）。粘土試料中に含まれる植物珪酸体化石以外の微化石類の特徴は、粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。

粘土土坑の粘土は、含まれていた微化石類により、水成粘土に分類された（表 3）。表 3 において、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出であることを示す。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

・水成粘土（分析No. 1）

この粘土中には、海綿動物の骨格の一部の骨針化石が含まれていた。なお、放散虫化石や珪藻化石は全く含まれていなかった。

表3 粘土および砂粒組成の特徴

分析No.	種類	粘土の特徴							砂粒の特徴							鉱物の特徴							植物珪酸体化石	その他の特徴			
		分類	放散虫化石	珪藻化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	石英	(双晶・累帯斜長石)	(パーサイト)	カリ長石	ジルコン			角閃石類	輝石類	雲母類
1	粘土	水成						△	△	(B)		△	△		△		△	◎	○	△	△	△	△	△	△	○	砂粒分少ない

(2) 粘土中の砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成する鉱物種や構造的な特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。そのため、粘土試料中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に

対応しない。特に、深成岩類の可能性のある複合石英類の場合、構成する鉱物の粒度が大きく、細粒質の砂粒からなる粘土の場合には深成岩類と推定するのが困難となる。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表 4）。岩石の推定は、片理複号石英類が片岩類 (A/a)、複合石英類が深成岩類 (B/b)、複合石英類（微細）や砂岩質が堆積岩類 (C/c)、斑晶質や完晶質が火山岩類 (D/d)、凝灰岩質が凝灰岩類 (E/e)、流紋岩質が流紋岩類 (F/f)、ガラス質または軽石質がテフラ (G/g) などである。

粘土試料中の砂粒組成は、表 4 の組み合わせに従い、主に深成岩類からなる B 群に分類された。

・主に深成岩類からなる B 群（分析No. 1）

この粘土中には、主に複合石英類や斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）からなる深成岩類が含まれている。その他の砂粒では、複合石英類（微細）や砂岩質からなる堆積岩類、凝灰岩類、ガラスからなるテフラを僅かに含む。なお、花崗岩などの深成岩類中に見られるジルコンも含まれていた。

表4 岩石片の起源と組み合わせ

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
		片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg

4. 粘土の特徴

薄片観察を行った粘土は、砂粒分の少ない粘土である。薄片観察により、粘土は骨針化石を僅かに含む水成粘土に分類された。また、砂粒組成では、深成岩類を主としたB群に分類された。

遺跡周辺の地質は、白亜紀後期の広島花崗岩類（図版59のGh）が広く分布する。また、熊野川の上流域には白亜紀後期の流紋岩溶結凝灰岩からなる高田流紋岩類及び匹見層群（図版59のT2）、ジュラ紀の礫質泥岩及び泥岩からなる玖珂層群及びその相当層（図版59のKm）が分布する。塔之原遺跡の所在地には、礫・砂及び泥からなる沖積層（図版59のa）が分布する。

分析を行った粘土土坑の粘土は、遺跡が立地する沖積層の一部と考えられ、骨針化石を僅かに含み、珪藻化石を含まない粘土層と考えられる。また、砂粒物は、周辺の地質環境を反映して深成岩類を主とした組成である。なお、こうした花崗岩類が分布する地域では、カオリナイトなどの粘土鉱物からなる良質な粘土が堆積することが多い。塔之原遺跡周辺においても同様な粘土層が堆積し、土器等の土製品の製作に利用された可能性がある。

5. おわりに

塔之原遺跡の粘土土坑から採取された粘土について、薄片の顕微鏡観察を行った。その結果、薄片観察では、骨針化石を僅かに含む水成粘土に分類され、砂粒において深成岩類を主としたB群に分類された。これは、遺跡周辺の地質環境を反映した結果であり、花崗岩類周辺に堆積した良質な粘土と言える。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42（2），73-88．

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典．1612p，平凡社．

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20．

山田直利・東元定雄・水野清秀・広島俊男・須田芳朗（1986）20万分の1地質図幅「広島」，通商産業省工業技術院地質調査所．

圖 版

図版 1



a 塔之原遺跡（航空写真・東から）



b 塔之原遺跡（航空写真・南から）



a 塔之原遺跡（航空写真・北から）



b 塔之原遺跡（航空写真・北から）

図版3



a 塔之原遺跡（調査前・東から）



b 塔之原遺跡（調査前・西から）



a 集落跡検出状況（航空写真・北から）



b SH1・SH2・SH5（航空写真・北から）

図版 5



a SH3・SH4 (航空写真・北から)



b SH1 遺物出土状況 (北から)



a SH1 遺物出土状況（北から）



b SH1 遺物出土状況（東から）

図版7



a SH1 P3 断面 (北から)



b SH1 P3 (北から)



a SH1 (北から)



b SH2 遺物出土状況 (北から)

図版9



a SH2 P3 断面 (東から)



b SH2 P3 (東から)



a SH2 P1 断面 (北から)



b SH2 (北から)

図版 11



a SH3 焼土面検出状況（北から）



b SH3 焼土面検出状況（西から）



a SH3 P1 断面 (東から)



b SH3 (北から)

図版 13



a SH4 炭化材出土状況（北から）



b SH4 炭化材出土状況（北から）



a SH4 P3 (北から)



b SH4 (北から)

図版 15



a SH5 P1 (西から)



b SH5 (北から)



a SK1 断面 (北から)



b SK1 (南から)

图版 17



出土遺物 (1)



图版 19





出土遺物 (4)



a 近世面検出状況（航空写真・北から）



b 石垣検出状況（航空写真・北から）



a 石垣検出状況（北から）



b 石垣土層断面（北西から）

図版 23



a 石垣面土器・炭化物出土状況（北から）



b 石垣面土器・炭化物出土状況（北から）



a 石垣下層東側土器群（西から）



b 石垣下層東側土器群（北東から）



a 石垣西端部（北から）



b 石垣下層西側土器群（北西から）



a 石垣下層西側土器群（上面・北から）



b 石垣下層西側土器群（西から）

図版 27



a 柱穴群 (西から)



b 柱穴群 (北から)



a P6 上層石材検出状況（西から）



b P6 下層石材検出状況（北から）

図版 29



a P16 石材検出状況（南東から）



b P19 石材検出状況（北から）



a SK1 石材検出状況 (北から)



b SK1 南東部断面 (西から)

図版 31



a SK1 完掘 (西から)



b SK2 (北から)



a SK3 石材検出状況（北から）



b SK3 断面（北から）

図版 33



a SK3 完掘 (北から)



b SK4 石材検出状況 (北から)



a SK4 完掘 (北から)



b SK5・SK6 完掘 (北から)



a SK6 石材検出状況 (西から)



b SK6 断面 (南から)



a SK7 石材検出状況（北から）



b SK7 断面（西から）

図版 37



a SK7 完掘 (西から)



b SK8 (北から)



a SK9 石材検出状況 (北から)



b SK9 断面 (北から)

図版 39



a SK9 完掘 (北から)



b SK10・SK11・P16 (北から)



a SK10 (西から)



b SK11 (北から)

図版 41



a SK11 桶痕跡検出状況（西から）



b SK11 完掘（北から）

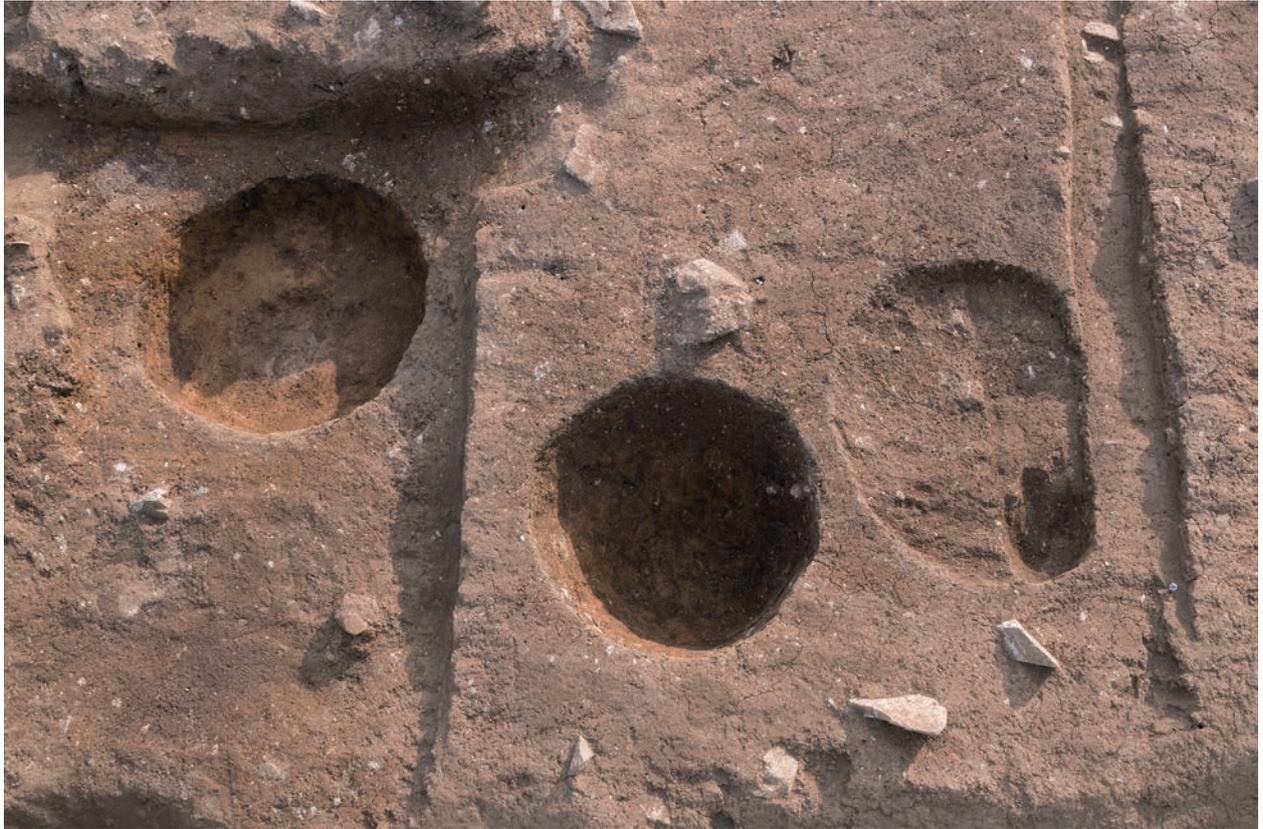


a SK12 (西から)



b SK13・SD1 (北から)

図版 43



a SK14・SK17・SK18 (北から)



b SK14 底面拡大



a SK15・SK16・SX1 炭面検出状況（北から）



b SK15・SK16・SX1 完掘（北から）

図版 45



a SK19 石材検出状況（北から）



b SK19 断面（北から）



a SK19 桶痕跡検出状況 (西半分・東から)



b SK19 桶痕跡検出状況 (東半分・西から)

図版 47



a SK19 完掘 (北西から)



b SK20・SK21 (北から)



a SK22 石材検出状況（北西から）



b SK22 断面（南から）

図版 49



a SK22・SK23 完掘 (西から)



b SK24 遺物出土状況 (北から)

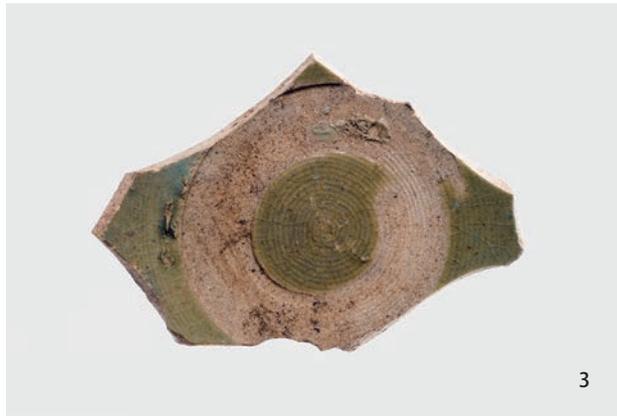


a SK24 完掘 (北から)

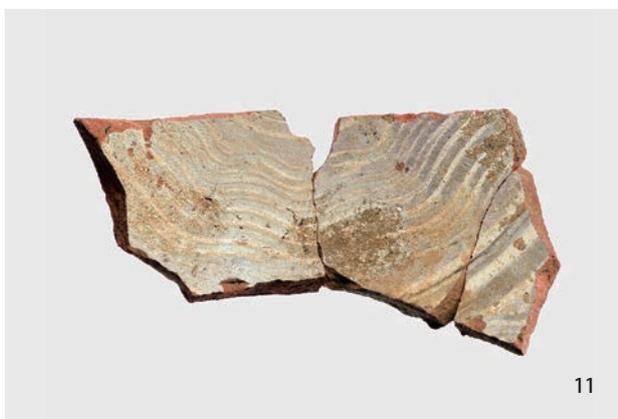


b SK25 (北から)

图版 51



近世出土遺物 (1)



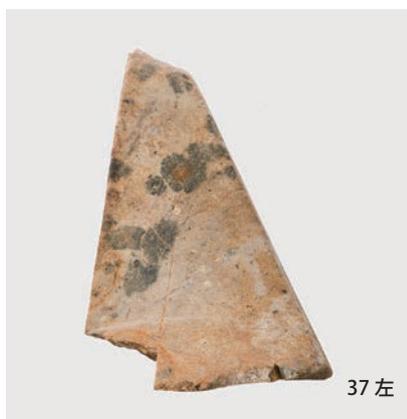
图版 53





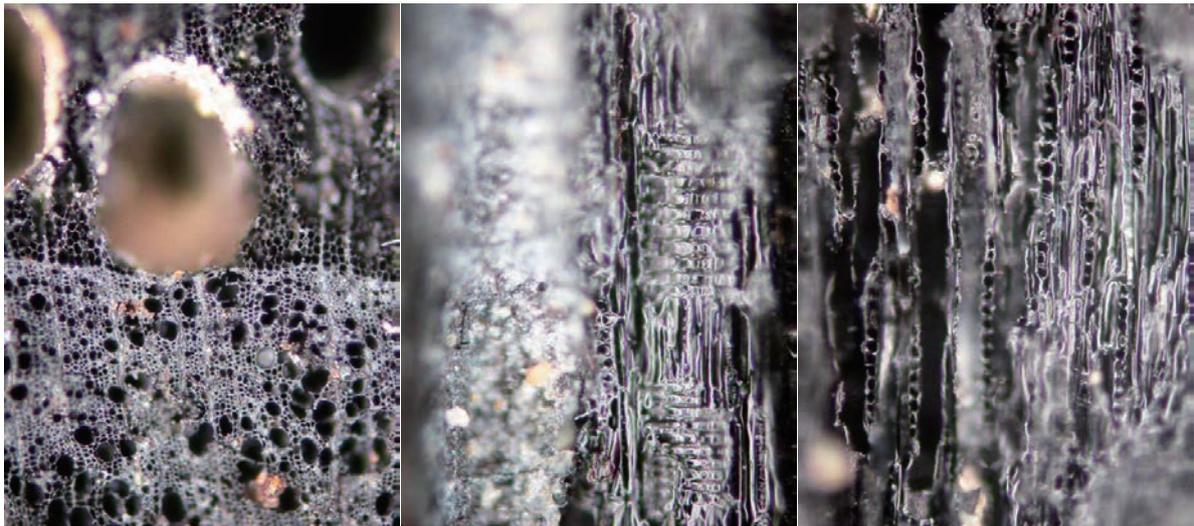
图版 55



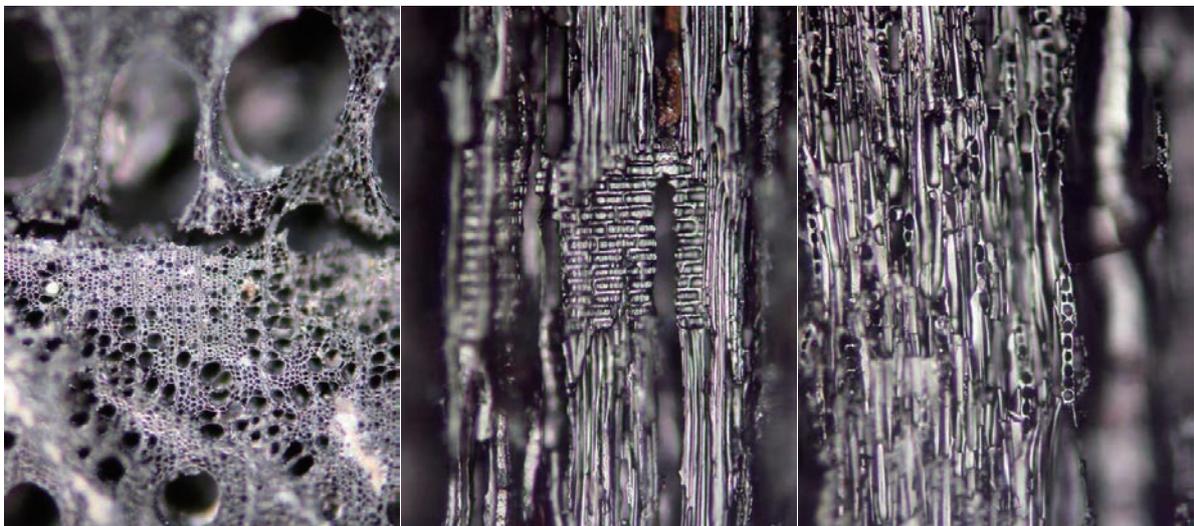


図版 57

塔之原遺跡の木材 I



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
1. クリ 試料番号SH4炭 8

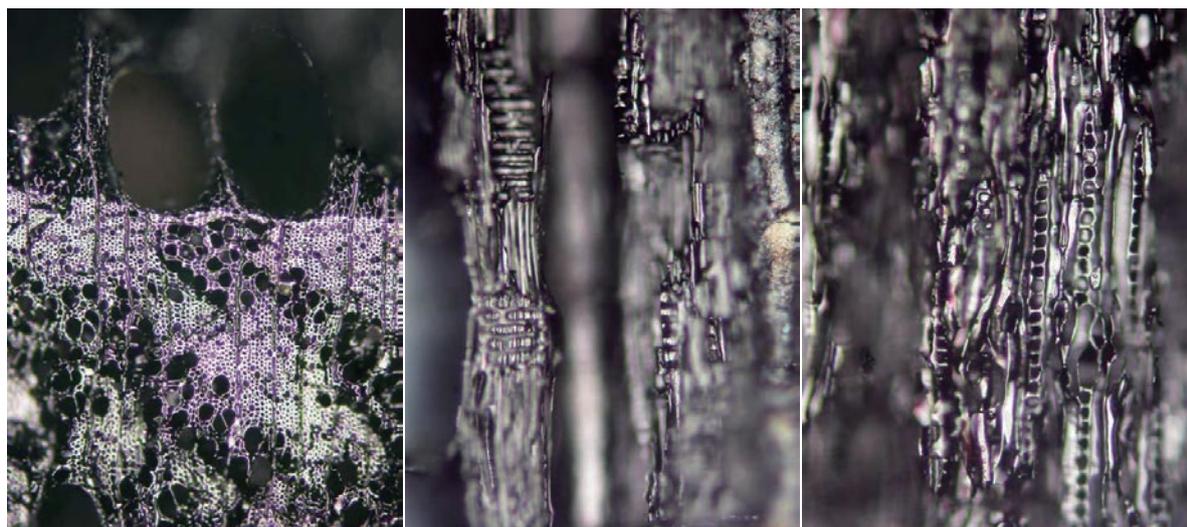


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
2. クリ 試料番号SH4炭11

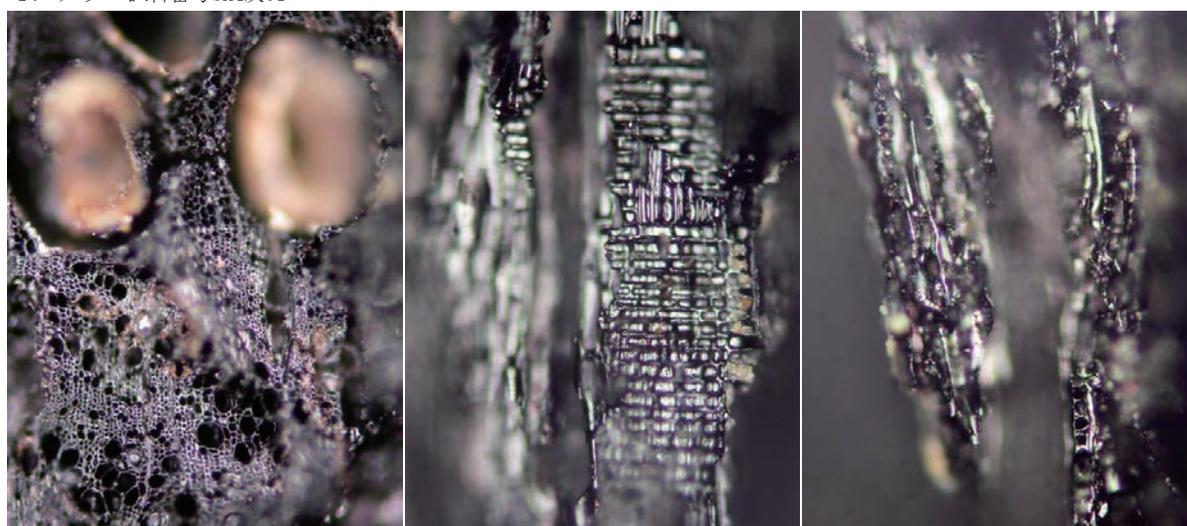


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
3. クリ 試料番号SH4炭20

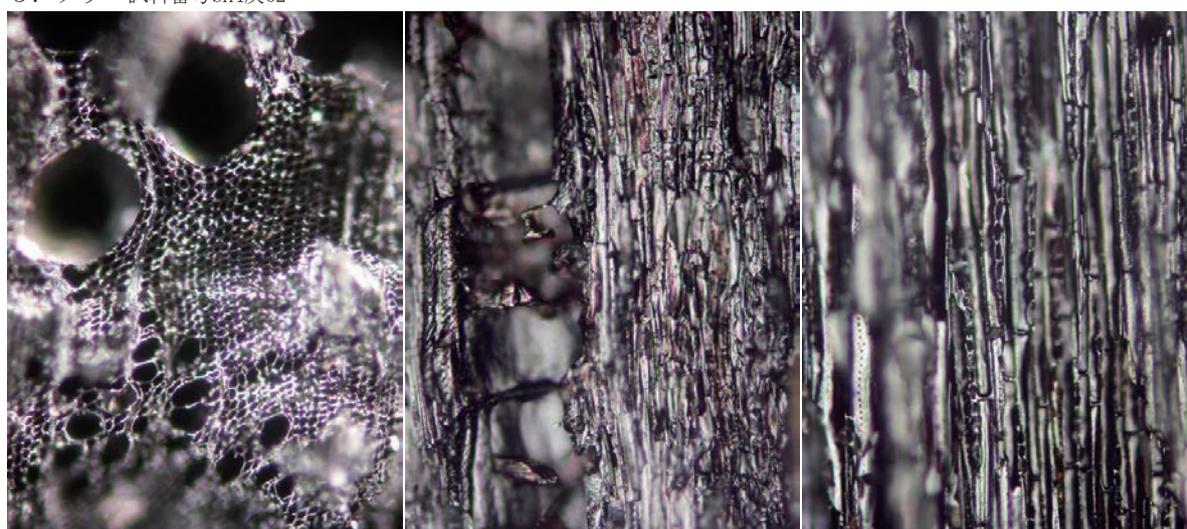
塔之原遺跡の木材 II



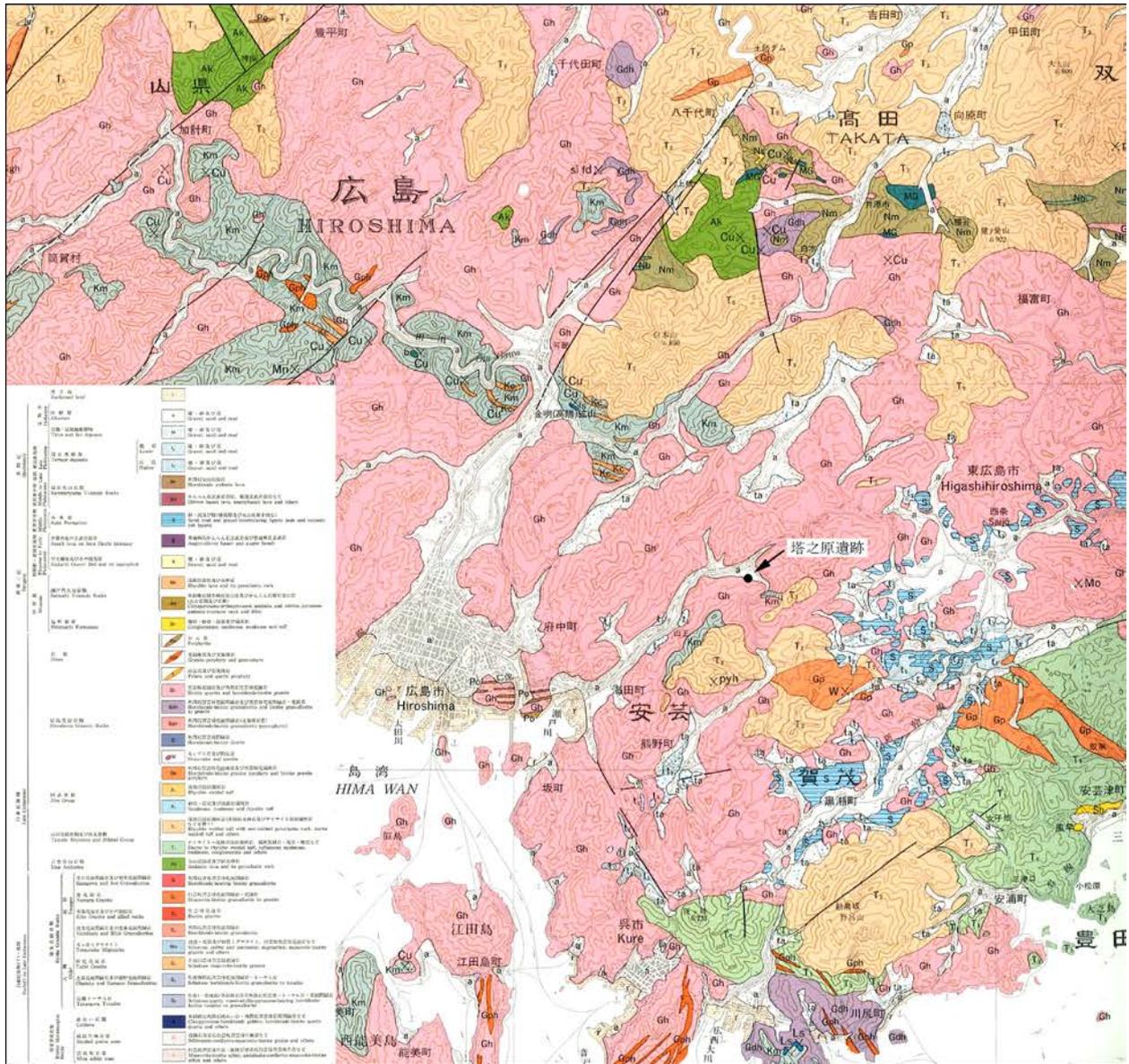
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
4. クリ 試料番号SH4炭51



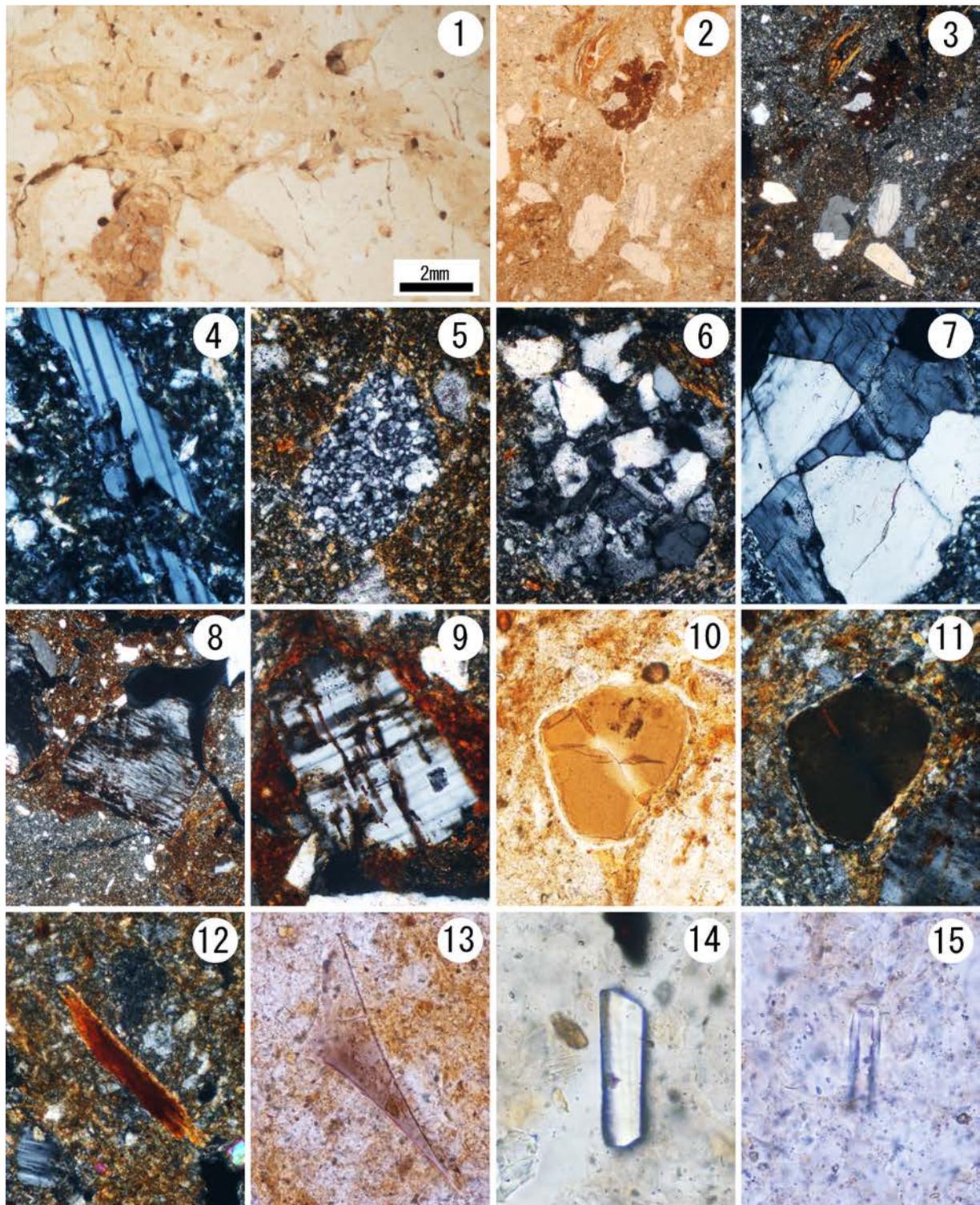
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
5. クリ 試料番号SH4炭62



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
6. スダジイ 試料番号SH4炭36



遺跡周辺の地質図 (山田ほか (1986), 20 万分の 1 地質図「広島」の一部)



(スケール; 2,3,8:500 μ m, 5-7,9-12:100 μ m, 4,13:50 μ m, 14,15:20 μ m)

1. 資料 No.1 の実体顕微鏡写真 2. 資料 No.1 (開放ニコル) 3. 資料 No.1 (直行ニコル) 4. 斜長石 (双晶)
 5. 複合石英類 (小型) 6. 複合石英類 (中型) 7. 複合石英類 (大型) 8. カリ長石 (パーサイト)
 9. 斜長石 (虫食い状) 10. 凝灰岩質 (開放ニコル) 11. 凝灰岩質 (直行ニコル) 12. 雲母類 13. ガラス質
 14. ジルコン 15. 骨針化石

粘土中の粒子の偏光顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	とうのはらいせき ーひろしましあきくかみせのちようしよざいー							
書名	塔之原遺跡 ー広島市安芸区上瀬野町所在ー							
副書名								
シリーズ名	公益財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	牛黄著豊 楳木敬太							
編集機関	公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課							
所在地	〒732-0052 広島県広島市東区光町二丁目15番36号							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうのはらいせき 塔之原遺跡	ひろしまけんひろしま 広島県広島 しあきくかみせのちよう 市安芸区上瀬野町字塔 のほら 之原	34107	—	34° 25' 09"	132° 37' 07"	20140609～ 20141022	945 m ²	一般国道2号 (安芸バイパス) 建設事業に伴う 埋蔵文化財発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
塔之原遺跡	集落跡, 寺院跡	弥生時代終 末～古墳時 代前期, 近 世	住居跡5軒, 土坑1基/ 石垣1基, 土坑25基, 溝状遺構1基, 性格不明 遺構1基		弥生土器, 土師器, 須恵器, 鉄器, 石 器/陶磁器, 土師 質土器, 石器			
要約								
広島市東部の上瀬野地区の緩斜面上に位置する遺跡の第1次調査に続く調査。弥生時代終末から古墳時代前期にかけての住居跡5軒を含む集落跡, 近世の石垣1基, 土坑25基を含む遺構を検出した。 近世遺構面は『芸藩通志』記載の「廃清道寺」跡に関連する遺構と考えられる。								

(公財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第1集

塔之原遺跡

ー広島市安芸区上瀬野町所在ー

2015年3月

編集発行 公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課
〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号
TEL 082-568-6511

印刷 大村印刷株式会社
〒730-0801 広島市中区寺町5番20号
TEL 082-503-1221